





# 機動戦士ガンダム モビルスーツ開発秘録

THE SECRET OF  
MOBILE SUIT DEVELOPMENT  
U.C.0075 0079

MEGALOMANIA 編著

竹書房



史上かつてない破壊と恐怖を巻き起こし、

プロパガンダの二翼も担った

ジオン公国軍の革命的新兵器「モビルスーツ」

U. C. (宇宙世紀) 0079. 01. 03、ジオン公国が「ジオン独立戦争」と呼称した一年戦争が勃発した。

その緒戦となった一週間戦争は、月周回軌道上のスペース・コロニー群サイド1、サイド2、サイド4を主な舞台とした宇宙戦であり、地球連邦軍とジオン公国軍との間に熾烈な戦闘が繰り広げられた。

この戦いで姿を現したのが、ジオン公国軍の新兵器モビルスーツ(MS)である。

MSとは、全高約18mの人型兵器で、絶大なパワーをもたらず核反応炉、全備重量80tにも及ぶ巨体に十分な機動性を与える熱核ロケット・エンジン、巨大機関砲や大型刀剣類による攻撃力、人間のそれに似た四肢ユニットによる多用途性や移動能力などの特徴を持っていた。

しかし、ここでひとつの疑問——兵器に人間のような手脚など必要なのか?——が浮かんでくる。



機能的な付加価値を求める必要がない兵器には、不要なものとは搭載されない。デッドウェイトが嫌われる宇宙用兵器では、特にこの傾向が顕著である。

そうであるならばデッドウェイトに過ぎない手脚ユニットを持つMSなど不合理の塊に過ぎず、電子工学の申し子たる近代兵器、特に宇宙艦に敵うはずもない。

しかし、結果はまったくの逆となった。

一週間戦争において地球連邦軍自慢の宇宙艦隊は、MSの前になす術なく敗れ去ったのである。

地球連邦軍の敗北の要因として、MSの高度な戦闘力以外に、ミノフスキー粒子の存在が挙げられる。

U. C. 0069に存在が実証されたミノフスキー粒子はいくつかの特徴を持つ。その中でもマイクロ波から超長波に至る大半の電磁波を減衰させる「特殊電磁波効果」と、集積回路などの精密電子機器の誤作動の誘発は、レーダーやコンピューターに依存した既存の兵器体系を崩壊させるものであった。

地球連邦との戦争を念頭に置きながらも、圧倒的な国力差を前に開戦に踏み切れなかったジオン公国は、このような特性を持つミノフスキー粒子に勝機を見出した。

不合理に思われた人型という形状は、ミノフスキー粒子散布環境下に対応する兵器を模索した結果、ジオン公国が辿り着いた答えであった。

そして、「MSの代名詞」とも呼ばれるMS・06ザクⅡを完成させたジオン公国は、地球連邦との全面戦争に突入したのである。

一週間戦争で、ザクⅡやその前身であるMS・05ザクⅠが見せた戦闘能力は圧倒的なものであった。

ミノフスキー粒子によって索敵手段と防御手段を大きく制限された地球連邦軍宇宙艦隊は、MSの接近を阻止できず、MSが持つ大口徑機関砲や格闘兵装、そして核バズーカなどによってなす術なく撃沈された。

状況はスペース・コロニー内でも同じであった。

MSは、五本指マニピュレーターは人間の手のようにMSのそれは様々な作業用途に使用でき、スペース・コロニーのハッチの開閉といった細かな作業も可能であった。また、二足歩行システムにより重力下を走ることもできた。

そして何よりも一年戦争緒戦のジオン公国軍は、スペース・コロニーの破壊や住民の殺戮も目的としていたため、コロニー内も安全ではなかったのである。

こうして、一週間戦争とそれに続くルウム戦役で地球連邦宇宙軍を圧倒したMSは、U・C・0079・03・01から始まった地球侵攻作戦において、地球連邦地上軍にその威力を見せ付けることになった。

地上戦において、まず地球連邦軍将兵を震撼させたのは、全高約18mというMSの巨体

であった。

第一次世界大戦でイギリス軍が初めて投入した戦車 Mk I は、それが突入して来る姿だけでドイツ軍を逃散させたというが、全高 18 m のザクⅡが時速数十 km で走る姿が、兵士に与える心理的効果は計り知れなかった。

また、ザク・マシンガンやザク・バズーカは、地球連邦軍地上部隊が頼りにした 61 式戦車を易々と撃破し、肉薄攻撃を慣行した将兵も対人兵器の前に斃れていった。

しかし、性能面だけに限るなら、地上での MS は宇宙ほどの性能を発揮できない。

これは、当時の MS が単独飛行能力を持たなかったことにもよるが、元々宇宙用として設計されていたことがその理由であった。

しかし地上戦での有視界戦闘は、否応なく MS の巨体と、それに伴う高所からの砲撃を敵将兵に見せ付け、心理的影響という面においては宇宙よりも効果があったとされる。

また、MS が地球連邦軍将兵を恐怖させたのは、単に絶大な火力や、巨体が動き回るといふ点だけではない。

高度数百 m からの単独降下能力や、スラスタと脚部を併用した長距離ジャンプ能力、巨体に似合わない軽快な運動性などが、それに当たる。

重力下での MS は、機動性の低下という問題が指摘されるため鈍重なイメージを持たれる。しかし、戦術／戦闘レベルでの機動・運動性は初期のザク・シリーズの時点でも高

かったのである。

このため実戦では、MSの長距離進出や迅速な迂回攻撃が頻繁に行われており、地球連邦軍地上部隊が思わぬ方向からMSの攻撃を受け、被害を出すことも多かった。この状況は、MS1機を積載して飛行可能な航空機ド・ダイYSや、ホバード走行能力を持つMS・09ドムの出現によってより顕著となった。

戦闘レベルでも、サイドステップや腰を屈めるなどの動作（人型兵器だからこそ可能な動作である）で敵弾を回避するケースも多く、歩兵や戦闘車両などがMSに命中弾を与えることは困難であった。

ミノフスキー粒子の影響もあって索敵や通信が限定された状況下で、突如、自部隊の側面や背面に出現したMSによって味方が撃破される様子は、地球連邦軍将兵の戦意を喪失させるに十分なものであった。加えて、MSに対抗可能な地上戦力が事実上存在しないことも、これに拍車をかけていた。

また、地上戦力だけではなく、航空戦力においても状況はほとんど同じであった。

これは、ミノフスキー粒子によってレーダーや誘導弾の効果が低下したためで、宇宙艦同様に電子機器の高度化が徒となってしまったのだった。

こうして、低高度での対地攻撃を余儀なくされた戦闘機や攻撃機は、MSの対空攻撃を受けやすくなり、パイロットも慣れない低空戦闘を余儀なくされたため、甚大な被害を出

した。この状況は、対空砲装備型MSやMS火器用対空砲弾の登場によって更に悪化したのである。

こうして宇宙艦艇、主力戦車を含む地上戦力、航空機といった既存の兵器体系は、ミノフスキー粒子とMSの前に弱体化し、それに伴う地球連邦軍の士気低下は極めて大きなものとなった。

しかし、その中でもまだ地球連邦軍が優勢と思われた領域が存在した。

それが水圏、特に海であった。

地球連邦軍の海洋戦力は、一週間戦争でのコロニー落しで太平洋艦隊に甚大な被害を受けていた。だが、高度な汎用性と多用途性を持ったザクⅡも、海上や海中での運用能力はほとんどなかったため、相応の活躍が期待できたのである。

しかし、唯一残されていた地球連邦軍の優位性も、ジオン公国軍がMSM・03ゴッグやMSM・07ズゴックなどの水陸両用MSの投入によって、消え去ることになった。

水陸両用MSの多くは、汎用性や多用途性は期待できなかったが、水中を時速数十ノットで移動でき、水冷式の大出力核反応炉／ジェネレーターと、それに伴うメガ粒子砲を持ち、更に耐水圧用として極めて強固な装甲までも施されていた。

そして水中だけでなく陸上でも行動可能であり、ザクⅡ以上の攻防力とパワーをもって、上陸作戦や対艦戦闘などで猛威を振るったのだった。

対する地球連邦軍は、空母やその艦載機、潜水艦などを擁していたが、こうした兵器も水陸両用MSの前に次々と撃破されていった。

こうして地球連邦軍の兵器は、ジオン公国軍のMSの前に劣勢に立たされ、地球連邦軍将兵も心身両面において疲弊していった。

地球連邦軍の将兵たちが、MSの前に絶望的状况に追い込まれる中、ジオン公国軍将兵は自軍のMSに大きな信頼を寄せていた。

軍首脳部や前線の将兵たちはMSこそがジオン公国軍を支えていることをよく知っていたのである（もちろん、ギレン・ザビ総帥が謳う「優良種たるジオン公国民」に、優位に展開していた（と喧伝された）戦況の理由を求める者がいないわけではなかったが）。

一週間戦争やルウム戦役での勝利も、地球侵攻作戦での優勢もMSあつてのものであり、その意味ではMSの戦力化を経て、地球連邦との戦争に踏み切ったジオン公国の判断は間違いではなかった。

結果が自信を生むように、既存の兵器を凌駕するMSの能力と戦果は、ジオン公国軍将兵だけでなく国民をも鼓舞したのである。

またジオン公国軍のMSは、曲面を多用した滑らかなシルエットを持つことで知られるが、これは復古調のジオニズム文化運動の影響といわれており、MSの性能と相まって将兵や国民に誇りに結び付いていた。



“ホワイター”こと、エルマー・スネル大尉専用のザクⅡ。彼もジオン公国軍のプロバガンダに用いられた。



地球侵襲作戦の様子を伝えるZWPの映像。地球に降下する大量のHLVと、そこから展開するMS部隊の様子が華々しく報じられた。



ジオン公国は新兵器もプロバガンダに利用した。真相はどうであれ、次々と投入される新兵器は兵士たちの士気を高揚させた。

戦時においては兵器と国民意識は結び付きやすく、人型故に兵士と同一視されやすいMSは、プロバガンダの面でも重要な意味を持っていたといえる。

だからこそジオン公国軍は、純軍事的以外の見地からも地球連邦軍のMS開発を警戒すると同時に、MSを利用したプロバガンダにも余念がなかったのである。

こうしてジオン公国軍のMSは、ミノフスキー粒子散布環境下に対応した革新的な兵器としてだけでなく、かつてないほど強い政治的な意味を与えられた存在ともなっていた。

その開発と戦いを追うことは、ジオン公国そのものを語る上でも極めて重要な意味を持つといえるだろう。

## INTRODUCTION ..... 006

## 第一章 一年戦争開戦前夜 ～MS以前の兵器～ ..... 016

時代背景 宇宙世紀の幕開けと、戦乱の火種 ..... 018

MS開発正史 MSの開発と並行して進められた  
ミノフスキー粒子対応の補助兵器開発 ..... 022

運用実績 MSの支援に徹した非MS兵器の活躍 ..... 032

COLUMN01 ミノフスキー粒子散布環境下に未対応の兵器 ..... 020

COLUMN02 ジオン公国の海軍戦力 ..... 031

COLUMN03 アップデートされたジオン公国軍の艦艇 ..... 035

## 第二章 戦争機運の高まり ～MSの誕生～ ..... 036

時代背景 ジオン公国の戦争機運の高まり ..... 038

MS開発正史 MSの誕生と戦力化に向けた改良 ..... 044

運用実績 ミノフスキー粒子散布環境下におけるMSの能力 ..... 054

COLUMN04 ミノフスキー粒子 ..... 060

COLUMN05 ジオン公国のMS開発企業 ..... 062

COLUMN06 MSとは異なる決戦兵器 ..... 067

## 第三章 一年戦争開戦 ～MSの実戦運用～ ..... 068

時代背景 実戦型MSザク・シリーズの完成と  
一年戦争の開戦、及び地球への侵攻 ..... 070MS開発正史 ジオン公国軍のワークホース  
ザク・シリーズの開発 ..... 072

運用実績 MSの基本戦術確立と一年戦争緒戦の絶大な戦果 ..... 080

COLUMN07 ジオン公国軍の組織編制 01 ..... 077

COLUMN08 パーソナル・カラーとパーソナル・マーク ..... 084

COLUMN09 ジオン公国軍の地球降下戦を支えた機軸 ..... 087



# THE SECRET OF MOBILE SUIT DEVELOPMENT

## 第四章 ジオン公国軍の快速撃と地球侵攻 ～局地戦用MSの開発～ 116

時代背景	地球侵攻作戦の決定と 地球環境に対応した局地戦用MSの必要性	118
MS開発正史	地球全域を制覇した、 ジオン公国軍の局地戦用MSシリーズ	124
運用実績	地球侵攻作戦の完遂を期待されながらも、 戦術レベルの活躍に終わった局地戦用MS	156
COLUMN10	ジオン公国軍の組織編制 02	122
COLUMN11	サブ・フライト・システム	154
COLUMN12	MS以前の陸戦用機動兵器	166

## 第五章 戦争末期のMS開発計画 ～次期主力MSの開発～ 168

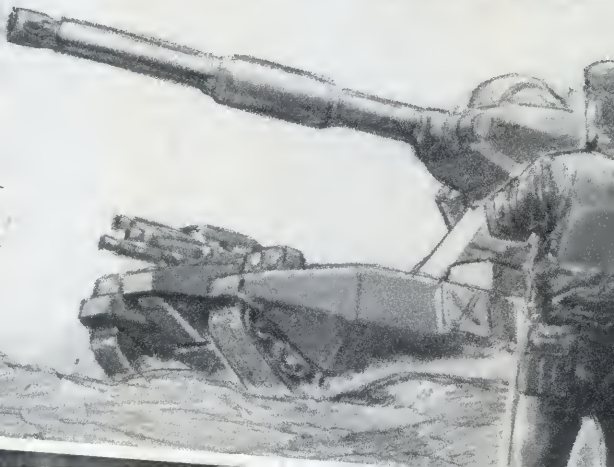
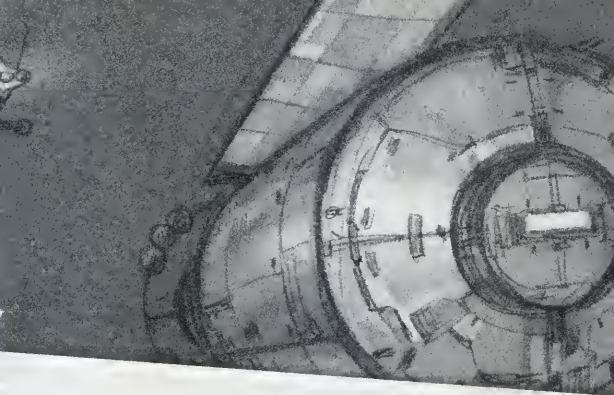
時代背景	新型主力MSを巡る混乱と逼迫した量産化	170
MS開発正史	新たな主力MSと携行ビーム兵器の完成	178
運用実績	戦争末期の戦線を支えた高性能新型MSたち	196
COLUMN13	ジオン公国軍のプロパガンダ	174
COLUMN14	モビルボッド	194
COLUMN15	統合整備計画	202

## 第六章 ニュータイプの戦力化 ～ニュータイプ専用機の開発～ 206

時代背景	ニュータイプの出現と戦力化の研究	208
MS開発正史	サイコミュの完成と ニュータイプ専用機動兵器の誕生	214
運用実績	一騎当千のスペックを持ちながらも 対MS格闘戦に悩まされたニュータイプ専用機	220
COLUMN16	ジオン公国軍の組織構成 03	210
COLUMN17	ニュータイプ研究機関	220
COLUMN18	一年戦争後のニュータイプ関連技術の拡散	230

## 第七章 もうひとつの機動兵器 ～MAの開発～ 242

時代背景	モビルアーマーの開発	244
MS開発正史	フォーマット不在で行われたMAの開発	250
運用実績	MA特有の絶大な攻撃力と白兵格闘戦で見せた脆さ	260
COLUMN19	大気圏再突入式攻撃機構	248
COLUMN20	一年戦争後も継続されたMA開発	264
COLUMN21	一年戦争後の可変MA開発	272



MS以前の兵器

MS誕生

MSの実戦運用

局地戦用MSの  
開発

次期主力MSの  
開発

ニュータイプ  
専用機の開発

MAの開発



## 第一章

# 一年戦争開戦前夜

～MS以前の兵器～

## 宇宙世紀の幕開けと、戦乱の火種

### サイド3の独立運動と地球連邦の圧力

爆発的な人口増加と地球環境の悪化を解決するため、人類は宇宙移民の推進を決定すると共に、それを地球規模で執行する地球連邦を組織した。

宇宙移民政策とは、月周回軌道上に存在する重力が安定した宙域であるラグランジュ・ポイントに人工島「スペース・コロニー」を建設し、そこに地球住民を半強制的に移住させるというものである。

西暦から宇宙世紀への移行、つまりU.C. 0001をもって開始された宇宙移民政策は、棄民政策という側面を持ちながらも順調に進展し、U.C. 0050には地球圏の総人口110億人のうち、90億人の移民が完了したのだった。

しかし、U.C. 0051、地球連邦政府は新規コロニー開発計画の凍結を発表する。これは、事実上の宇宙移民中断を意味しており、移民者たちの反発を生む結果となった。こうして宇宙移民者スペースノイドと地球居住者アースノイドの亀裂が表面化する中、各スペース・コロニーでは地球連邦からの独立機運が高まっていた。

U.C. 0058、月の裏側のスペース・コロニー群サイド3では、後に宇宙世紀最大

の思想家と呼ばれるジオン・ズム・ダイクンの主導によりジオン共和国（歴史学上の呼称。当時からこう呼ばれていたわけではない）が独立宣言を行った。そして、独立を巡って地球連邦政府との間に外交戦を繰り広げたのである。

これを受けた地球連邦政府は、各スペース・コロニーに広がっていた独立機運を掣肘するため、U・C. 0059にはサイド3に対して経済制裁を実施している。さらにU・C. 0060とU・C. 0070には軍備増強計画を推進して地球連邦軍を大幅に強化するなど、政軍両面での圧力を高めていった。

これに対しサイド3でも、U・C. 0062に国防隊を国軍に昇格させるなどの措置を取り、サイド3と地球連邦間の軍事的緊張は高まりを見せていった。

そして、U・C. 0067の地球連邦政府による「コロニー自治権整備法案」の否決と、翌年のジオン・ズム・ダイクン首相の死を受けたサイド3は、U・C. 0069にジオン公国を宣言した。

デギン・ソド・ザビを公王、その長男であるギレン・ザビを総帥としたジオン公国は、国民を選ばれた民「ニュータイプ」と謳う選民思想を広めた。それと共に、軍

備増強を徹底して推し進め、地球連邦との軍事対決路線を決定的なものとしたのだった。



ギレン・ザビ総帥



デギン・ソド・ザビ公王

## ジオン公国軍最初期の艦艇

デギン・ソド・ザビによって切り崩された地球連邦軍サイド3駐留部隊は、ジオン共和国の国防隊から国軍を経て、ジオン公国軍へと再編された。

そのジオン公国軍が、最初期の独自開発兵器として装備したのが、U.C. 0069、10就役のパプア級ミサイル戦艦（後に補給艦）と、U.C. 0070、06就役のチベ級高速重巡洋艦（設計段階では戦艦）である。

一説には、U.C. 0055にサイド3政府が開発に着手したというパプア級とチベ級は、就役当初からミノフスキー・イオネスコ型核反応炉と熱核ロケット・エンジンを搭載していた。しかし、ミノフスキー粒子散布環境下の有視界戦闘には対応しておらず、当然モビルスール（MS）運用能力も考慮されていなかった。

つまり地球連邦宇宙軍と同様、「大艦巨砲主義」と呼ばれるような艦隊決戦を前提とした宇宙艦艇であり、当時としては常識的な兵器であったのである。

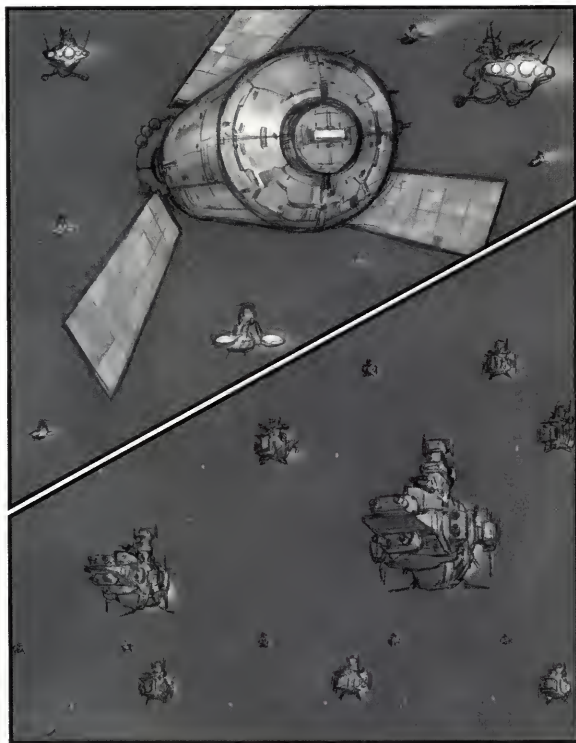
ミノフスキー粒子散布環境下に対応した実戦型兵器の誕生は、ムサイ級軽巡洋艦とMS-05ザクIを待たねばならなかった。



パプア級ミサイル戦艦



チベ級高速重巡洋艦



## MSの開発と並行して進められた ミノフスキー粒子対応の補助兵器開発

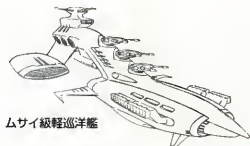
### MS運用母艦の開発

当初からミノフスキー粒子の実戦投入と、その散布環境に対応した新兵器の開発を進めていたジオン公国は、U・C・0073にMSの基本形を完成させると、以降はMSを中心に新兵器開発を進めるようになった。

だがそれは、あらゆる兵器をMSにするということではない。

MSを中心としたドクトリン（教義）を採用するに当たって、宇宙艦艇や地上車両、航空／航宙機などの既存兵器に、MSとの共同運用／支援能力を与える、またはミノフスキー粒子散布環境に対応するため光学系センサーや視認能力を強化するといったものだった。

特に宇宙艦艇には、MS運用母艦としての能力が求められると共に、戦闘支援用や対艦用としてメガ粒子砲を搭載するなどの処置が採られた。



ムサイ級軽巡洋艦

ジオン公国軍最初期の宇宙艦艇である、パプア級ミサイル戦艦とチ



ベ級高速重巡洋艦はMS誕生以前の基本設計であるため、当初はミノフスキー粒子散布環境に対応していなかった。

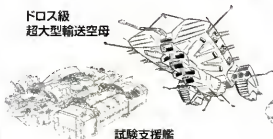
この2種類の艦艇は、地球連邦軍が70年代軍備増強計画で建造したマゼラン級宇宙戦艦やサラミス級宇宙巡洋艦に近い、宇宙戦闘艦だったのである。

MS運用能力とミノフスキー粒子散布環境への対応能力を、設計段階から盛り込んだ最初の宇宙艦艇は、U.C. 0075. 07に就役したムサイ級軽巡洋艦だった。

メガ粒子砲を主砲として採用した初の宇宙艦艇でもあるムサイ級は、MSの運用を可能とするハンガーデッキやカタパルトを持ち、また視認性に優れた艦橋構造物を持つなど、以降の宇宙艦艇の雛形となる画期的兵器であった。

特にMSの整備／駐機場であるハンガーデッキと、MSを加速射出できるカタパルトは、ムサイに本格的なMS運用能力を与えており、単にMSを搭載できるだけの艦艇とは別次元の存在となっていた。更に、MS搭載能力を持つ大気圏突入カプセル「コムサイ」を標準搭載するなど、運用柔軟性の面でも優れた宇宙艦艇であった。

ドロス級  
超大型輸送空母



試験支援艦

グワジン級大型戦艦



ザンジバル級  
機動巡洋艦



ガトル



ゾドン



ジッコ



バンショウ

ムサイ級の完成を受け、チベ級へのMS運用能力付与や、パプア級の補給艦への転用がなされる中、ジオン公国軍は新たな宇宙艦艇を建造した。それが、U. C. 0076.03就役のグワジン級大型宇宙戦艦と、同年6月就役のザンジバル級機動巡洋艦である。

地球とアステロイド・ベルト間の無補給航行能力を持つグワジン級は、艦隊旗艦として運用された。同時に、ザビ家に代表されるジオン公国軍の重要人物が使用する宇宙艦艇でもあり、攻撃力や防御力、機動性、そしてMS搭載数など、あらゆる面でムサイ級を凌駕していた。

ザンジバル級は大気圏内外での運用を考慮した艦艇で、大気圏再突入能力および飛行能力のほか、専用ブースターを装着した場合には大気圏からの離脱も可能な万能艦であった。また、MS運用能力にも優れており、2機のモビルアーマー(MA)を搭載することもできた。

他にも182機ものMS搭載数を誇ったというドロス級超大型輸送空母(開発開始はU. C. 0078.12、二番艦ドロワ就役がU. C. 0079.07)や、多種多様な兵器の試験運用に対応した試験支援艦も配備された。このように、ジオン公国軍宇宙艦艇のほとんどがMS運用能力を持っていたのである。

## ミノフスキー粒子対応の航空機の開発

地球連邦との戦争において、地球上への部隊展開を前提としていたジオン公国軍では、艦艇と平行して大気圏内用兵器の開発も進められていた。

地球上の軍事行動に必要な兵器のひとつとして、航空機が挙げられる。

航空優勢の確保や対地攻撃、部隊の高速展開や物資輸送などで効果を発揮する航空機だが、コロニー国家のジオン公国には航空機に関するノウハウが決定的に不足していた。

また、MSとの共同運用が前提となる以上、ミノフスキー粒子散布環境下にも対応する必要もあり、地球連邦軍機のデッドコピーを生産するわけにもいかなかった。

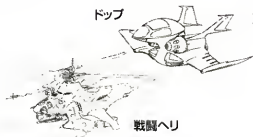
そこでジオン公国では、コンピューターシミュレーションおよび風洞実験と、航空機開発やミノフスキー粒子関連の研究で得られたデータを基に、独自の航空機群を開発したのである。

こうして誕生した機体のひとつが、制空戦闘機のドップであった。

ドップは、ミノフスキー粒子散布環境下の有視界戦闘に対応するため、機首下部にまで広がった大型のキャノピーを持つ点が特徴である。

空力特性には必ずしも優れていないが、機体各部に設けられた補助バーニアにより運動性が高く、ドッグファイト時には地球連邦軍機を圧

ドップ



戦闘ヘリ

倒することも少なくなかった。

ほかに、要撃爆撃機ド・ダイYSや対地攻撃機ド・ダイGA、有線ミサイル搭載の戦闘ヘリコプター、垂直離着陸能力を持つVTOL機、2基のレドームを搭載した偵察機ルグン、ローター推進の小型機コミユなどが実用化されており、航空作戦や支援などに多用されている。

ジオン公国軍最大の航空機が、全長62m、推定全幅100m以上のガウ級攻撃空母である。

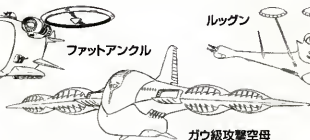
ガウ級は、MS3機とトップ8機を搭載運用可能な空中母艦であると共に、2基の連装メガ粒子砲と対地爆撃能力を持つ重爆撃機でもあり、既存の航空機の発想に縛られないジオン公国ならではの多目的空中プラットフォームとなっていた。

推進器として18発もの熱核ジェット・エンジンを搭載し、巨大な主翼を有している点が特徴である。しかし、空力だけで980tにも及ぶ巨体を飛行させるのは難しく、熱核ジェット・エンジンの推力を下方に振り分けることで何とか飛行可能であった。

さらにはMSの格納輸送が可能な、ツインローター式の輸送機ファットアングルが実用化されており、重力下におけるMSの航空輸送や展開をサポートしていた。



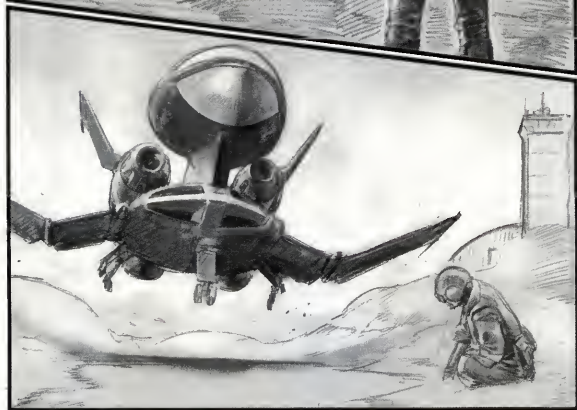
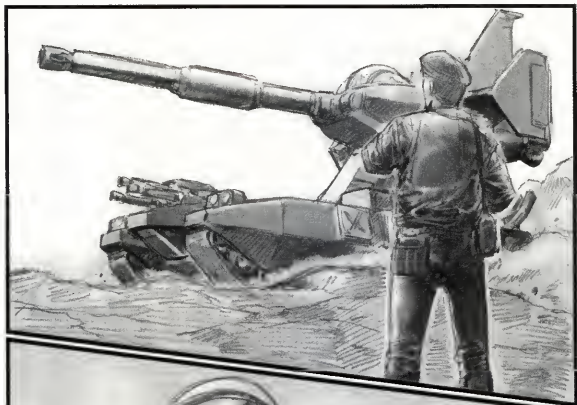
ファットアングル



ガウ級攻撃空母



ルグン



MS以前の兵器

MSの誕生

MSの実践運用

局地戦用MSの  
開発次期主力MSの  
開発ニュータイプ  
専用機の開発

MAの開発

## MSや歩兵部隊の支援などを目的とした地上車両の開発

当初のスペース・コロニー内戦闘では、重戦闘兵器の必要性が低かったことや、電気自動車エレカが一般車両として普及していたことなどから、ジオン公国は戦車をはじめとする重戦闘車両に関するノウハウも少なかった。

一年戦争以前にはジオン公国軍も、主力戦車としてM1を開発していたが、その完成度は地球連邦軍の61式戦車に劣るものでしかなかった。

しかし、MSの絶対数の不足や歩兵部隊の支援、MSでは対処できない任務などに対応するためにも、地上車両は絶対に必要な装備であった。

そこでジオン公国軍は、MSとの連携運用を想定してM1の改修（攻防力向上と機体の大型化）を進めると共に、これをベースとした新型主力戦車の開発を進めた。

こうして誕生したのが、PVN.42/4 マゼラ・アタックである。

マゼラ・アタックは、比較的脆弱な61式戦車の上面装甲を撃ち抜くため、175mm無反

PVN.42/4  
マゼラ・アタック



マゼラ・アイン



動砲装備の砲塔部分を垂直離着陸機マゼラ・トップとしている。

また、車体部分のマゼラ・ベースには35mm三連装機関砲を搭載しており、その総合火力はMS・06ザクⅡに匹敵するものがあった。

マゼラ・アタックのほかにも、M1系列と思われる戦闘車両として空挺戦車マゼラ・アインが実用化されている。

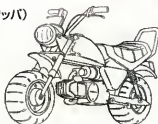
マゼラ・アインは、空輪に対応するため全長7.7m、全幅3.4mと小型であるが、133ミリ戦車砲を搭載しており、コンパクト性と火力を両立した兵器であった。

このほかにも、機関砲搭載の水陸両用装輪偵察警戒車PVN.44/1 WEASEL（ヴィーゼル）や、不整地対応四輪車である軽機動車両PVN.3/2 サウロペルタ、偵察や伝令などに使用された汎用中型オートバイB.M.C Z78/2、パーソナル・ホバークラフトの機動浮遊機PVN.4/3 WAPPA（ワッパ）など、多様な車両が開発された。

PVN.44/1  
WEASEL（ヴィーゼル）



PVN.4/3 WAPPA（ワッパ）



汎用中型オートバイ  
B.M.C Z78/2



VN.3/2 サウロペタ

ダブデ級陸戦艇



ギャロップ

サムソン



装甲戦闘車両や補助車両以外にも、地球連邦軍のビッグ・トレー級陸戦艇に相当する兵器として、ダブデ級陸戦艇が開発されている。

ダブデ級は、全長109mの装軌（キャタピラ）車両で、主に移動司令部として運用された。また、2基の大型連装砲塔を用いた長距離支援攻撃にも使用されたといわれる。

ダブデ級には基本的にMS運用能力を持たなかったが、単独での長距離移動に適さないMSをサポートするため、陸上用MS母艦といえる陸戦艇ギャロップや、MS運搬用トレーラーのサムソンが開発されている。このように、ジオン公国軍では地上戦におけるMS運用ブラットホームの充実も図られていた。

これらの大気圏内用兵器は、地球上での兵器運用の実態を知らないジオン公国軍が、独自の理論やデータを基に開発したものであったが、地球侵攻作戦ではMSをサポートし、ジオン公国軍の進撃を支えたのだった。



## 地球連邦軍のものを改修転用したジオン公国軍の潜水艦

宇宙艦艇のみならず航空機や地上車両でも、独自の新型装備を開発したジオン公国軍だが、海洋戦力、特に潜水艦ではその独自性は発揮されなかった。

海に代表される大規模な水圏のないコロニー国家であるジオン公国は、潜水艦に関する技術を持たなかったのである（サイド3には「海」という名称の海洋コロニーがあり、ここでMSM・03ゴッグの開発と試験が行われている。しかし、潜水艦そのものに関するノウハウ自体がなく、仮に開発できたとしてもこのコロニー自体がそうした大型の兵器の開発や試験には適していなかったと思われる）。そこでジオン公国軍は、地球連邦軍の潜水艦を奪取、改装し、自軍の海洋戦力として組み込んだのである。

地球侵攻作戦で北米の複合軍事施設キャリフォルニア・ベースを占拠したジオン公国軍は、そこに残されていた地球連邦軍の次期主力潜水艦をマッド・アングラー級として、ジュノー級と呼ばれる地球連邦軍潜水艦をユーコン級として改修、転用したのだった。

改修の際、これらの潜水艦にはMS母艦としての機能が付与され、上陸作戦や通商破壊作戦などに投入された。

マッド・アングラー



ユーコン級潜水艦



ユーコン級潜水艦 U-99

## MSの支援に徹した非MS兵器の活躍

### MS運用母艦と

### 火力支援プラットフォームを兼ねた宇宙艦艇

一年戦争によってMSの時代が到来し、宇宙艦艇や戦闘機、戦車などの兵器はMSの支援が主な任務となった。

特に一年戦争緒戦でのMSの活躍は目覚ましいものであり、それ以外の兵器の価値を減じてしまったが、まったく活躍の機会が与えられなかったわけではない。一週間戦争やルウム戦役での宇宙艦艇は、主にMSの母艦や前線司令部として機能した。しかし、これ以外にもメガ粒子砲やミサイルなどを用いた支援攻撃や対艦攻撃、対スペース・コロニー攻撃でも活躍している。

当時のザクⅡやザクⅠは、核バズーカに代表される強力な火器を有していたが、装弾数が少ないこともあって、継続攻撃能力の面ではメガ粒子砲を連続で発射できる宇宙艦艇が優れていた。特に対スペース・コロニー攻撃や対要塞攻撃では、ミノフスキー粒子による命中精度の低下があまり問題にならないため、宇宙艦艇は充分有効な兵器であった。

例えば、ルウム戦役時の一部宙域では、ジオン公国宇宙艦隊と地球連邦軍宇宙艦隊と



人類史上初の宇宙における大規模艦隊戦となったルウム戦役では、砲撃戦が展開され戦艦としての性能が発揮された。



艦後部のMSデッキからザクⅡを射出するムサイ級軽巡洋艦。ムサイ級はジオン公国軍が企図したMS戦術の中核を担った。

の間に宇宙艦隊戦（砲撃戦）が発生し、双方に大きな被害が発生している。

これは、両艦隊がメガ粒子砲を撃ち合った結果であり、メガ粒子砲の威力を見せ付けた戦闘であった。

地球侵攻作戦が開始されるころには、宇宙艦隊同士の大規模戦闘は激減。その反面、ジオン公国軍の小規模宇宙艦隊が、各地でゲリラ的な攻撃を繰り返す地球連邦軍部隊との交戦が増えていた。

この際、月周回軌道を移動できる宇宙艦艇は、MS運用能力を持つ機動部隊として、壊滅状態に陥って戦力を小出しにするしかない地球連邦軍を追い詰めていった。

しかし、一年戦争後期のジオン公国軍は防衛戦の機会が増加したため、機動部隊としての宇宙艦隊は意義を低下させ、宇宙要塞などの防衛部隊として配置されるケースが目立った。

## 大気圏内で活躍した、重力下用兵器群

大気圏内でのMSは、基本的に歩行による移動が中心となり移動手段とするため、砂漠地帯や水圏などでは行動が制限されるため、宇宙空間ほどの戦闘能力や万能性を発揮しにくい。

そのため、航空機や地上車両の有効性が高くなっており、MSの支援兵器として活躍す

MS以前の兵器

MSの誕生

MSの実戦運用

局地戦用MSの  
開発次期主力MSの  
開発ニュータイプ  
専用機の開発

MAの開発

る機会が多かった。

特に有効だったのが、ガウ級攻撃空母や戦闘機ドップなどの航空機である。ドップによる制空戦闘で航空優勢を確保し、ガウ級からの爆撃やMSの降下で、地球連邦軍地上部隊を圧倒する。つまり、MS部隊投入前の露払い役として極めて有用だったのである。

このような戦術は、地球侵攻作戦やジャブロー降下作戦などの大規模攻勢でよく取られたもので、MSを空挺部隊として運用するという意味でも画期的なものであった。

これに対して地上車両は、サウロペルタやワッパなどの軽車両が斥候や偵察などに重用され、マゼラ・アタックやマゼラ・アインなどの重戦闘車両はMSや歩兵部隊の支援に用いられるケースが目立った。

特にマゼラ・アタックは、MSの支援や不足するMS部隊の代用、単独の装甲部隊などとして運用されたほか、一年戦争後期の撤退戦では対MS戦闘を行うこともあった。

陸戦兵器としても強力なMSが存在するため、一見す

ると主力戦車を含む地上車両はあまり価値がないよう

にも思える。だが、生産性に優れるため数を揃えやすい

ほか、歩兵部隊の機械化や支援、MSでは実行しにくい

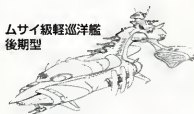
斥候や偵察などに適しているため、ジオン公国軍でも重

要視されていたのである。



ガウ級攻撃空母からMSを降下させる空挺作戦も頻繁に行われた。マゼラ・アタックは、機甲戦力の一翼を担った。

## 改良して使用され続けたジオン公国軍の艦艇



ムサイ級軽巡洋艦  
後期型



ムサイ級軽巡洋艦  
最終生産型

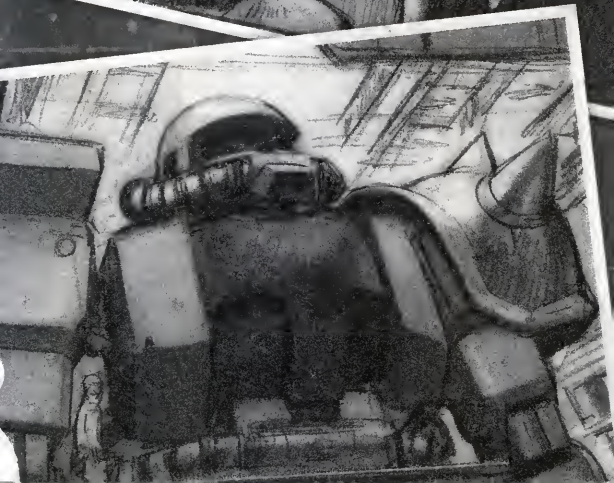
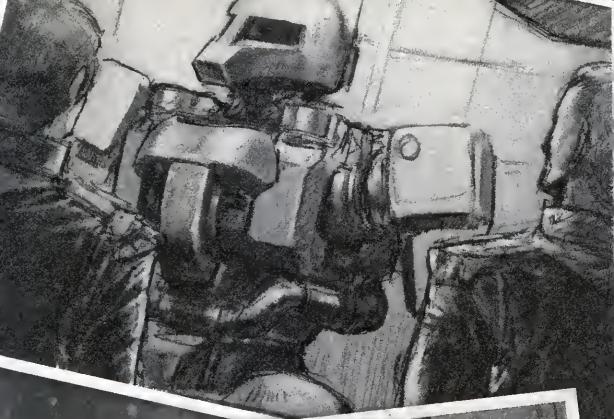


チベ級ティベ型  
高速重巡洋艦

ザクⅡに代表されるMSが度重なるアップデートや改修を受けたように、宇宙艦艇の改良も随時行われていた。中でもムサイ級とチベ級は改修によっていくつかのタイプが建造されている。

ムサイ級には、後期型と最終生産型のふたつのタイプが存在する。後期型は、初期型に火力の増強やMS用ハンガーデッキの拡充を施したタイプで、一年戦争後もジオン公国軍残党が使用しており、「ペールギユント」が知られている。また、最終生産型はメガ粒子砲塔を減らすなどして生産性を向上させたタイプで、グラナダ基地に配備された「ジークフリート（艦体番号102）」と「ヴァルキューレ（艦体番号103）」がある。

チベ級の発展型として、艦首の左右にカタパルトを設置するなどの改装を施し、MS運用能力を高めたティベ型が建造されている。ティベ型はごく少数が就役したのみといわれているが、そのうちの1隻である突撃機動軍所属の「グラーフ・ツェペリン」はルビコン作戦に参加したことで知られる。



MS以前の兵器

MSの誕生

MSの実戦運用

局地戦用MSの  
開発

次期主力MSの  
開発

ニキータ  
専用機の開発

MAの開発



## 第二章

### 戦争機運の高まり

～MSの誕生～

## ジオン公国の開戦機運の高まり

### ミノフスキー粒子対応兵器の開発

ジオン・ズム・ダイクンは外交によるサイド3独立運動を推進した。しかし、地球連邦政府が実施した経済制裁や地球連邦軍の増強などの圧力、そして何よりもスペース・コロニーの独立を容認しない地球連邦政府の態度により頓挫した。

ダイクンの死後、サイド3の政権を担ったザビ家は、スペースノイド独立などの思想面ではダイクンの同志といえたが、その方針は決定的に異なっていた。

ザビ家は、スペースノイドの自治権獲得のためには、軍事力によって地球連邦を撃破するしかないと考えていたのである。

ダイクンを暗殺したともいわれるザビ家は、U.C. 0069. 08. 15にジオン公国を宣言し、国家の主要ポストを占めると、旧ダイクン派の肅清を進めるとともに、地球



ギレン・ザビ総帥



デギン・ゾド・ザビ公王



連邦との戦争準備を開始した。

思想面では、ダイクンが唱えたジオニズムを国家思想としながらも、その中で出現が予想された新人類「ニュータイプ」とジオン公国国民を半ば同一視する選民思想、それをギレン・ザビ総帥自身が体系的に著述した『優性人類生存説』の発表、地球連邦への敵意を煽るプロパガンダなどにより、国民の中にも戦争機運を高めていった。

こうして、ジオン公国内には、人種の優越感と反地球連邦感情が蔓延し、それをベースとした開戦機運が高まりを見せていった。しかし、地球連邦との間には30倍ともいわれる国力差があり、士気や戦術レベルの工夫で勝つことは不可能であった。

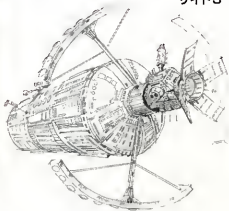
ここでジオン公国が着目したものが、ミノフスキー粒子である。

ミノフスキー粒子とは、U・C・0040年代にT・Y・ミノフスキー博士が統一場理論を完成するために存在を仮定した粒子であった。

通信機や精密電子機器に発生する原因不明のノイズから、一部でその存在が予想されていたミノフスキー粒子だが、当時の物理学では異端視されており、結果的にミノフスキー博士は学会から追放されている。

それでも自身の学説を曲げなかったミノフスキー博士は、U・C・0045、サイド3でミノフスキー物理学会を設立。U・C・0047にはミノフスキー物理学会を基にM&Y（ミノフスキー&イヨネスコ）公社を設立し、ミノフスキー・イヨネスコ型核反応炉の

サイド3



サイド3のズム・シティはジオン公国の  
中枢で、公王庁舎はそれを象徴する建築  
物だった。

開発をスタートするなどの研究を進めていった。

ミノフスキー・イオネスコ型核反応炉とは、ミノフスキー粒子の特性を利用したコンパクトかつ高出力な新型熱核反応炉で、以降の熱核反応炉のスタンダードとなっていく。

そしてU.C. 0065、ミノフスキー物理学会は、この熱核反応炉内において特殊電磁波効果を発見した。

特殊電磁波効果とは、超長波から短波にいたる大半の電磁波を減衰させるもので、ミノフスキー粒子の特性のひとつと考えられていたものである。また、集積回路の誤作動や機能障害を誘発するという副次効果も発生させた。

つまりミノフスキー粒子が存在し、それを高濃度で広域散布できるのならば、既存の兵器体系を成り立たせているレーダーやコンピューターを無力化させるほか、通信網を寸断できることも意味していたのである。

U.C. 0065の特殊電磁波効果発見は追試の結果が公開されなかったこともあつ

て、一般の注目度は高くなかったようだが、U・C・0069、ついにミノフスキー粒子の存在が実証された。

この結果を受けたジオン公国軍は、U・C・0071、ミノフスキー粒子散布環境下に対応した新兵器の開発に着手する。

それ以前にも、ミノフスキー・イオネスコ型核反応炉やそれを利用した熱核ロケット・エンジンが実用化され、宇宙艦艇に搭載されていた。また、ミノフスキー粒子を圧縮・融合させたメガ粒子ビームを発射するメガ粒子砲も完成していた。

しかしこれらは、宇宙艦艇などの既存の兵器を強化するものに過ぎなかった。

ジオン公国軍が求めたのは、レーダーが無力化され、通信網も麻痺するミノフスキー粒子散布環境下で、十全な性能を発揮できる新兵器だったのである。

この新兵器が戦力化されれば、既存の兵器システムに依存する地球連邦軍など物の数ではなく、ここにジオン公国が地球連邦を打倒しうる可能性が存在した。

この可能性にかけたジオン公国軍は、自国の重工業企業であるZ E O N I C（ジオニック）社、Z I M M A D（ツイマッド）社、M I P（エムイーパー）社の3社に、ミノフスキー粒子散布環境対応兵器である「次期主力汎用戦術兵器」の開発を委託した。

こうして開発された兵器のひとつが、一年戦争で地球圏を席捲することになるM Sであった。

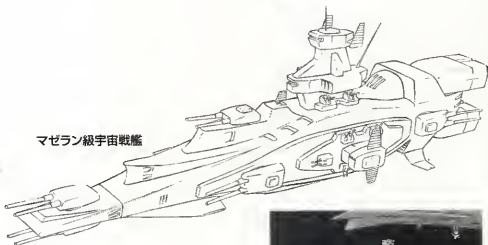
## 両軍のミノフスキー粒子観の違い

ジオン公国軍が、ミノフスキー粒子に起死回生の可能性を見出したが、地球連邦軍もミノフスキー粒子の戦力化に無関心だったわけではない。

地球連邦軍がMAWS (Minovsky-theory applied Weapon system = ミノフスキー理論応用兵器体系) の中で採用したのは、宇宙艦艇用を中心としたミノフスキー・イヨネスコ型核反応炉や熱核ロケット・エンジン、メガ粒子砲などであった。

これは、地球連邦軍の大勢を占めていた「大艦巨砲主義」派の影響が強かったこと、艦隊決戦こそが宇宙戦の有り様だと考えられていたことなどがその理由である。

また、特殊電磁波効果を十全に発揮させる



マゼラン級宇宙戦艦



マゼラン級は艦隊旗艦として用いられ、ティターン提督やレビル将軍などの指揮官が乗艦した。

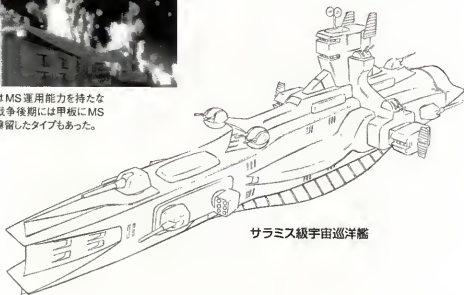
ためには、高濃度のミノフスキー粒子を広域散布する技術が必要で、宇宙艦艇の最強性が容易に揺らぐことはないと考えられたようである（実際には、短期間でミノフスキー粒子散布技術は完成した）。

ほかにも、当時のジオン公国軍が、パプア級ミサイル戦艦やチベ級高速重巡洋艦に代表される「大艦巨砲主義」的な宇宙艦隊を整備していたことも、地球連邦軍の自信の裏付けとなっていたと考えられる。

しかも一年戦争が開戦し、一週間戦争とルウム戦役でMSの威力を見せ付けられても、その敗因をジオン公国軍の奇襲に求めるなど、地球連邦軍がミノフスキー粒子散布環境下での戦闘を理解するには長い時間を必要とした。



サラミス級はMS運用能力を持たなかったが、戦争後期には甲板にMSやボールを繋留したタイプもあった。



サラミス級宇宙巡洋艦

## MSの誕生と戦力化に向けた改良

### ミノフスキー粒子対応兵器の模索

ミノフスキー粒子散布環境下に対応した兵器とは、レーダーへの依存度が低い兵器を意味し、つまりは有視界戦闘を前提とした機器ということになる。

これは、戦闘の様相が目視を基本としていた第二次世界大戦レベルに回帰するということだが、もちろん兵器を旧式に戻すという意味ではない。単にレーダーを搭載しない旧式の兵器では、容易に撃破されることは確実であり、ジオン公国軍もこうした兵器を望んだわけではなかった。

また、当初からジオン公国軍が要求した仕様の中に、大気圏内外（宇宙空間の0G環境とスペース・コロニー内部や地球上などの1G環境）での運用能力の両立があったとされ、それも旧来の兵器では達成が困難な課題であった。

そこでミノフスキー粒子散布環境下における新兵器の開発が、U.C.0071にスタートすることとなった。この新兵器の開発は、前述の通りジオン公国屈指の技術力を持つ重工業企業3社に委託された。

ただし、これは3社の合同プロジェクトではなく、競争試作（コンペティション）で

あった。この競争試作という形式は、以降の機動兵器開発でもよく行われており、ジオン公国軍が短期間で多種多様な機動兵器を生み出す原動力のひとつともなった。

「次期主力汎用戦術兵器」と仮称されたミノフスキー粒子散布環境下に対応した兵器の競争試作は、最終的にZEO NIC社のZI・XA3と、MIP社のMIP・X1の間で行われることになった。この2機は、暗中模索の状態だった新兵器の開発状況を象徴するかのよう、まったく異なるスタイルを持った機体であった。

MIP社のMIP・X1は、宇宙戦闘機の延長線上にある機体で、宇宙用としてロケット・エンジンを、コロニー内移動用としてホバー・クラフトを搭載していたといわれる。このような機体なら技術的ハードルも低く、宇宙戦闘機用の生産施設を流用できるため生産性に優れていた。しかしこのMIP・X1が、ミノフスキー粒子が散布された環境に対応し、地球連邦軍の宇宙艦隊を相手に活躍できるかという点については、疑問が残った。

対するZEO NIC社のZI・XA3は、同社が社内プロジェクト「S・U・I・T計画」で開発していた機体で、機密保持のため「汎用宇宙機器」という作業用宇宙服の開発に偽装するという念の入れようだった。

この「S・U・I・T」や「作業宇宙服」という言葉、そして後に与えられたと伝えられる「クラブマン」という通称に、ZI・XA3の正体が隠されていたのである。

## モビルスーツの誕生

「S・U・I・T」や「作業宇宙服」という言葉からも予想できるように、Z I・X A 3は14mの全高を持つ人型の機器だった。既存の兵器からあまりにもかけ離れたシルエットを持つていたため、これを見たギレン総帥は冷ややかな笑みを浮かべたと伝えられるが、それも無理からぬことだった。

しかし、この既存の兵器と大きく異なるシルエットを持つZ I・X A 3は驚異的な性能を秘めた機体であった。腕部のマジックハンドは、スペース・コロニーのハッチの開閉から各種作業まで様々な目的に対応していた。また、脚部ユニットは1G環境下において歩行や走行が可能で、さらに複雑な地形では装輪車両やホバー・クラフト以上の対応能力を見せたのである。

確かに、このような手脚ユニットはコロニー外壁や重力下でこそ有効かもしれないが、宇宙空間ではデッドウェイトに過ぎないという意見もあった。しかし、この手脚ユニットこそ、Z I・X A 3の優位性を雄弁に物語る機器といえた。

Z I・X A 3の手脚ユニットは、「AMBAC (Active Mass Balance Auto Control) =



開発初期の段階から腕部は高い作業性能を示した。また、脚部などによるAMBACは宇宙空間での運動性を飛躍的に高めた。



能動的質量移動による自動姿勢制御」システムと呼ばれる機能を有していた。これは、手脚ユニットを動かした際の反作用で機体の姿勢を制御するシステムである。

このシステムは、宇宙艦艇や宇宙戦闘機に搭載されている姿勢制御バーニアと違い、プロペラント（燃料）を消費しないという特性を持つ。プロペラントの制限から、宇宙艦艇や宇宙戦闘機は姿勢を制御できる回数、つまり機体の向きを変更する回数が限られている。だが、AMBACシステムを搭載したZI・X A3は、プロペラントに関係なく無制限に機体の方向を変えることが可能である。

このシステムは、宇宙戦において決定的に有利な要因となった。また、運動性の向上（ZI・X A3は180度の旋回を3秒で完了した）やプロペラントの節約などの面でも、優れていることはいままでもない。

このように、汎用性を含めたZI・X A3の優位は明らかであった。ジオン公国軍は「次期主力汎用戦術兵器」としてZI・X A3を採用するとともに、この機体にモビルスーツの呼称とMS・01の型式番号を与えた。

モビルスーツとはMobile S.U.I.T. (Space Utility Instruments Tactical)、つまり「戦術汎用宇宙機器」のことを指す。

こうして、一年戦争で地球連邦軍の敗北の寸前まで追い詰めることになる、新たな兵器カテゴリー、MSが誕生したのだった。

## プロトタイプ・ザクへの道程

高い汎用性やAMBACシステムが評価され、ジオン公国軍に採用されたMS・01だが、戦闘能力はなく、燃料消費や機体の冷却に問題をがあったため、実戦投入は不可能だった。

MS・01に求められたのは、実戦型MS開発の雛形となり、ミノフスキー粒子散布環境下に対応した兵器の有り様を示すことであつた。開発スタッフの拡充とジオン公国軍工廠へと開発拠点が変更され、MS・01の改修機であるMS・02が開発された。

MS・02は主に機動性の向上が図られたが、やはり実戦に耐える機体ではなかった。

続くMS・03は、機動性の更なる向上と装甲強化が目的とされ、より人間的なシルエットだったといわれる。MS・03は4機が製作されたが、装甲の強化などにより重量が増加したため、機動性はMS・02の約6割にまで低下してしまった。そこで、軽量化のために脱出コクピットの廃止やボデイのモノコック化などが図られたが、これは功罪相半ばする改修となった。

ボデイのモノコック化は、以降のジオン公国系MSの基本構造となったモノコック構造、もしくはその原型と考えられるものである。

「単殻構造」とも呼べるモノコック構造の利点として、内部スペースの大容量化や軽量化などが上げられる。また、技術的なハードルが低いため、MS関連技術が発展途上だった当時でも、高い生産性を確保できたのである。こうして大きな内部容積と軽量性を兼ね

備えつつ、生産性にも優れるこの構造はMSの性能を大きく向上させたが、脱出コクピットの廃止は後に大きな問題となった。

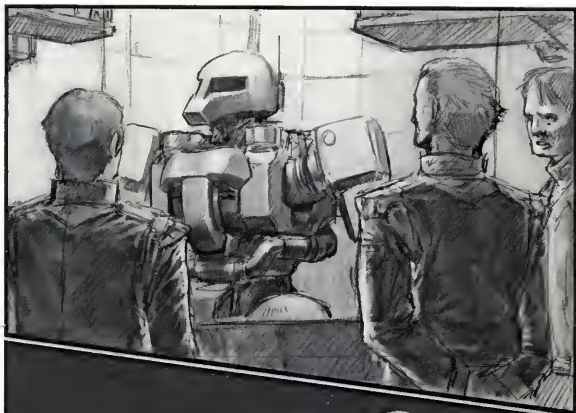
脱出コクピットの不採用はMS・06F ザクⅡにも続き、一週間戦争やルウム戦役で多くのパイロットを失う一因となったのである。脱出コクピットの再搭載は、MS・06R 高機動型ザクを待たねばならなかった。

続いて開発された機体こそ、時系列上初めての「ザク」の名称が与えられた「MS・04 プロトタイプ・ザク」である（同じくMS・04の型式番号を持つアーリー・ザクが存在するといわれるが、これはプロトタイプ・ザクより小型の機体だったとされる）。

プロトタイプ・ザクは、MS・03同様に装甲防御力を重視した機体だが、モノコック構造の採用、そしてMSとしては初めてミノフスキー・イオネスコ型核反応炉を搭載したことで、MS・03の2倍の機動性を有していたという。なお搭載された反応炉は、さらに小型化した試作機ZAS・X7だったとされる。

また、プロトタイプ・ザクのマニピュレーターの作業性能の限界から現実的でないと考えたが、兵装の交換による多用途化が目指されていた。さらに、兵装として口径100mmのZX M・1試製マシンガンが開発され、その総合性能は実戦に耐えうるレベルに達しつつあった。

こうしてそれ以前の試作MSと比較して、遥かに高い性能を獲得したプロトタイプ・ザクだが、生産性の問題から量産は見送られることになった。



## ジオン公国系MSの機械的特徴

プロタイプ・ザクまでの試作MS開発において、モノアイ、流体内パルス・システム、モノコック構造、五本指マニピュレーター、AMBA Cシステム、小型ミノフスキー・イヨネスコ型反応炉、熱核ロケット・エンジンなどの技術が培われた。

特にジオン公国軍系MSのシンボルである、頭部ユニットなどに搭載されるモノアイと、独自の駆動機構の流体内パルス・システムは、極めて特徴的な機器だといえる。

外部映像認識装置であるモノアイは、光学カメラを中心に、赤外線センサー、光信号装置などが並列装備されている。ここで得られた映像がコクピットのディスプレイに投影される。また、カメラ部分が走査レール上を移動するため、視認性や索敵性能などの面でも優れている。

流体内パルス・システムは、関節部分に組み込まれた小型軽量の駆動装置で、ハイパワーかつ高レスポンスという特徴を持つ。一種のエネルギー変換・伝達装置で、反応炉で発生したエネルギーを特殊なコンバーターでパルス状の圧力に変換。それを数千本の極微細管で流体パイプに導き、関節駆動用ロータリーシリンダーに極超音速で伝達するものだ。

これらの技術のいくつかは、地球連邦軍のMSにも取り入れられて、MS全体の基礎技術となった。

## ZEONIC社、ZIMMAD社、MIP社

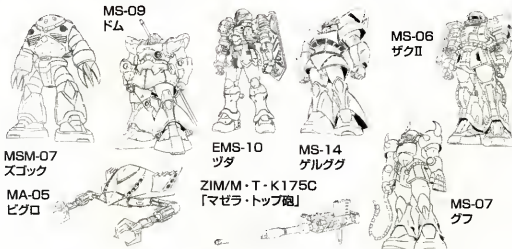
次期主力汎用戦術兵器、つまりミノフスキー粒子散布環境下に対応した兵器の開発を委託された、ZEONIC社、ZIMMAD社、MIP社の3社は、重工業推進政策を取っていたサイド3生粋の重工業企業であった（サイド3は重工業推進の一環として、電力売買などを通じてグラナダなどの月面都市との繋がりも深めていた）。

MSそのものの基本フォーマットやザク・シリーズを生み出したZEONIC社は、汎用民生重作業機などを手掛けた企業である。ほかにもMS・07グフ・シリーズの開発や、MS・14ゲルググの基本設計を担当したことで知られている。

MS本体以外にも、MS用基本動作プログラムであるAMC（アクティブ・ミッシェン・コントロール）を開発したシステム・エンジニアリング、ザク・マシンガン・シリーズを生み出した火器開発部門などを擁しており、機動兵器に関する総合技術では当時随一の企業であった。

ZIMMAD社は、推進器関連や局地戦用MSなどに強い機動機器メーカーで、ズダ・シリーズやMS・09ドム・シリーズ、MSM・03ゴッグやYMS・15ギャンなどを手掛けたほか、ゲルググの推進器を担当している。

特に推進器に関する技術レベルは高く、重元素を推進剤として使用する熱核ロケット・



エンジンの「木星エンジン」や「土星エンジン」、水陸両用MSの熱核水流ジェット・エンジンなど、特殊かつ高性能なモデルを次々と生み出した。

また、実体弾式火器の開発能力にも秀でており、一般にマゼラ・トップ砲と呼ばれる多目的万能砲ZIM/M・T・K175Cを開発したことで知られている。

局地戦用機動兵器の開発企業として認知されているMIP社は、水陸両用MSのMSM・07ズゴック・シリーズのほかに、MA・05ビグロに代表されるモビル・アーマーを開発した。

メガ粒子砲に関しても優れた技術を有しており、MAやMSの内蔵式メガ粒子砲だけでなく、ゲルググではビーム・ライフルの開発も担当している。

それ以外にも、軍総司令部管轄の技術本部がMP・02Aオッゴなどの機動兵器を開発しているが、この3社こそがジオン公国軍用機動兵器の開発中核であり、地球連邦軍以上の技術力で次々と新型兵器を送り出していった。

## ミノフスキー粒子環境下におけるMSの能力

### 宇宙戦における優位性

MS・04 プロトタイプ・ザクに至る、最初期型試作MSの実戦投入例は知られていない。しかし、MS・04の時点で、MSは旧来の兵器を超える総合能力を獲得していた。

ミノフスキー・イオネスコ型核反応炉によるパワーや、主力戦車とも撃ち合える大口径マシンガンと重装甲などを持ち、単純に戦闘能力だけでも、圧倒的であった。

また、AMBAシステムがもたらす運動性と優れた燃費、熱核ロケット・エンジンと二足歩行システムによる大気圏内外における高い運用性は、既存の兵器を遥かに凌駕していた。

ほかにも、五本指マニピュレーターがもたらす作業性は、大半の重機より優れており、様々なオプションを使いこなすことも可能であった。特に、スペース・コロニーのハッチの開閉も可能な器用さは、大気圏内外両用での運用性と相まって、スペース・コロニーや宇宙が戦闘の舞台となる宇宙世紀の戦争に適合していた。

これらの性能は、レーダーや通信網が無力化されるミノフスキー粒子散布環境下において、更なるアドバンテージを生むこととなった。



元々有視界戦闘用に開発されたMSは、ミノフスキー粒子散布環境下でも性能を低下させず、その運動性と機動性で対空砲撃を避けながら、宇宙艦艇に接近可能である。

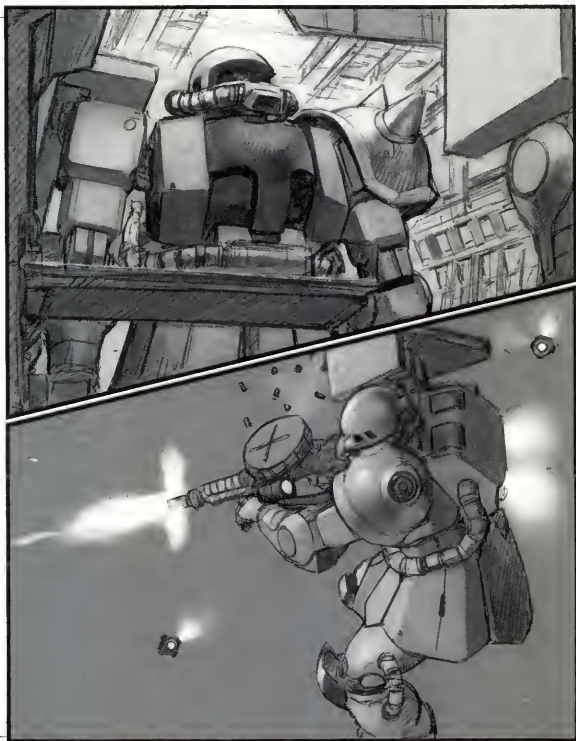
## 陸戦における優位性

陸戦でも二足歩行システムによる高い機動性のため、戦車をはじめとする地上車両は著しい不利を強いられる。

またミノフスキー粒子散布環境下では、MS以外の兵器は電子機器に頼る部分が多いほどその性能が低下するうえ、通信やデータリンクも難しくなるため組織的な部隊運用ができず、MSに各個撃破される危険性が非常に高い。

地上戦では、MSの大きな正面投影面積は不利な要素に思える。しかし、MSの投入地域にはミノフスキー粒子が散布されるため、目視以外の索敵手段が効果的ではなく、起伏が大きい地形や森林、建造物などが視線を遮るため、これも大きな問題とはならない。

人間が障害物を利用すれば、MSから発見される可能性は低く、肉薄攻撃も可能である。しかし、人間用火器ではMS撃破の可能性は低く、攻撃後には人間でもほぼ確実に発見され、反撃を受けることを覚悟しなくてはならない。そもそも、生身でMSに挑む度胸は並大抵のものではなく、MSに恐怖兵器としての一面があることを忘れてはならない。



# 巨大プラズマ・ビーム砲、ヨルムンガンド

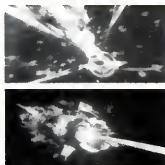
ジオン公国軍は、艦隊決戦を前提とした兵器も開発していた。

その代表が「試作艦隊決戦砲」こと、巨大プラズマ・ビーム砲の「QCX・76A ヨルムンガンド」である。

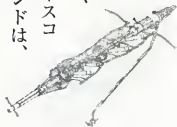
ヨルムンガンドは、旧来の指向性エネルギー兵器への対策が進む中で、防御されにくい新型ビーム兵器として開発された。ミノフスキー・イオネスコ型核反応炉を暴走させた核融合プラズマ・ビームを発射するヨルムンガンドは、マゼラン級宇宙戦艦をアウトレンジしつつ、一撃で撃沈する威力を有していた。

しかし、自走能力がないことや核融合プラズマ・ビームを発生させる弾体のコストがザクの3倍にもなるといった問題も指摘されていた。また、メガ粒子砲が実用化されたこと、そして、ミノフスキー粒子散布環境下では命中率が低下することなども欠点とされた。

何よりも、MS中心のジオン公国軍のドクトリンに適合しなかったため、ルウム戦役で試験運用が行われたばかりは、実戦で使用されることはなかった（一年戦争後、月近海に配備されたとはいわれる）。



ルウム戦役では第603技術試験隊による運用評価試験が行われ、マゼラン級宇宙戦艦を撃沈するなどの戦果を挙げた。



QCX-76A ヨルムンガンド



MS以前の兵器

MSの誕生

MSの実戦運用

局地戦用MSの  
開発

次期主力MSの  
開発

ニュータイプ  
専用機の開発

MAの開発



## 第三章

### 一年戦争開戦

～MSの実戦運用～



## 実戦型MSザク・シリーズの完成と 一年戦争の開戦、及び地球への侵攻

MSの実用化と、本格的な対地球連邦戦争の準備

ジオン公国軍のMS開発は、極めて短期間の内に進展した。

「次期主力汎用戦術兵器」の開発開始がU・C・0071、MS・01完成がU・C・0073で、実戦仕様に近付いたMS・04プロトタイプ・ザク誕生は、MS・01の完成から1年以内のことだったといわれる。

戦力化されなかったプロトタイプ・ザクも、マニピュレーター作業性能や攻撃力の面で問題点を指摘されたものの、装甲防御力は特に高く、地球連邦軍の既存の兵器を凌駕する性能を獲得していた。

そしてU・C・0074・02、遂に史上初の実戦用MSであるMS・05ザクIの試作機がロールアウトする。この機体による主力MS選定コンペティションや、初期先行試作量産型を用いた戦術研究などにより、MS関連技術が成熟する中、ジオン公国はひとつの賭けに出た。



地球連邦軍の上層部にとって、公開された試作MSのテスト風景は軍事的な脅威とは捉えられなかった。

これまで、作業重機に偽装して開発を行っていたMSの作業や登坂などのテスト風景を公表したのである。これは、MSに関する地球連邦軍の反応を確かめるための処置であった。この映像が、分析能力に秀でた情報士官や先見性のある将校の目に留まる可能性を考慮すれば、地球連邦軍のMS対策を誘発しかねない危険な行為だった。

結果からいえば、ジオン公国はこの賭けに勝利した。地球連邦軍首脳部は、MSのテスト風景を一笑に付し、それを実用的な兵器とは考えなかったのである。

この背景には、地球連邦軍がミノフスキー粒子散布環境下での戦闘を理解していなかったことが最大の要因として挙げられる。また、ジオン公国軍が敵味方双方の戦闘手段を大幅に制限するミノフスキー粒子を積極的に使用するとは考え難かったこと、ジオン公国軍も地球連邦軍のような宇宙艦隊を整備していたことなども、その理由であった。

こうして、地球連邦軍が危機感を抱いていないことを確信したジオン公国は、秘匿性に優れた密閉型コロニー内の工廠において、ザクIの量産と更なる高性能と汎用性を持つMS-06 ザクIIの開発と生産を進めた。

U.C. 0078. 10、ジオン公国は国家総動員令を発令すると共に、軍を宇宙攻撃軍と突撃機動軍に分割するなど、戦争準備を進めていた(U.C. 0078 初旬にジオン公国軍自身が、ジオン公国軍のサイド2 侵攻計画を地球連邦にリークしたものの、地球連邦政府がこれを無視したため開戦を決意したという説もある)。

## 一年戦争の開戦と「コロニー落とし」

ジオン公国軍は、核兵器運用能力を持つ高性能汎用機の「MS・06C ザクⅡC型」や、より汎用性を高めた「MS・06F ザクⅡF型」、MS運用能力に優れた宇宙艦艇であるムサイ級軽巡洋艦など、ミノフスキー粒子散布環境下に適応した兵器を量産すると、ついに地球連邦軍との戦争に踏み切った。

これがU・C. 0079. 01. 03に勃発した、一年戦争である。

一年戦争緒戦の戦果から、ジオン公国は自信を持って開戦したと思われることが多い。しかし、地球連邦との絶対的な国力差を認識していたこともあって、長期消耗戦は想定していなかった。ジオン公国は、地球連邦軍の中枢が置かれたジャブローを一撃で破壊し、短期間で地球連邦を降伏させようと考えていたのである。

そのためにジオン公国軍は「プリティッシュ作戦」を立案する。この作戦はスペース・コロニーそのものを巨大な質量弾としてジャブローに落下させるというものだった。直径6.4km、全長40kmにおよぶスペース・コロニーが地球上に落下した際の破壊力は、TNT火薬換算で6万メガトン、広島型原子爆弾の300万発分に相当する。核攻撃にも耐えるといわれた巨大地下基地のジャブローでも、この直撃を受ければ文字通り消滅してしまふ。

この「コロニー落とし」作戦は、スペースノイドの居住地であるスペース・コロニーそのもの



のを兵器に転用するという奇策の中の奇策といえた。しかし、その奇襲効果や阻止が困難である点、そして何よりも戦略級核兵器をも遥かに上回る破壊力によって、ジオン公国の戦勝を約束するものと考えられた。

MSとその運用母艦で構成されたジオン公国軍の宇宙艦隊は、地球連邦軍宇宙艦隊への対抗策としてだけでなく、スペース・コロニーへの破壊工作や落下準備作業を行うためにも必要なものであった。

数百万から千万単位の人間が住むスペース・コロニーの質量弾への転用という作戦は、奇抜であり、奇襲性も高い。しかし、経済的、倫理的な問題以外にも、コロニー落着時の地球への被害は想像を絶するものがあつた。それでもギレン・ザビ総帥がコロニー落としを容認した背景には、サイド3への移民推奨政策により、ジオン公国に同調する人間は既にサイド3に移民していると判断されたこと、ジオニズムを拡大解釈したジオン公国民の優良人種観などがあつた。

つまりギレン総帥は、サイド3以外のスペース・コロニーをどう扱おうと何の問題もないと考えていたのである。また地球圏の改革のため、人口の大幅な削減をギレン総帥が必要と考えていたこともその一因だった。

ただし、親ジオン公国のランク政権が成立していたサイド6は、地球連邦との外交折衝での仲介を期待され、攻撃対象とはならなかった。

## 一年戦争緒戦の戦いと「コロニー落としの失敗

U. C. 0079. 01. 03、独立を宣言したジオン公国は地球連邦に宣戦布告を行うと、その3秒後にはサイド1、2、4に攻撃を開始した。

これが世にいう「3秒間の布告」である。

1月3日から10日まで展開されたこの戦闘は、

「一週間戦争」と呼ばれている。

「3秒間の布告」とミノフスキー粒子の広域散布により、奇襲攻撃を成功させたジオン公国軍は、MSや核兵器を使用して各サイド駐留の地球連邦軍を次々と撃破するとともに、多数のスペース・コロニーを破壊していった。

そして開戦翌日の1月4日、ジャブローへのコロニー落としを目的とする「ブリティッシュ」作戦を実施したのである。コロニー爆弾には、サイド2・8パンチ、アイランド・イフィッシュが選ばれた。



一年戦争開戦当初のジオン公国軍MS部隊。中央に見えるのは「赤い彗星」シャア・アズナブルの乗機と思われる。

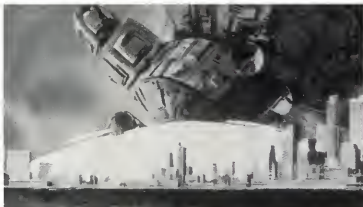
MSによって住民の虐殺と安定軌道軌道脱落用機器の設置が行われたアイランド・イフィッシュは、サイド2を離れた後、月宙域でのフライバイを経て速度と軌道が調整され、大気圏へと突入した（住民が虐殺されたのは、内部からの操作によってスペース・コロニーの軌道が変更されるのを恐れたためだった）。

しかし、ここで不測の事態

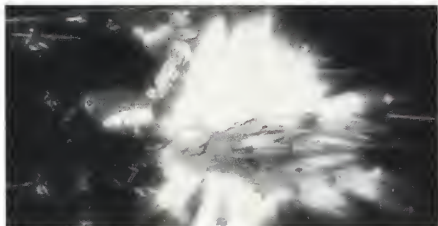
が発生する。スペース・コロニーが、ジャブローに落着しなかったのである。地球連邦軍の迎撃により損傷していたアイランド・イフィッシュは、アラビア半島上空で空中分解を起こすと、オーストラリアや北米、太平洋など地球全域に落下していった。

この結果、スペース・コロニーの前半部分が落着いたシドニーが消滅したほか、破片

地球に落着いたアイランド・イフィッシュの一部は、オーストラリア南東部を消滅させ、世界地図を書き換えるほどの威力を示した。



ルウム戦役はジオン公国軍と地球連邦軍の両宇宙艦隊による砲撃戦で幕を開け、当初はジオン公国軍艦隊も善戦した。



ルウム戦役では指揮系統の混乱などでMSの投入タイミングが遅れ、ジオン公国軍艦隊は想定以上の損害を被った。

が落下した北米と太平洋沿岸全域も甚大な被害を受けた。このため、太平洋艦隊を中心とした地球連邦軍も大きな損害を被ったのである。また、各サイドも、ジオン公国軍の攻撃によって多数のスペース・コロニーを破壊され、一週間戦争だけで地球圏の半分近い人命が失われたのだった。

しかし、ジャブローの破壊という当初の目的を果たせなかったジオン公国は、サイド6中立宣言直後の1月15日、2度目の「ブリティッシュ作戦」を意図してサイド5へと部隊を進めた。

1月15日～16日にかけて行われた戦いが、史上最大の艦隊戦といわれる「ルウム戦役」である。ジオン公国軍側の艦隊司令は宇宙攻撃軍司令のドズル・ザビ中将、地球連邦軍側の艦隊司令は名將と謳われたレビル中将（当時）であった。

ルウム戦役は、両軍が双方の動きを把握していたこともあって奇襲とはならず、艦艇数では地球連邦軍が圧倒的に優勢であった。また、サイド5宙域で両軍が

直接対峙する会戦形式の宇宙艦隊戦となったこともあり、数で勝る地球連邦軍は必勝を期して臨んでいた。

確かに宇宙艦隊同士の砲撃戦が行われた時点では、地球連邦軍が優勢であった。しかし、ジオン公国軍がMSを投入すると形勢は逆転、地球連邦軍は決定的な敗北を喫した。しかも、地球連邦軍は投入戦力の約8割を失い、司令官だったレビル中将が捕虜となってしまったのである。こうして快勝したジオン公国軍だが、この勝利はあくまでも戦術レベルのものに過ぎなかった。

ルウム戦役ではいくつかの課題がジオン公国に残された。中でも問題であったのは、今回もコロニー落としに失敗したことであった。しかも一週間戦争のときとは異なり、地球連邦軍の猛烈な攻撃を前にして、スペース・コロニーを安定軌道から外すことすらできなかったのである。

この後、3度目のコロニー落としが実施されるかと思われたが、ジオン公国軍の実態がそれを許さなかった。ジオン公国軍もベタン軍人を含む多数の将兵を失っており、コロニー落としを実行するだけの余力が残っていなかったのである。

つまりジオン公国は、2回もの戦術的勝利を収めながらも戦略目標を達成できず、貴重な戦力を喪失していたのだった。ジオン公国に残された手段は、自身の損害を徹底的に隠し、その戦術的勝利を材料として、自国に有利な休戦条約を結ぶことしかなかった。

## 短期決戦構想の崩壊と地球侵攻

ルウム戦役後、ジオン公国の働きかけとサイド6の仲介により、両国間で休戦条約を巡る会談が行われることとなった。なお、会談は南極基地で行われた。

ジオン公国は、一週間戦争およびルウム戦役での戦術的勝利や新たなコロニー落としを示唆し、自らに有利な休戦条約を結ぼうとした。

ジオン公国が、将兵や戦力の損耗といった不利な材料を隠していたこともあって、地球連邦政府や軍には休戦もやむなしという機運が広がり、地球連邦を事実上の敗戦国とする休戦条約が結ばれるのは時間の問題となっていた。しかし、条約の締結直前にレビル将軍が救出され、さらに将軍自身がジオン公国内の疲弊を訴える「ジオンに兵なし」演説を行ったことで、地球連邦は継戦を決意する。

これに対し、ジオン公国は妥協を示し、休戦条約を



地球侵攻作戦において大気圏突入を行うジオン公国軍のHLV。地上に戦力を展開するため、このような機材が用いられた。

地球侵攻作戦の戦果はプロパガンダ放送などで華々しく喧伝されたが、その裏でジオン公国軍は戦線や補給線の維持に窮々としていた。



地上のジオン公国軍支配地域には無数の物資集積所が設置され、補給線を繋ぐ役割を果たしたものの、戦線の維持は困難であった。

巡る会談は戦時条約締結会議へと姿を変えた。この結果、U. C. 0079. 01. 31、「南極条約」が締結されたのである。

南極条約には、コロニー落としなどの大質量弾攻撃やNBC兵器の使用禁止、中立地帯での戦闘行為の禁止、月面都市および木星資源船団への攻撃禁止、捕虜への非人道的扱いの禁止などの条項が盛り込まれていた。

南極条約は締結されたものの、両軍に継戦意思があり、特にジオン公国が地球連邦の撃破を意図していたこともあって、戦争は継続された。

ここで問題となるのは、地球連邦が休戦を拒否したことで、ジオン公国が想定していた短期決戦構想が事実上崩壊したことである。

MS以前の兵器

MSの誕生

MSの実戦運用

局地戦用MSの開  
発次期主力MSの開  
発ニュータイプ  
専用機の開発

MAの開発

しかもジオン公国は、戦力損耗による戦線縮小は考えておらず、地球攻撃軍を組織すると、U.C. 0079. 02. 07、地球侵攻作戦を開始したのだった。

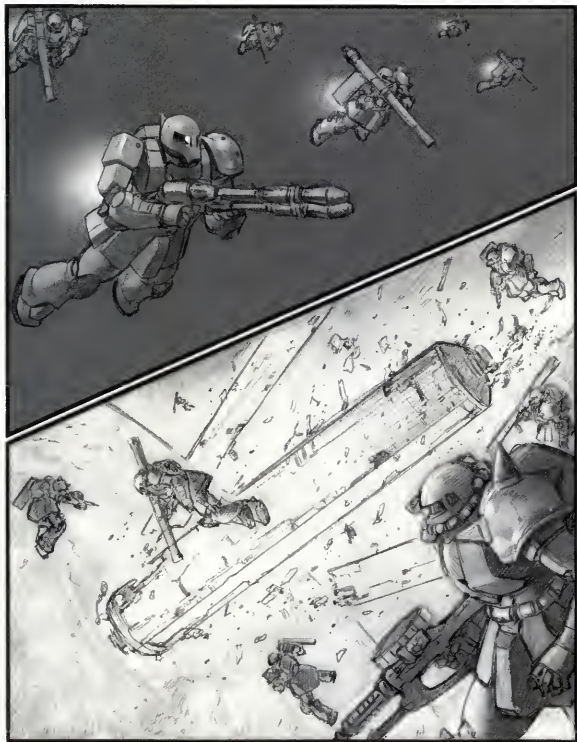
ジオン公国軍は中央アジアに制圧部隊を送り込むと、それ以降、地下資源および工業地帯の確保、政軍両面での重要地域の制圧などを目的として、北米や欧州、北アフリカ、東南アジア、オーストラリアなどへと部隊を展開させた。一年戦争緒戦の余勢をかったジオン公国軍は、破竹の勢いで占領地域を広げていった。

こうして見ると、ジオン公国軍が戦争の緒戦で甚大な被害を出したのが嘘のようで、地球侵攻作戦の実施は正しい選択にも思える。

しかし、やはりジオン公国は無理をしていた。占領地域を急速に拡大したため、戦線の維持が手一杯となったうえ、補給線も延びきり、物資を消費するだけの長期消耗戦に突入してしまったのである。さらに戦争の長期化は、国力に勝る地球連邦軍に回復の時間を与えることになるため、国力に劣るジオン公国にとっては絶対に回避すべきものだった。また、急速な戦線の拡大と焦土作戦をはじめとするジオン公国軍の作戦は、軍上層部の宥和策を相反するものであり、多数の脱走兵を生み出したほか、ゲリラなどの出現を促す結果となった。

だが、長期消耗戦の気配は地球侵攻作戦開始から二ヵ月も経たない、4月下旬には明らかになっており、両軍が決定的攻勢に出られないまま戦線は膠着したのである。





## 宇宙攻撃軍と突撃機動軍

ジオン公国軍が、対地球連邦戦争の切り札として、MSに多大な期待を寄せていたことはよく知られている。

しかしMS黎明期には、ミノフスキー粒子散布下での戦闘の実態がよく分かっていなかったことや、それ以前の宇宙艦艇が優れた空間戦能力を持っていたこともあり、MSの戦術的位置を決めるのは難しかった。特にMSを主力兵器とするか、それとも宇宙艦艇の補助兵器とするかという問題はザビ家を巻き込んだ政争にまで発展したといわれる。

MSを補助兵器と考えたのがドズル・ザビ少将、主力兵器としたのがキシリア・ザビ大佐（階級はともに当時）で、両派の対立は解決を見ないまま長期化し、両者は自身の進退を口にするようになった。この解決策としてギレン・ザビ総帥は、ジオン公国軍の二分化を提示。こうしてU.C. 0078.10、ドズルを司令とする宇宙攻撃軍と、キシリアを司令とする突撃機動軍が誕生したのだった。

軍分割の理由を体言するように、宇宙攻撃軍は宇宙艦艇重視、突撃機動軍はMS重視の部隊編制を採っていた。しかし、一週間戦争とルウム戦役でMSの威力が確認されたこともあって、宇宙攻撃軍でもMSは主力兵器として運用されることになった。



ドズル・ザビ少将  
(当時)

キシリア・ザビ大佐  
(当時)

# ジオン公国軍のワークホース ザク・シリーズの開発

## MS・05 ザクIの開発と構造

MS・03以前の試作MSと比較して、格段の高性能化を果たした「MS・04 プロトタイプ・ザク」だが、生産性が主な問題となり戦力化は見送られた（MS・04 アーリー・ザク説では、核反応炉搭載のランドセルが大型だったほか、マニピュレーターも三本指タイプであるなど完成度は高くなかった）。そこでプロトタイプ・ザクの細部を改良し、生産性を向上させたMSが開発されることになった。

この機体こそが、史上初の実戦型MSの「MS・05 ザクI」で、試作型のYMS・05AがロールアウトしたのはU.C. 0074.02のことだった。

ザクIの名称に「I」が付いたのは、ザクII開発後のことで、それ以前は単に「ザク」と呼ばれていた。また、MS・04がプロトタイプ・ザクと呼ばれるのも、ザクIの開発によってMS・04がザクIの試作機に相当するようになったためで、これも後に命名されたものだった。

プロトタイプ・ザクと比較すると、ジェネレーター出力やスラスター推力などのカタログ・スペックが低下し、重量も増加しているザクIだが、MSとしての洗練度はむしろ向上している。

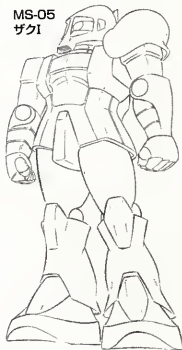
全身の装甲が滑らかでシンプルな構成となったほか、ランドセルもコンパクトに

なっており、生産性の改善と総合的な耐弾性向上に成功している。

MSの機械的な特徴のひとつである、腕部マニピュレーターも大きく改善された。プロトタイプ・ザクの腕部マニピュレーターも五本指タイプで、作業能力と100mmマシンガンに代表されるMS用兵装が使用可能であった。しかし、それはあくまでグリップを握ってトリガーを引けるというレベルのもので、マニピュレーターそのものの作業半径が小さかったことから、兵装の交換や高度な作業は現実的ではなかった。

ザクIではこの点が決定的に改善され、各種兵装の迅速な換装なども可能となっていた。またソフトウェア上のモードを切り替えることで、ザク・マシンガンの分解や組み立てに代表される精密作業も行えるようになったのである。

MS-05  
ザクI



頂高：17.5m  
 本体重量：50.3t（全備重量：65.0t）  
 ジェネレーター出力：899kW  
 スラスター推力：40,700kg  
 装甲材質：超硬スチール合金  
 兵装：ザク・マシンガン／ザク・バズーカ  
 ヒート・ホーク／ガス弾発射器

こうして、高度な汎用性と生産性を両立したザクIは、史上初の実戦型MSに相応しい性能を獲得していた。しかし、ザクIの性能を担保していたのは汎用性と作業性を司る腕部マニピュレーターだけではない。

パワーソースとなる核反応炉は、プロトタイプ・ザク同様、超小型ミノフスキー・イオネスコ型核反応炉で、ザクIではZEONIC社とM&Y公社が共同開発したMYFG・M2ES型を搭載していた（最初期にはZAS社のZAS・MI8B型だったとされる）。

このシリーズは最初期のMS用核反応炉で、四肢ユニット駆動用の流体内パルス・システムや、宇宙での推進や重力下でのジャンプに使用される熱核ロケット・エンジンなどの動力源で、65tにも及ぶ巨体に絶大なパワーと高度な機動性を与えた。

背部ランドセルに搭載された熱核ロケット・エンジンは、4万700kgもの推力を持ち、前述のように宇宙空間でのメイン・スラスターとして機能し、地上やコロニー内では脚部との併用により高度なジャンプ能力を発揮した。

ザクIはパワーや機動性だけでなく、装甲防御力にも秀でていた。ザク・シリーズの装甲は、61式戦車が装備する



MS-05 ザクI コクピット開閉ギミック

150mm連装砲を前提とした防御力を持つが、これはザクIの時点で既に達成されていたと考えてよさそうである。これほどの耐弾性を発揮するザクIの装甲は、先行したプロトタイプ・ザクや後発のジオン公国系MSにも採用された、超硬スチール合金が採り入れられている。

ただし、ザクIの装甲は超硬スチール合金だけでできているわけではない。韌性に優れる超硬スチール合金を最外層に配置し、複数の複合材を積層化した装甲になっていたようである。装甲の多層構造は改良が続けられ、耐弾性は更に向上したといわれる。

こうした改良を積み重ねたザクIは、汎用性と戦闘能力を兼ね備えた実戦型MSとして完成したのだった。

## ザクI用兵装の開発

プロトタイプ・ザク用の試製マシンガン、ZEONIC社のZXM・1は火力や信頼性などに問題を抱えていたため、ザクIでは新たな兵装が模索されていた。

その結果完成したのが、105mmザク・マシンガン（ZEONIC社のZMP・47D）と280mmザク・バズーカ（ハニーウォール&ライセオン社のH&L・SB21K／280mm A・N）、タイプ3に分類されるヒート・ホークであった。



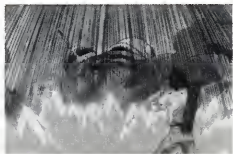
105mmザク・マシンガンは一年戦争開戦の時点ですでに旧式の部類に入る兵装だったが、オデッサ戦での運用も確認されている。

つまり、ザクⅡでも採用された3種類の基本兵装は、ザクⅠの時点ではほぼ完成していたのである。

105mmザク・マシンガンは、既存の速射砲の改造型であった試製マシンガンと異なり、発射時の反動を制御しやすい電気作動式の機関部を持っていた。反動の制御が容易である点は、宇宙空間での使用時に特に有用といえた。他にも、装弾数が145発と多いほか、連射性能と大口徑弾による突出した制圧力や、集弾効果による高火力といった特徴を持っていた。ただし105mm弾は低威力が指摘されたため、一年戦争開戦直前にはザクⅡ用と同じ120mmへと変更されることになった。

280mmザク・バズーカは、ザク・マシンガン以上の大火力を持つロケット・ランチャー／無反動砲で、核砲弾のほかに徹甲弾や成形炸薬弾、粘着榴弾などが発射可能である。ザク・マシンガンと比べて装弾数に劣るが、火力は極めて高く、特に核砲弾使用時の破壊力は想像を絶するものがあつた。

また、サイロ・タイプのザク・バズーカも開発されたが、これは核弾頭射出用の炸薬が強力で、ザクⅠの関節に不具合が発生するケースが散見された。これを解決するため、耐反動用のバズーカ・ラックを右肩に設けたザクⅠも存在した。



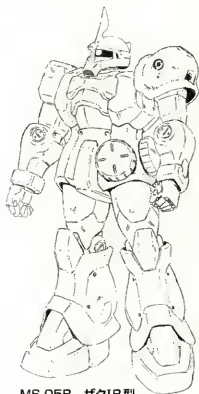
携行式の対物用兵装だけでなく、歩兵掃討用の対人兵器も装備されている。これは上空に打ち上げたのちに破裂する敵弾だった。

格闘用兵装のヒート・ホークは、ザクIの時点では対MS戦は想定されておらず、接近攻撃時の対物用や牽制用として用いられた。特に対艦戦闘時には、艦橋構造物や砲塔などへの攻撃で威力を発揮している。

これらのザクI用兵装は、MS用兵装の雛形となり、その有り様を決定付けたものであったが、より完成度が向上したザクII用兵装の登場によって姿を消していき、ザクIもザクII用の兵装を装備することが増えていった。

## ザクIのバリエーション開発と問題点

U.C. 0074.02に試作型がロールアウトしたザクIは、ZIMMAD社が開発したEMS-04ツダとの競合試作に勝利、U.C. 0075.07には量産が決定した。



MS-05B ザクI B型



その翌月には、ザクIの実戦仕様機であるMS・05AザクIA型（初期先行試作量産型）の1号機がロールアウトしている。

27機が生産されたザクIA型は、教導機動大隊での戦術研究やパイロット養成、小規模な軍事作戦に用いられたといわれる。

ザクIA型で得られたデータを基に、コクピットや装甲材質を中心とした改良を加えられたタイプが、MS・05BザクIB型である。

ザクIB型は793機が生産されたといわれる一般的な仕様で、ジオン系MSの隊長機などに見られたマルチ・ブレード・アンテナが装備されるようになったのは、このB型以降とされる。また、ザクIB型にはいくつかのバリエーションが存在するが、中でもU・C・0076・12に生産された派生型は、局地戦用MSと並行して開発された陸戦用機器などが試験的に装備された仕様で、青い巨星ランバ・ラルの乗機となったともいわれている。

一年戦争の地上戦に投入されたザクIは、陸戦用機器を搭載したB型がほとんどだが、中には総合性能向上型のMS・05SザクIS型や、狙撃仕様として再生されたMS・05LザクI・スナイパータイプなどが存在したという説もある。



ザクIは重力下の運用にも対応しており、陸戦用装備が追加されたB型が地上で運用される例も多かった。

こうして多数が生産され、兵器としても成熟していたザクIだが、稼働時間が軍部の要求よりも短く、また設計上の余裕も少なかった。また、発展性にも乏しかったためにジオン公国軍上層部は必ずしもその性能に満足していなかった。

そこでジオン公国軍はザクIの改良ではなく、根本的に設計を見直した新型MSの開発に着手したのだった。

## MS・06 ザクIIの開発と構造

ザクIの後継となる主力MSとして開発された機体が、「MSの代名詞」とまで呼ばれる名機、「MS・06 ザクII」である。

その外見のため、ザクIIはザクIの単純性能向上型と思われることが多い。しかし、ザクIIは当時の時代背景と他計画との兼ね合いもあって、難題といっている仕様要求の下で生まれたMSだった。

特にザクIIの開発に大きな影響を及ぼしたものが、ジオン公国軍首脳部の中で決定事項となっていた地球侵攻と、U.C.0076.12に着手された地球侵攻作戦用の局地戦用MSの開発のふたつである。

この結果、ザクIIには、宇宙戦やスペース・コロニー内戦闘だけでなく、多彩な環境を

有する地球にも適応した機能と性能が求められたのである。この仕様要求は、ザクⅠの持つ汎用性を遥かに超えるものだった。

ザクⅡに必要とされた主要な要素は

- ①稼働時間の延長
- ②出力の向上
- ③拡張性の確保
- ④高度な汎用性の獲得

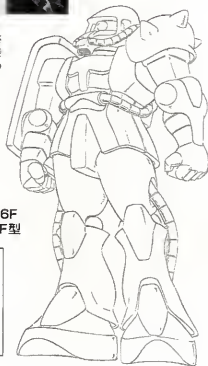
となる。

これらの解決には、それぞれ別個の解決策が採られたわけではない。特定の問題解決のために導入した新技術が、ほかの問題の解消に繋がっていったというのが、ザクⅡ開発時の特徴であった。

ザクⅡの基本構造でも特徴的な点は、反応炉やコクピットを含むあらゆるパーツが交換可能だったことである。パーツを換装することで性能の向上が容易となり、兵器としての寿命延長にも役立った。



実戦投入されたザクⅡは、一年戦争を通じて使用され、ジオン公国軍を代表するMSとして知られるようになった。



MS-06F  
ザクⅡF型

全高：17.5m  
本体重量：56.2t  
ジェネレーター出力：976kW  
スラスター推力：43,300kg  
装甲材質：超硬スチール合金  
兵装：ザク・マシンガン/ザク・バズーカ/  
ヒート・ホーク/シールド



爛座した直後のザクⅡ改に触り、装甲の熱に驚くアルフレッド・イズルハ。装甲からの排熱機構を表すエピソードのひとつである。

また、戦線の拡大によって工場数が増加した際に、生産工場ごとの品質に異なっていた場合でも、最小限の互換性が確保されていれば、ザクⅡの稼働は約束されることにもなったのである。このような構造は「③拡張性の確保」に直結すると共に、「④高度な汎用性の獲得」にも繋がった。

つまりザクⅡの開発陣は、後のRX・78・2ガンダムのようなノンオプションでの汎用性（万能性）を求めたのではなく、パーツ換装や小改装、プログラムの変更などによって汎用性を確保しようとしたのである。この方式であれば生産性を維持したまま、高度な汎用性と拡張性が共存させられ、高い整備性の確保も可能であった。

「②出力の向上」は、ZEONIC社とM&Y公社が共同開発したMYFG・M・ES系の新型熱核反応炉によって達成できた（ただし、ザクⅡC型まではZAS社の熱核反応炉を搭載していたようである）。ザクⅠの出力向上が難しかったのは、内部構造がパーツ交換に適していなかったのも一因だが、高出力反応炉を搭載した場合、発生する熱を排出できないことも大きな理由であった。また、いかなる廃熱機能を設けようと、MSは熱が

溜まり続ける傾向にあるため、ザクⅠに廃熱能力の低さは、稼働時間の短さにも直結した問題だったのである。

特に宇宙でのMSは、発生した熱を推進剤に移し、これを噴射することで廃熱するが、機体の高出力化に伴いこれだけでは十分な廃熱能力を確保できなくなった。熱を赤外線として逃がす輻射（放射）も宇宙では重要な廃熱手段だが、大きな放熱板を持たず、伝熱性も低いザクⅠでは充分に活用できなかったのである。

ザクⅡでは出力や駆動性の向上の一環として、動力パイプを外部に露出させている（ザクⅠでは動力パイプは内装されていた）。こうすれば動力パイプの大口径化が容易となり、エネルギー・サプライヤーとしての機能も向上する。また、動力系を完全に分割することで整備性が向上するほか、動力パイプに補助機能を設けることも容易となる。

そこでザクⅡでは、動力パイプに伝熱装置としての機能を盛り込み、発生した熱を機体各部に分散できるようにした（熱伝導体自体が高性能だったことはいうまでもない）。さらに、装甲板も面積が大きかったこともあり、ここに熱核反応炉を中心に発生する熱を逃がすことで、輻射も充分に活かせるようになった。廃熱問題の解決により「①稼働時間の延長」も解決されたのである。

こうして様々な問題がクリアされた結果、U.C. 0077、08、ザクⅡの試作型がロールアウトしたのである。

## ザクⅡの各部の構造

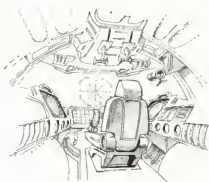
ザクⅠから基本的フォルムを受け継いだザクⅡだが、内部構造やシステムは独自のものを採用しており、後に開発されるMSに大きな影響を与えた。そこで本項では、ザクⅡのスタンダードにして決定版であるF型を例に、ザクⅡの各部の構造を解説していく。

外部映像認識装置であるモノアイが搭載された頭部は、ザクⅡのメイン・センサー・ユニットである。ザクⅡのモノアイは、グラモニカ社製のメインフレームにカノム精機の光学装置とフェリペ社のセンサーを組み合わせたもので、モノアイ用走査レールは左右に約90度、合計約180度の走査範囲を持ち、頭部の可動域を併用すれば全周囲の監視が可能であった。モノアイはミノフスキー粒子散布環境下を考慮した光学カメラが主だが、受動的なものだけではなく、レーザー通信装置や光信号装置など能動的な通信機能も持っていた。

また、F型はカタパルトからの発艦を前提としているため、ナビゲーション・システムも搭載している。



モノアイの発光機能はモールス信号を用いた通信にも使われた。有視界戦闘を想定したMSならではの機能だったといえるだろう。



ザクⅡコクピット内部

ランドセルの熱核ロケット・エンジンは重力下での飛行や滞空こそ難しいものの、短時間のジャンプ移動を可能としている。



腰部アーマーは可動式で、脚部の動きに干渉しない構造になっている。こうした設計によって、さわめて人体に近い挙動が可能だった。

とした仕様である。これにより、高性能化やほかの仕様へのバリエーション・チェンジが容易なほか、拡張性や汎用性確保の面でも重要な構造となっている。

腕部の基本構造は、ザクIのモデルをほぼそのまま継承した。ただし、対MS格闘戦用として右肩に懸架式シールド、左肩にスパイク・アーマーを固定装備している点

胴体ユニットは、コクピットやメイン・コンピュータ・システムなどの操縦・管制系だけでなく、熱核反応炉や熱核ロケット・エンジンといった動力系も搭載するメイン・モジュールである。

搭乗システムはかなり特殊で、パイロットは左胸のエアロックを経由して、右胸のコクピットへ移動する。これは、ザクIを含むほかのMSには見られない機構であり、後発のジオン公国軍系に受け継がれなかった数少ないシステムであった。



ザクII F型のコクピットに乗り込むジーン。左側のハッチが開いている様子と、内部でシートが移動していることがわかる。



同じF型でもコクピットハッチの開閉構造が異なるタイプがあり、こちらは胸部装甲全体が展開して内部ハッチが露出する。

がザクIとの違いである。

脚部ユニットは、メインのAMBACシステムとして稼働するだけでなく、ふくらはぎ部には補助バーニアを搭載していた。足底部にもスラスタが配置されており、宇宙での姿勢制御や、歩行時やジャンプ時における補助システムとしても機能した。

F型の装甲は複合装甲となっているため耐弾性には優れているが、ダメージ・コントロール能力は低く、思わぬ箇所への被弾が機体の稼働不良や誘爆を招くこともあった。

## ザクII用兵装の開発

ザクIIの兵装はザクI用の発展型がほとんどだが、多様化する戦局に対応するため、いくつかの補助火器が新規に開発されている。

ザクII用の主兵装は、ザクIと同じくザク・マシンガンではあるが、大きく分けて2種類が存在する。

代表的なモデルとして知られるものが、120mmザク・マシンガン（Z E O N I C社の



ガンダム・ハンマーの直撃を受けるザクII。現行兵器相手には十分な耐弾性を有していたが、対MS戦においては撃破されるケースも多かった。





90mmマシンガンを携行するザクⅡ改。一年戦争後期から運用されたこの兵装は、ザク系列機だけでなく他機種にも広く装備された。

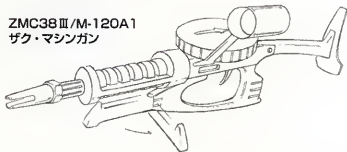
ZMC38Ⅲ/M・120A1)である。

これは機関部の上にドラム・マガジンを設置したもので、一般的に「ザク・マシンガン」といえばこのタイプを指す。マガジンひとつあたりの装弾数は145発で、弾種は対宇宙艦徹甲弾、徹甲弾、翼安定徹甲弾、散弾、通常弾、榴弾など（対空砲弾はバーチカル式マガジン）が用意された。対宇宙艦用や対宇宙戦闘機用としてだけ

でなく、大気圏内では対車両用としても有効であるなど多用性に優れていた。また、地球連邦軍のMS投入後には対MS用として使用された。ほぼ同型のザク・マシンガンとして、ZENIC社のZMP・50DとMMP社のMMP・78が存在するが、基本的にはマイナー・チェンジャーで性能差はほとんどなかった。

もうひとつの系統のザク・マシンガンが、対MS戦を重視した90mmザク・マシンガン（MMP社のM

ZMC38Ⅲ/M-120A1  
ザク・マシンガン



MS以前の兵器

MSの誕生

MSの実践運用

局地戦用MSの  
開発

次期主力MSの  
開発

ニュータイプ  
専用機の開発

MAの開発



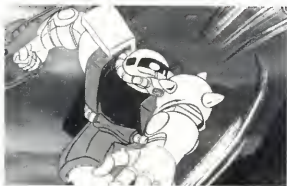
H&L-SB25K/280mm A・P  
ザク・バズーカ

MP・80)で、主にザクⅡF2型やザクⅡFZ型などの後期生産型以降のザクⅡや、統合整備計画に準拠したMSで使用されている。投入時期は不明だが、これらの火器は戦後にジオン公国軍残党なども用いられたことから、相当な数が戦線に出回っていたと思われる。また、120mmザク・マシンガン、90mmザク・マシンガンは共に銃身下部にグレネード・ランチャーの取り付けが可能であった。

ザクⅡ用の280mmザク・バズーカ(ハニーウォール&ライセオン社のH&L-SB25K/280mm A・P)は、ザクⅠ用の小改良型であり、基本的な仕様はほとんど変わっていない。大口径弾の火力を活かして、宇宙艦艇や巨大陸戦艇などの対ハードターゲット用として多用されたほか、シールドの標準装備により優れた耐弾性を持つ地球連邦軍のMSへの攻撃にも使用された。



シュトルム・ファウストや脚部ミサイル・ポッドなどの兵器も多用され、ザクⅡの火力増強に役立った。



クラッカーを投げるザクⅡ。投擲後に弾頭が散らばることで、広範囲に効果を及ぼした。腕を有するMSならではの兵装といえる。

また、棒状発射機の先端に大型ロケット弾を装填したシュツルム・ファウストも開発され、使い捨てながらザク・バズーカ以上の破壊力を持つ火器として一年戦争の初期からの使用が確認されている。

格闘兵装のヒート・ホークは、タイプ5と呼ばれる仕様にバージョンアップされている。ザクⅠ用と同様、対艦攻撃や建造物破壊用などとして用いられたが、やはり地球連邦軍のMS投入後は、数少ない対MS格闘装備として重用された。

これらの兵装は、基本的にマニピュレーターで扱うメイン・ウェポンだが、ザクⅡでは補助火器も充実していた。

主に陸戦用のザクⅡJ型が装備した補助火器として、「フットポッド」とも呼ばれる脚部3連装ミサイル・ポッド (Zi・Me/Triples Missile Pods) が知られる。これ以外にも多弾頭手榴弾のクラッカー (MIP・B6 (cracker))、長射程手榴弾のハンド・グレネイドなどのMS用手榴弾も開発されている。

これらの補助火器を含めて、兵装の外装化を徹底しているザクⅡだが、唯一の例外としてザクⅡJ型が内装する接

近防御兵器がある。

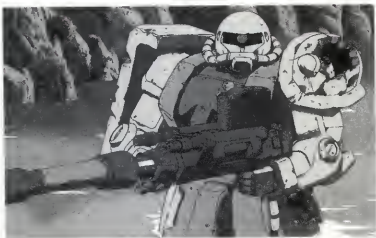
「Sマイン」とも呼ばれる接近防御兵器は、歩兵への対処を目的とした対人兵器で、機体の周囲に散弾を

発射する。

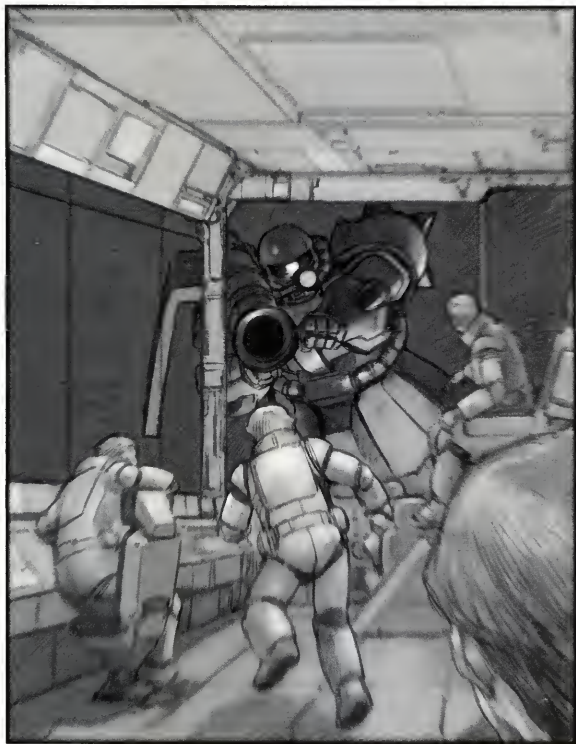
ヒート・ホーク (タイプ5)



MS用として開発された火器ではないが、物資が不足した部隊では「マゼラ・トップ砲」こと175mm無反動砲 (ZIMMAD社のZIM/M・T・K175C) を装備するザクⅡも見られた。この175mm無反動砲は、多目的万能砲として開発されたため、グリップを取り付ければMSでも使用可能で、行動不能となったマゼラ・アタック、またはマゼラ・トップから砲のみを回収し、MSに搭載するケースも散見された。ザクⅡJ型が装備した例が多いことから陸戦用火器と思われることも多いが、これはマゼラ・アタックの絶対数の問題であり、宇宙でも使用可能であった。



マゼラ・トップ砲は物資の欠乏に悩まされていた地上部隊での運用が目立った。長砲身の大口徑砲で、主に支援砲撃などに用いられた。



## ザクⅡのバリエーション

U・C・0077・08にロー  
ルアウトした試作機とその同型機  
が、MS・06A ザクⅡA型であ  
る。生産数は84機だった。

A型は、重力下での運用に対応  
しておらず、一般的なザクⅡに装

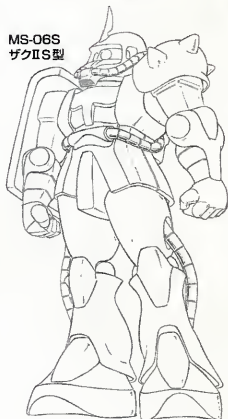
備された右肩のシールドと左肩のスパイク・アーマーを持たなかった。

その代わりに、両肩にはザクⅠの左肩に装着されたような球形の装甲が  
装備されており、初期のザクⅡの中では最も特徴的なシルエットを持つタ  
イプとなった。

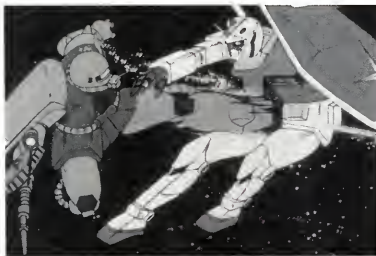
初めてシールドとスパイク・アーマーを装備したザクⅡが、U・C・  
0077・09に先行量産が開始されたMS・06C ザクⅡC型である。  
なお、本格的にC型の量産がスタートした時期は、U・C・0078・  
01のことで、236機が生産された。

シールドとスパイク・アーマーの装備は、キシリア・ザビ大佐（当時）の発案によるも

MS-06S  
ザクⅡS型



全高：17.5m  
 本体重量：56.2t  
 ジェネレーター出力：不明  
 スラスター推力：不明  
 装甲材質：超硬スチール合金  
 兵装：ザク・マシンガン／ザク・バズーカ／  
 ヒート・ホーク／シールド



ガンダムを圧倒するシャア・アズナブルのザクⅡS型。この機体は扱いが難しいS型の性能が引き出された代表的な例であった。

ので、地球連邦軍のMS投入を警戒した対MS格闘戦用装備となっていた。

これらの格闘装備以上にC型の特徴となったものが、核兵器運用能力である。

比較的近距离で核兵器を使用するため、放射線防護が重視されており、装甲は放射線減速材を充填した多重空間装甲を採用していた。

C型に続いて、ザクⅡの基本形となったMS・06F ザクⅡF型の生産が行われた。生産開始はU・C・0078・12であった。

総生産数は3246機といわれるが、シリーズ全体で8000機という説もある。

F型は、C型から核兵器運用能力を排除し、コクピットの緩衝装置の強化や、腕部への武器搭載システムの追加に、複合装甲の採用などが図られている。

操縦性と性能バランスに特に優れているほか、軍部から求められた汎用性と拡張性という面では、ザクⅡシリーズの中でも屈指のスペックを持つタイプとなっていた（この拡張性を活かして、

行動半径の大幅拡大を目指した試作プロペラントユニットが装備されたが、試験中に爆発事故を起こしている。ただし、この時のザクⅡはC型だった可能性もある。

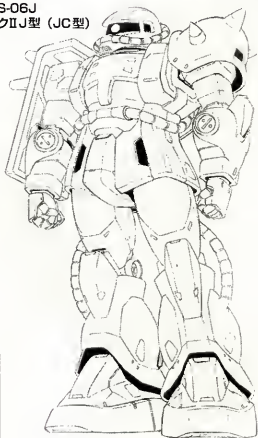
そのF型の総合性能向上型として開発されたタイプが、「MS・06S ザクⅡS型」である。生産数は約100機とされる。

核反応炉は軽量なMYFG・M5ESSX型を2基搭載し、スラスター推力も約30%強化されたといわれる。

高出力化に伴い操縦性が悪化しているため、一般的なパイロットには扱いにくい機体であった。しかし、これを使いこなしたパイロットの中には、限界を超えた性能を引き出す者もいた。

中でも、赤い彗星、ことシヤア・アズナブルのS型は有名で、「通常

MS-06J  
ザクⅡJ型 (JC型)



全高：17.5m  
 本体重量：56.2t（全備重量：74.5t）  
 ジェネレーター出力：976kW  
 スラスター推力：43,300kg  
 装甲材質：超硬スチール合金  
 兵装：ザク・マシンガン／マゼラ・トップ砲／  
 クラッカー／脚部3連装ミサイル・ボッドほか



の3倍の速度」ともいわれる超高速戦闘を行っている（シャア以外にも、黒い三連星の3人がS型を使用した。S型だけで編制されたMS小隊は、これだけと考えられる）。

また、ノンオプションで大気圏内外の環境に対応可能であり、高級機としての側面も持つ機体となっていた。

大気圏内外両用のF型やS型と異なり、陸戦に特化したタイプがMS・06JザクⅡJ型（陸戦用ザクⅡ）である。

反応炉を空冷式のJ21・M3ESJに換装したほか、インタークへの防塵フィルター設置、燃焼室の換装、脚部への対地センサー及びハード・ポイントの追加、AMBACシステムの省略などが行われており、空間運用能力は持たなかった。

J型を小改装したタイプも多く、MS・06JB系列機や東南アジアで見られたMS・06JCなどが確認されている。

だが基本的には、生産地域や生産時期の違いによるマイナー・チェンジ機であり、決定的な性能差はなかった。

なお、これらF型とJ型、およびS型は、熱核反応炉／ジェネレーターやスラスター関連を除けばほとんど同じMSである。

特にF型とJ型は極めて近い機体であり、F型からJ型へは容易に換装でき、その逆も同様に可能であった。

こうしてザクⅡの代表的モデルとなったF型、J型、S型だが、それ以外にもザクⅡをベースとした多数のバリエーション機が開発されている。

## 代表的なザクⅡのバリエーション

砂漠・熱帯地帯用のMS・06D ザク・デザートタイプ（ディザート・ザク）

偵察仕様のMS・06E ザク強行偵察型

機雷設置用ランドセルを装備した、MS・06F ザク・マインレイヤー

総合性能向上型のMS・06FS ザクⅡFS型

地上での機動性向上を狙った、MS・06G 陸戦高機動型ザク

砲戦仕様のMS・06K ザク・キャノン

水陸両用のMS・06M（MSM・01）水中用ザク

宇宙用高機動仕様のMS・06R 高機動型ザク

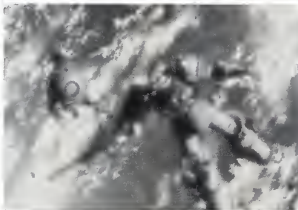
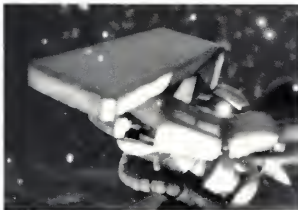
ドム・タイプの脚部を装備した、MS・06RD・4 宇宙用高機動試験型ザク

訓練用のMS・06T 教習訓練用ザク

ザクとマゼラ・ベースを組み合わせた現地改修機、MS・06V ザク・タンク

使用不能なMSのパーツで組み上げた作業用MS、MS・06W 一般作業用ザク

C型から採用され、以降のザクⅡシリーズの標準装備となった右肩部のシールドは、耐弾性の向上に大きく寄与している。



J型は重力下の運用に最適化された仕様であったため、無重力環境ではザクⅡ本来の機動性は発揮できなかった。

サイコミュ搭載のMS・06Zサイコミュ・システム試験用ザクZ型2号機の改造機である、MSN・01サイコミュ・システム高機動試験機ビーム兵器の装備とマグネット・コーティングが施された、MS・11アクト・ザクなどがザクⅡのバリエーション機として知られる。これらの中には局地戦用MS開発や新型機の研究において、重要な役割を果たした機体もあった。

# 存在だけで味方を鼓舞し、敵を恐怖させた カスタム・カラーのMS

『赤い彗星』シャア・アズナブル少佐のザクⅡS型が、パーソナル・カラーの赤系で塗装されていたことはよく知られている。しかし、これはシャア少佐の独断でなされたものではない。ジオン公国軍では士気を向上させるため、高い戦果を挙げたパイロットにMSのカスタマイズを許可しており、塗装の変更も容認されていたのである。

この結果シャア以外にも、『青い巨星』ランバ・ラルの青や、『黒い三連星』の3人の黒、『真紅の稲妻』ジョニー・ライデンの紅、『ソロモンの白狼』シン・マツナガの白など、特定パイロットと機体色の組み合わせが誕生することになった。

また、渾名にこそ色が含まれないが、『ソロモンの悪夢』アナベル・ガトローの緑と青、『シーマ・ガラハウの紫、ガルマ・ザビの茶系色なども有名である。

パーソナル・カラーを許されるパイロットは、いずれもエースパイロットであり、敵味方からの認知度も高かった。このためパーソナル・カラーで塗られたMSは、戦場に存在するだけで敵



シャア・アズナブルの乗機のひとつはパーソナル・カラーで塗装されており、水陸両用MSのズゴックも例外ではなかった。



ホワイトオーガーことエルマー・スネルの活躍を伝えるプロパガンダ映像。彼の機体にはトカゲのマーキングも施されていた。

グフのカラーリングは試作機を駆ってガルマ・ザビの仇討ち部隊を率いたランバ・ラルのパーソナル・カラーにちなんで青とされた。



ガルマ・ザビは自らが搭乗するドップにパーソナル・カラーを施したほか、同じカラーリングのザクⅡFS型も運用したとされる。

味方の士気に大きな影響を与えた。

またジオン公国も、エースパイロットとパーソナル・カラーのMSを積極的にプロバガンダに利用しており、ヨーロッパ戦線で活躍した「ホワイトオーガー」ことエルマー・スネル大尉と彼の白いザクⅡJ型などが、ジオン国営放送で紹介されることも多かった。

また、パーソナル・カラーが一般の機体色に転用されるケースもある。代表的なものが、ランバ・ラルの青で統一されたグフや、「黒い三連星」の黒で塗装されたドムおよびリック・ドムで、地球連邦軍では見られない事例となっていた。

こうしたエースパイロットの中には、パーソナル・マークを用いる者もいた。パーソナル・カラー同様、ジオン公国軍では戦果のあったパイロットにパーソナル・マークの使用が認められており、多くのバリエーションが確認されている。これも味方の士気を向上させるだけではなく、プロバガンダの一環を担っていたことは間違いない。パーソナル・マークのほとんどはパイロット個人を示すものだったが、部隊で共通するマークを使用するケースなども確認されている。



ヘルベルト・フォン・カスベン大佐のパーソナル・マーク

ヨルムンガンド  
運用部隊の部隊マーク



# MSの基本戦術確立と二年戦争緒戦の絶大な戦果

## 教導機動大隊の編制と戦術研究

MS・01誕生の翌年には、MS・05ザクIの試作機をロールアウトしたジオン公国軍だが、その運用法についてはまだ確立されていなかった。

ミノフスキー粒子散布環境下でのMSは、それだけでも強力な兵器だが、効率的な部隊編制や運用方法、戦技などの研究は必要不可欠だったのである。

そこでジオン公国軍は、MS・05ザクIの制式化とザクIA型（初期先行試作量産型）のロールアウトを受けて、U.C.0075.11、MSの戦術研究を目的とした機動教導大隊を編制した（演習開始は、U.C.0076.05とされる）。

大隊はキシリア・ザビ大佐（当時）の主導で編成され、〃黒い三連星〃のガイア、オルテガ、マツシユのほか、シャア・アズナブルやランバ・ラル、ガダムなど、一年戦争で目覚ましい活躍を見せることになる将兵たちが、パイロットとして参加していたといわれている。



後に突撃機動軍司令を務めたキシリア・ザビは、MSの開発や実用化を推進した人物で、MS躍進の立役者として知られている。



黒い三連星

ザクⅠA型を用いて開始された戦術研究の結果、MS3機で1個MS小隊、3個MS小隊で1個MS中隊、3個MS中隊で1個MS大隊とする、ジオン公国軍MS部隊の基本編制が完成した。ただし一年戦争時の特務小隊では、2機編制や4機編制といった変則的編制も見られたほか、中隊長機が所属する小隊のみ4機編制という例もあった。

また、ザク・マシンガン装備機のみで編制されたMS小隊と、ザク・バズーカ装備機のためのMS小隊のように、小隊単位での任務の固定も試されている。

だが、多用途性に優れた混成装備のMS小隊や異機種混成小隊（ザクⅠB型1機とザクⅡJ型2機など）も見られるようになっており、実戦での戦訓によって教導機動大隊の戦術が変更されることも多かった。

教導機動大隊は、実戦部隊のMS訓練も頻繁に行っている。これはMSパイロットの練度の向上に役立った。また、一年戦争開戦以前、地域紛争レベルの戦闘に参加したという説もある。

その中でも、U.C. 0077.07のサイド6のケースで、ランク政権成立時の武力介入が特に知られており、そのときには教導機動大隊のザクⅠがコロニー内戦闘に投入されたといわれる。



ガDEM

MS以前の兵器

MSの誕生

MSの実践運用

局地戦用MSの  
開発次期主力MSの  
開発ニュータイプ  
専用機の開発

MAの開発

## 急速にロートル化したザクIとその運用

ザクI A型は27機全機が教導機動大隊に配備され、戦術研究やMSパイロット養成に用いられた。また、比較的小規模な武力衝突や月面での領土拡張、不満分子掃討などに投入されたといわれている。

後発機と比べれば、性能や拡張性に問題を抱えていたザクI A型だが、高い練度を持つ教導機動大隊のパイロットが搭乗したことや、初めてMSを見た敵兵がそれだけで戦意を失ってしまったこと、MSそのものが既存の兵器を凌駕する存在だったことなどから、無敵といっているほどの活躍を見せた。

改良型であるザクI B型は、A型を遥かに上回る793機が生産され、広く配備されたが、限界性能の低さやより性能の高いMS・06ザクIIの実用化に伴い急速に旧式化していった（ザクIIの配備が進みつつあった時期には、サイド3のスペース・コロニー、キンツェムで発生した反ザビ家クーデターの鎮圧などに投入されたといわれている）。

この結果、ザクIは一年戦争開戦前には輸



一週間戦争では、コロニー内にガス弾を発射するなどの任務に就いた。ザクIIの投入に伴い、補給部隊の護衛機などを行うようになった。





ガデムのザクIは補給中に奇襲してきたガンダムに対して非武装のまま戦いを挑んだが、性能差を覆すこと叶わず返り討ちに遭った。

送・補給部隊や宇宙艦隊および宇宙要塞の防衛などの後方任務に回されることが多くなっていた。

こうしてザクIIに活躍の場を譲ったザクIだが、前線でも局所的に脅威度が低いエリアでは投入されたケースもある。中でも一週間戦争でのイランド・イフィツシュ内へのGGガス散布や、同コロニー内での残存将兵の掃討に投入されている。こうした運用法は、MSならではのスペース・コロニー侵入能力や対人攻撃能力を活用した例として知られる。

しかも、イランド・イフィツシュを巡る戦闘では、ヒート・ホークを用いた格闘攻撃で宇宙艦艇を撃沈に追い込んだほか、鉄塔を引き抜いて投擲し、倒壊した高層建築物を受け止め、さらには押し返すなどといった、圧倒的パワーを見せ付けた。

しかしこのような稀有なケースや、ごく一部の古参兵が好んで使用した例を除けば、一年戦争時のザクIに活躍の機会はほとんどなかった。

教導機動大隊に所属したというガデム大尉が、ザクIB型でRX・78・2ガンダムに格闘戦を挑んだエピソードは有名であるが、これも一撃で撃破されている。

やはり、地球連邦軍の高性能MSの投入もあって、ザク

MS以前の兵器

MSの誕生

MSの実戦運用

局地戦用MSの開発

次期主力MSの開発

ニュータイプ専用機の開発

MAの開発



一年戦争中には既に旧式化していたザクIだが、地上における最後の総力戦となったオデッサの戦いにも投入されている。オデッサから離脱したトップ小隊は、ザクIが隊長機を務めていた。

## 地球連邦艦隊を撃破した、ザクIIシリーズの活躍

一年戦争開戦前には、サイド3のスペース・コロニー、キンツェムでの不満分子の掃討など、ザクIとほぼ同様の小規模戦に投入されていたといわれるザクIIだが、一週間戦争において本格的に実戦に投入された。

一年戦争開戦当時、制式配備されていたザクIIは、核兵器運用型の「MS-06C ザク

Iの戦闘兵器としての旧式化は決定的になっていたのである。だが皮肉なことに、ジオン公国軍が劣勢に立たされると、第二線級ながらザクIが前線に投入されるケースも増えていった。

これは単純にMSが不足していたことや、地球連邦軍の反撃によって、戦線が急激に後退したことなどが理由で、かつてはジオン公国軍のMS開発



MS-06F ザクⅡF型

ⅡC型」と汎用型の「MS・06F ザクⅡF型」、そして総合性能向上型の「MS・06S ザクⅡS型」であった。また、最初期型の「MS・06A ザクⅡA型」もごく少数ながら配備されており、地球侵攻を見越して陸戦用のMS・06J ザクⅡJ型の生産も行われていた。

S型は少数であったため、主力はC型とF型であり、ムサイ級軽巡洋艦などの宇宙艦艇を母艦として運用された。

一年戦争勃発後、最初の大規模戦闘となった一週間戦争において、ザクⅡの各タイプは主力兵器として対艦攻撃や対スペース・コロニー攻撃などに投入されている。

ミノフスキー粒子の広域散布により、索敵手段や通信システム、火器管制機構などを活かせなくなった地球連邦軍宇宙艦隊を相手に、ザクⅡは接近戦を仕掛け、次々と撃沈していった。

中には宇宙艦艇の甲板上に降り立ち、そこから直接攻撃を行うザクⅡも存在した。これこそがミノフスキー粒子散布下における戦闘であり、有視界戦闘能力と人型の機体構造、そして高度な機動性と運動性を持



ブリティッシュ作戦の時点ですでにジオン公国軍の主力になっていたザクⅡは、スペース・コロニーに対する攻撃などに投入された。

MS以前の兵器

MSの誕生

MSの実践運用

局地戦用MSの  
開発

次期主力MSの  
開発

ニュータイプ  
専用機の開発

MAの開発



ルウム戦役では地球連邦軍艦艇に接近戦を仕掛け、次々と撃破していった。サラミス級の艦橋を攻撃するシャア中尉のザクⅡ。彼はルウムにおける戦果によって勇名を轟かせた。

つMSの真骨頂といえた。

120mmザク・マシンガンや280mmザク・バズーカ、そして格闘兵装のヒート・ホークに代表されるザクⅡの標準兵装は対艦用としても有効で、艦橋構造物や砲塔など宇宙艦艇の重要箇所を易々と破壊した。

このようなザクⅡ用兵装の中でも特に強力だった兵器が、C型用の核バズーカである。核砲弾を発射する核バズーカは、その仕様からも分かるように一撃で宇宙艦艇を撃沈するほどの威力を持つており、「シップス・エース」と呼ばれる対艦エースを多数輩出する要因ともなった。

このほかにも核バズーカは、対スペース・コロニー用としても有効だった。特に、空気が存在する密閉空間のスペース・コロニー内部では、核爆発時に衝撃波が発生するうえ、その逃げ場もないため、十全に威力が発揮された。

宇宙戦闘機や宇宙艦艇からではスペース・コロニー表面への核攻撃になりやすいが、ザクⅡの場合、直接内部に進入した後に核攻撃が可能なのが画期的であった。

つまり一年戦争緒戦の戦場で、ザクⅡの核攻撃から逃れる手段は存在しなかったのでは

る。ただし、至近距離からの攻撃となるため、自機が発射した砲弾の核爆発に巻き込まれたザクⅡも存在しており、核攻撃は諸刃の剣であった。

一年戦争緒戦でザクⅡは、高い戦闘能力やスペース・コロニー内への侵入能力を発揮しただけではなかった。

コロニー落としを実施するためには、スペース・コロニーの一部改修や機器設置などの作業が必要だった。高精度なマニピュレーターを持つザクⅡは、こうした作業にも優れた適性を見せたのである。

このようにミノフスキー粒子散布下での戦闘能力だけでなく、高度な作業性能をも併せ持つザクⅡがなければ、一週間戦争でのジオン公国軍の戦術が成立しなかったことはいうまでもない。

一週間戦争に続くルウムでも、ザクⅡは数々の伝説を生み出した。

ルウム戦役でのザクⅡは、サイド5・11パンチのアイランド・ワトホートの質量弾化作業に投入された機体も多かったようである。しかし、この作業に従事したザクⅡは大重量の作業用装備しか搭載していなかったため、地球連邦軍の攻撃に遭い、多数が失われてしまったといわれている。

しかし、コロニーの質量弾化を断念した後、対艦攻撃に投入されたザクⅡは一週間戦争のような奇襲ではないにも拘らず、驚異的な戦果を挙げた。

MS以前の兵器

MSの誕生

MSの実戦運用

局地戦用MSの開発

次期主力MSの開発

ニュータイプ専用機の開発

MAの開発



シャアアズナブル中尉(当時)

たシャア中尉は、通常のザクⅡの3倍ともいわれる機動性を発揮し、核バズーカを装備していなかったにも拘らず、5隻もの宇宙艦艇を撃沈した。

ルウム戦役時のシャア中尉の活躍は「シャアの五艘飛び」とも呼ばれ、*「赤い彗星」*のふたつ名とともに地球連邦軍を震撼させた(これは敵艦の甲板などに接地した後に攻撃、その離脱時の反動とバーニアの噴射を組み合わせ、高い機動性を得るというもので、推進剤の消費を最小限に抑えることにも繋がったとされる)。

ルウム戦役直前にガイア、オルテガ、マッシュ(当時の階級については諸説あり、現在は不明となっている)の3人にメンバーが固定された*「黒い三連星」*こと、突撃機動軍第七師団第一MS大隊司令部付特務小隊は、C型に搭乗した。

地球連邦軍の宇宙艦艇を次々と撃沈した*「黒い三連星」*は、地球連邦軍第1連合艦隊旗艦のマゼラン級宇宙戦艦*「アナンケ」*をも轟



シャア中尉がルウム戦役で見せた縦旋技術はMSの運用性の高さを証明することとなった。

中でも有名なものが、その活躍で*「赤い彗星」*と渾名されるようになったシャア・アズナブル中尉(当時)と*「黒い三連星」*の3人である。

S型(C型ともいわれる)に搭乗し

## 地球連邦軍陸戦部隊を蹂躪したザクⅡJ型

U.C. 0079. 03. 01に開始された地球侵攻作戦でも、ザクⅡは主力MSとして投入された。

ただし、第1次降下作戦に投入されたザクⅡはF型のみで（後に地球上でJ型に改修された）、陸戦用のJ型が参戦したのは3月11日実施の第2次降下作戦以降のことだったといわれている。



『黒い三連星』はシャア中尉に匹敵する活躍を見せた。MSの威力は圧倒的な戦力差を覆して余りあるものであった。

沈ませた。この際、三位一体の対艦攻撃「ジェット・ストリーム・アタック」を使用したといわれる。

しかもこの際、第1連合艦隊司令を務めていたレビル將軍を捕虜にするという戦果も挙げており、地球連邦軍、ジオン公国軍の両軍にその名を轟かせた。

こうして、ミノフスキー粒子散布環境下における有視界戦闘能力や運用環境を選ばない汎用性、精密作業をもこなす多用途性などを発揮したザクⅡは、既存の兵器体系に頼り切っていた地球連邦軍を、文字通り一蹴したのである。



MS-06J  
ザクⅡJ型



地球降下作戦で初めて地上に降り立ったザクIIは、有効な対抗手段を持たない地球連邦軍を蹴散らし、ジオン公国軍の破竹の進撃を支えることとなる。

地上戦でのザクIIは、宇宙と異なり高度な機動性を発揮できないため、大気圏内での運用に特化した航空機や戦闘車両ならば対抗可能かとも思われた。しかし、現実にはMSは航空機などをも凌駕する戦闘能力を発揮したのである。

MSが投入されるエリアではミノフスキー粒子が散布されるため、精密電子機器への依存率が高い航空機の威力は低下し、主力戦車も火器管制システムにコンピュータを取り入れているため、MSに対しては有利ではなかったのである。

これに加え18m級の巨体は、それだけで地球連邦軍将兵を恐慌状態に陥れ、歩兵が接近戦を試みても、J型の標準装備である対人兵器（Sマイン）によって返り討ちに遭う可能性が高かった。

ザクIIの正面投影面積が大きいのは事実で、被弾率が高くなるとも考えられたが、これも大きな問題とはならなかった。地上戦におけるザクIIの仮想敵である61式戦車が、通常の交戦距離内で戦車砲を撃った場合でも、有視界戦闘に最適化されたザクIIは、敵弾の発射を確認してから回避行動に入っても充分に避けられたのである。

特に二足歩行システムは、キャタピラよりも突発的な移動自由度に秀でており、結果的に回避性能も高くなっていた。それに、ザクIIの装甲は61式戦車の150mm連装砲を想



定したもののため、命中してもダメージを与えられない可能性もあった。

つまり回避性能や耐弾性の面でのザクⅡは、主力戦車以上に優れており、待ち伏せ攻撃や奇襲、大部隊での攻撃でない限り、既存の兵器で撃破することは難しかったのである。

また、その全高ゆえに被発見率が高いはずのザクⅡも、障害物を使って隠匿性を高めることができ、知らない内にザクⅡの接近を許してしまったケースも散見された。

攻撃力を見ても、ザクⅡの方が優れていた。

主兵装である120mmザク・マシンガンは、61式戦車の戦車砲より小口径だが、装弾数や連射性能に秀で、MSの全高の都合上、高所から発射されるため、ほぼ自動的にトップアタック（比較的装甲が脆弱な上面から攻撃すること）となる。その結果、凄まじい火力と破壊力を発揮したのである。

また、モノアイとリンクしたザクⅡ用の火器は、ミノフスキー粒子散布環境下でも高い命中精度を誇り、移動中の61式戦車にも容易に命中弾を与えた。地球降下作戦当初、連射されたザク・マシンガンによって多数の61式戦車が多数撃破されたのは、このためであった。



地球連邦軍が歩兵でMSに対応するケースも多く、Sマインが威力を発揮した。敵兵士たちにとって18mの巨人は恐怖の対象にほかならなかった。

MS以前の兵器

MSの誕生

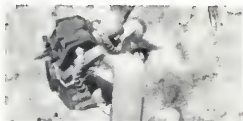
MSの実践運用

局地戦用MSの  
開発

次期主力MSの  
開発

ニュータイプ  
専用機の開発

MAの開発



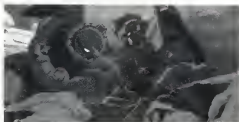
上空からの攻撃は対戦車戦において有効な手段であり、  
捕獲ザクを運用したセモベンテ隊もヒルドルフとの戦闘で  
同様の戦法を用いた。

また、ザクⅡはジャンプしながらの対地攻撃も可能で、これは  
防御手段や対抗手段が少なかった地球連邦軍地上部隊にとって、  
脅威以外の何物でもなかったのである。ジャンプはスラスタを  
併用する都合上多用しにくく、到達距離も短いものの、空中を経  
由した高速移動能力も与えるため、敵部隊の側面や背面に移動で  
きるメリットがあり、度々使用されている。

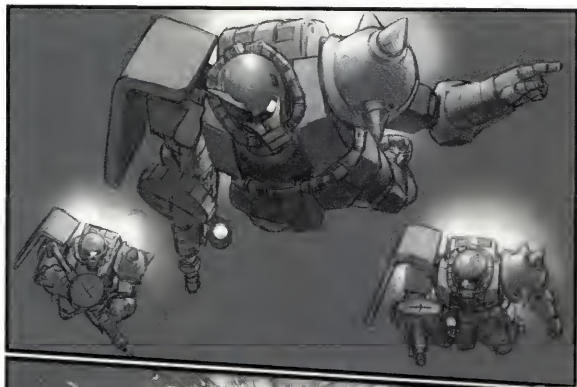
こうしてⅠ型を中心としたザクⅡシリーズは、地上戦において  
も地球連邦軍を脅かし続け、地球侵攻作戦で大きな役割を担った  
のである。

しかし、ザクⅡの決定版であるF型をベースに、陸戦装備を施  
したⅠ型も完全無欠のMSではなかった。

まず、陸上での基本移動方法が脚部であるため、長距離移動を  
中心とした機動性に問題があったこと、水圏や砂漠地帯を中心と  
した局地運用能力が低かったことが問題視された。また、対MS  
戦が行われた場合、格闘戦能力や火力が中途半端と考えられたこ  
ともザクⅡⅠ型の欠点とされていた。そのため、新型MSの開発  
ではこれらの点の改善が重視されることになった。



水中で陸戦型ガンダムと戦うザクⅡⅠ型。水中での性能  
は決して高くはなかったが、短時間であれば戦闘行動も  
可能だった。



## 大気圏突入カプセル

地球侵攻作戦を決定していたジオン公国軍は、膨大な数の兵員や兵器、物資を宇宙から地球へと降下させる必要性から、大量の大気圏突入カプセルを製造した。

このような大気圏突入カプセルは、大気圏内外両用戦闘艦のザンジバル級機動巡洋艦とは異なり輸送専用機であるため、生産性と積載能力、大気圏突入能力が重視されている。当然、武装は施されず、通常は自走能力すら持たなかった。

中でも有名なHLV (Heavy-lift Launch Vehicle) は、MS6機、または人員60名、戦闘車両10輦を含む大量の物資を積載したままでの大気圏突入が可能なので、地上への軟着陸能力も有していた。



HLV

宇宙艦艇や航空機のような機動性（単独移動能力）こそ持たないが、専用ブースターの装着により、地上から宇宙への打ち上げも可能となっており、大重量離昇機として多数が投入された。地上に降下したHLVからは、MSや戦闘車両、歩兵部隊などのジオン公国軍陸戦部隊が展開し、瞬く間に地球を制圧していった。



高い積載能力を有したHLVは、地球降下作戦における兵員輸送を一手に担い、ジオン公国軍の戦力展開に大きく貢献した。



投下コンテナは地球周囲軌道に展開した輸送艦隊から地上に向けて投下され、地上での回収後は前線の兵舎としても用いられた。

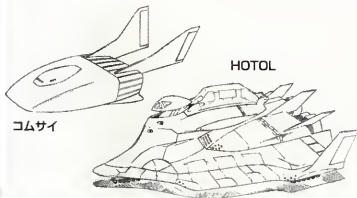
ちなみにHLVはオデッサ作戦後、地球上から撤退する際にも利用されている。なお、本装備は一年戦争終結後もいくつか地球に残されており、アフリカに潜伏していたジオン公国軍残党が地球連邦軍から奪取した試作ガンダムを宇宙に打ち上げるために使用したことが確認されている。

また、打ち上げ能力を持た

ないHLVといえる、HRS L (Heavy Return Storm Launch) も多数生産され、ジオン公国軍の地球侵攻を支えた。

この他にも、宇宙から地上に物資を送るための投下コンテナも大量に使用されており、HLVやHRS Lほどの積載能力は持たないものの、地球上への物資輸送で重要な役割を担うことになったのである。

これらの非自走式の大量輸送カプセルとは異なるが、最大でMS3機を搭載できる大気圏突入艇コムサイ（ムサイ級軽巡洋艦に標準搭載される）や、MS1機を搭載可能な地球往還機HOTOLなどにも実用化されており、連絡や特殊任務などで使用された。





MS以前の兵器

MSの誕生

MSの実戦運用

局地戦用MSの  
開発

次期主力MSの  
開発

ニュータイプ  
専用機の開発

MAの開発



## 第四章

# ジオン公国軍の快進撃と地球侵攻 ～局地戦用MSの開発～

## 地球侵攻作戦の決定と

## 地球環境に対応した局地戦用MSの必要性

### 地球侵攻作戦の決定と、局地戦用MSの必要性

ジオン公国は、公国宣言直後には既に地球侵攻作戦を決定事項としていたと考えられる。

その結果、主力戦車マゼラ・アタックやダブデ級陸戦艇などの重力下用兵器が開発されたが、MSが実用化されると、それにも高度な陸戦能力が期待されるようになった。

確かにMSは、大気圏内外に対応可能な汎用機動兵器であり、史上初の実戦用MSであるMS・05ザクIの時点で、スペース・コロニー内戦闘にも充分以上に耐えられる性能を有していた。しかし、スペース・コロニー内とは異なり、地球の環境はあまりにも多様で過酷なものであった。

一面の岩肌や砂地が続く砂漠地帯、樹木が生い茂った森林地帯、雪原や氷土で覆われた寒冷地帯、海拔千m級の山々が連なる山岳地帯、そして海に代表される広大な水圏などで構成された地球は、MSにとっては未知の空間であった。



海中に砂漠、ジャングルと、地球上には初期のMSでは対応しきれない環境が多く存在した。MS戦術を徹底するうえで、各環境への対応が必要となった。



もちろん、そうした地域のすべてを制圧する必要はないが、資源地帯の確保や、地球表面の七割を占める水圏などを鑑みれば、局地戦に対応した大気圏内用MSは不可欠であった。

そこでジオン公国軍は、ザクⅠの量産が開始された翌年のU.C. 0076. 12、地球侵攻作戦を前提とした局地戦用MSの開発に着手したのだった。

### 初期陸戦用MSの開発と、地球侵攻作戦の実施

陸戦用／局地戦用MSは、既存のMSを陸戦仕様に換装する陸戦用デバイスと並行して開発された。また新主力MSであるMS・06ザクⅡが、地上戦能力を含む高度な汎用性を追及されたこともあって、大気圏内用MSの開発は大プロジェクトとなっていた。こうした中、最初に誕生した陸戦用MSと考えられる機体が、U.C. 0076. 12に生産された陸戦用デバイス搭載タイプのザクⅠB型である。当然、完全新設計の局地戦用MSではなかったが、ザクⅡも完成していなかった時期でもあったため、陸戦用MS開発のデータ収集で重要な役割を演じたと思われる。

その後ザクⅡの誕生に伴って、地上戦に特化したMS・06JザクⅡJ型が開発された。しかし、これもやはり熱核反応炉やスラストなどを大気圏内用に換装した機体で、陸戦対応能力もコンピューター・シミュレーション上のものでしかなく、実際の陸戦能力

はまったくの未知数だったのである。

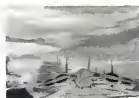
こうして本格的な局地戦用MSが実用化されないまま、U.C. 0079. 02. 07、地球侵攻作戦が開始された。この中でザクⅡJ型や陸戦用機器搭載のザクIB型は、地球連邦軍地上部隊に対し驚異的な戦闘能力と優れた重力下対応能力を見せ付け、データ上の陸戦能力が妥当であったことを証明した。しかし、やはり少なからぬ問題も露見した。特に問題視されたのが、戦術／戦略面での低機動性や行動半径の狭さ、水圏や砂漠地帯といった極端な地形への対応能力不足である。

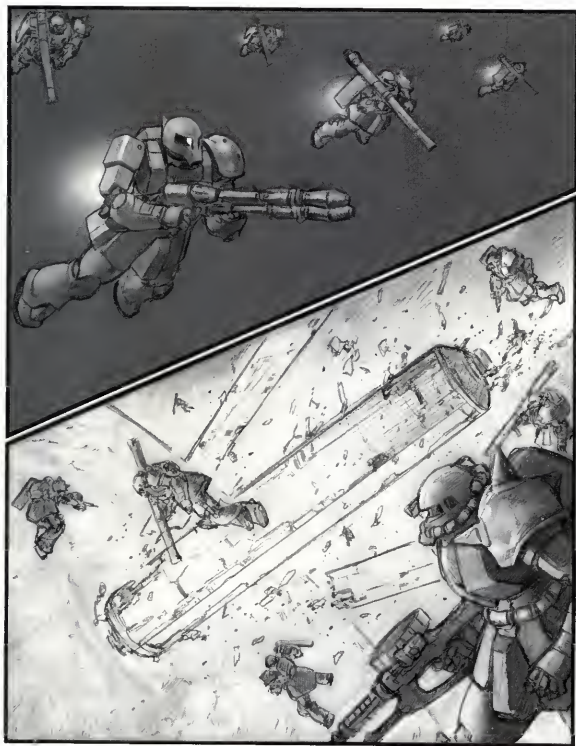
局地戦用MSの開発の中でも、これらの問題に対して様々なアプローチが試みられてはいたが、地球侵攻作戦序盤の時点では決定的な結論は出ていなかった。MS開発技術が過渡期であったことに加え、スペース・コロニー国家のジオン公国は、大気圏内での運用に特化した局地戦用MSを開発するほどのノウハウを持たなかったのである。

しかし、U.C. 0079. 03. 11に開始された第2次降下作戦で、北米の巨大複合型軍事施設キャリフォルニア・ベースを占領したことがこの状況を一変させた。同基地の確保によってジオン公国軍は、理想的なテスト環境と開発・生産施設を手に入れたのである。

こうしてジオン公国軍は、陸戦専用MSや水陸両用MSといった局地戦用MSの開発を加速させていった。

地球方面軍司令ガルマ・ザビ大佐が運用した北米のジオン公国軍基地。キャリフォルニア・ベース同様、北米大陸支配の拠点として機能した。





## 地球侵攻のために設立された「地球方面軍」

南極条約締結直後のU.C. 0079. 02. 01に、ジオン公国は地球侵攻を前提とした「地球方面軍（地球攻撃軍ともいわれる）」の設立を公表した。司令には、公王デギン・ソド・ザビの末子であるガルマ・ザビ大佐が任命された。

地球方面軍は、欧州方面軍、北米方面軍、緊急即応軍、中央アジア方面軍、東アジア方面軍、豪州方面軍、アフリカ方面軍などから構成され（各軍の名称は地球降下後に変更されたもの）、数度に亘る降下作戦で地球各地に展開すると、重要地域を制圧していった。

こうして地球侵攻作戦の要となった地球方面軍は、組織上でこそ宇宙攻撃軍や突撃機動軍と同列だが、事実上キシリア・ザビ少将の突撃機動軍の下部組織であった。これは地球方面軍の編制を、突撃機動軍の将兵中心で行いたいというキシリア少将の言を容れた結果だった。なお、ドズル・ザビ中將はこれを承認する代わりに、ドロス級超大型輸送空母の2番艦「ドロワ」を自身の宇宙攻撃軍に組み込んでいる。



ガルマ・ザビ大佐

ガルマ・ザビは北米大陸に展開するジオン公国軍部隊の指揮だけでなく、現地有力者との対外折衝も担った。



また、欧州方面軍司令のユーリ・ケラーネ少将のような上位階級者がいるにも拘らず、政軍両面での経験の浅いガルマ・ザビ大佐を地球方面軍司令に任じている。このことから、地球方面軍がザビ家の政治的な都合に左右されていたことが理解できる。



ユーリ・ケラーネ少将



豪胆な性格で部下の信頼を得ていた人物で、オデッサ戦の敗北による欧州方面軍部隊の撤退を指揮した。



キシリア・ザビの懐刀として活躍したマ・クベ。中央アジアに強い影響力を持つ高級将校だった。



マ・クベ少佐

これにより編制上の名目はともかく、地球方面軍は突撃機動軍の指揮下に置かれ、ガルマ・ザビ司令本人もキシリア少将を直属の上司と考えていたのである。この背景にはザビ家内の勢力争いがあるとされ、キシリア少将は地球上の資源地帯や工業地帯、重要政治地域などを押さえることで、勢力を伸ばそうと目論んでいたといわれる。

またキシリア少将は、地球方面軍とは異なる指揮命令系統に置かれた、地球資源探掘師団（キシリア少将直轄の部隊で団長はマ・クベ少佐。後に大佐）を派遣しており、地球で探掘された資源の何割かを独占していたのだった。

# 地球全域を制覇した ジオン公国軍の局地戦用MSシリーズ

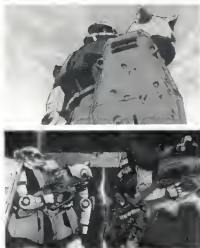
## 局地戦用MSの開発I——陸戦用MS

陸戦に特化したザクⅡJ型は、空冷システムの搭載や吸気口への防塵フィルターを設置、各部のシーリング処理、関節部の強化などにより、後の陸戦用MSの基礎となった。

地球上での運用に適合した機器や処理は、様々な環境への対応能力に

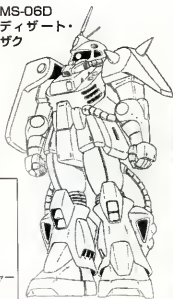
繋がり、ベースとなったF型の汎用性と多彩な兵装は、ザクⅡJ型を地上戦における主力としたのだった。

ザクⅡJ型は、U・C. 0078. 10の時点で80機が生産されたといわれ、地球侵攻



地上の各戦線で主力として運用されたザクⅡJ型を元にして、陸戦に特化した局地戦用MSの開発が進められた。

MS-06D  
ディザート・ザク



頂高：18.5m（全高：19.6m）  
 本体重量：44.7t（全備重量：69.5t）  
 ジェネレーター出力：1,440kW  
 スラスター推力：84,000kg  
 装甲材質：超硬スチール合金  
 兵装：ヒート・トマホーク/クラッカー・ポッド/  
 頭部バルカン砲×2/マシンガン/ロケット・ランチャー  
 ※一年戦争後にゲリラが運用したタイプ

後はF型からの換装やキャリフォルニア・ベースなどで生産ラインの整備が行われた。しかし、1G環境から来る低機動性や、砂漠地帯などの環境への適応性不足も指摘された。

そこでジオン公国軍は、ザクⅡJ型をベースとした砂漠・熱帯戦対応機MS・06Dザク・デザートタイプ（生産数は114機といわれる。戦後、同型式番号のデザート・ザクに改装された機体もあった）に代表される改造機を開発する一方、キャリフォルニア・ベースにおいて新設計の陸戦用MSの開発を進めたのである。

## MS・07 グフの開発とその構造

ザクⅡJ型を基として、より高度な陸戦運用能力と対MS格闘能力を持つ局地戦用MSとして開発された機体が、「MS・07 グフ」である。本機の開発はザク・シリーズと同じく、ZEONIC社が担当した。

キャリフォルニア・ベースで開発されたとも、地球侵攻作戦以前から宇宙で開発されていたともいわれるグフは、陸戦専用の設計が施された最初のMSだった。

グフ・シリーズは、ザクⅡJ型以上の陸戦運用能力と、地球連邦軍のMS投入を前提とした対MS格闘能力の充実を設計コンセプトとしていた。また、MSを乗せて飛行できる要撃爆撃機ド・ダイスとの連携を前提として開発されたともいわれ、グフの頭部マルチ・ブレイ

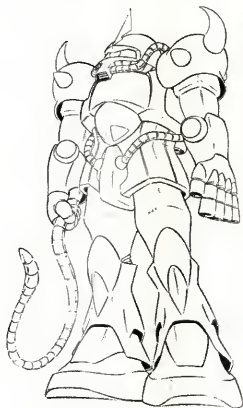
ド・アンテナは、ド・ダイYSとの通信を考慮したものとされる。

60%以上のパーツが新設計であったが、一部にザクⅡJ型（ザク・デザートタイプともいわれる）の部品を流用しているグフの開発は比較的短期間で行われた。

試作型のYMS・07Aプロトタイプ・グフの時点では、量産仕様機以上にザクⅡの面影を残していたが、YMS・08A高機動型試験機との計画統合により完成度を高めていった。

こうして完成した機体が、試作3号機をベースとしたMS・07Bグフ（グフB型）である。

頭頂高：18.2m  
 本体重量：58.5t  
 ジェネレーター出力：1,034kW  
 スラスター推力：40,700kg  
 装甲材質：超硬スチール合金  
 兵装：ヒート・ロッド／専用シールド／  
 5連装フィンガー・バルカン砲／ヒート剣／  
 ザク・マシンガン／ジャイアント・バズ



MS-07 グフ

グフのスタンダード・モデルであるB型は、対MS格闘戦能力を特に強化した仕様で、右前腕には格闘兵装の電磁鞭ヒート・ロッドを、左前腕には牽制用の5連装75mm機関砲（5連装フィンガー・バルカン砲）を内装していた。左前腕の機関砲は、指部分を砲身としての性のためミニピューレーターとしての性能が著しく制限され、兵装の内装





ホワイトベース隊を強襲したランバ・ラルのグフは、荒地で軽快な機動性を発揮してガンダムを圧倒したという。



ガンダムのビーム・サーベルにコクピット周辺の装甲を切断されたランバ・ラルのグフ。装甲の構造が見えてとれる。

化自体がMSの特徴である汎用性を低下させることになった。だが、格闘戦専用機ともいえるグフでは、これらの装備は容認されていたのである。

また、ザクⅡC型で対MS格闘戦用装備として採用された右肩シールドは、左前腕部への外装式となり、より格闘戦に適した装備形態となった。なお、右肩シールドの廃止に伴い、大型スパイク装備のスパイク・アーマーが両肩に配置されている。この大型スパイクは、敵への示威効果だけでなく、敵MSの懐に潜り込み下から突き上げるようなタックル攻撃を想定したものだった。

このような攻撃が可能なことからも分かるように、グフの機動・運動性、特に短距離ダッシュ能力はザクⅡJ型を凌駕していた。

グフは、YMS-08系の設計を採り入れたランドセルと、強化された二足歩行システムによって高い機動性を発揮した。

脚部は陸戦を徹底的に追求したもので、ジャンプ補助兼格闘戦用のサブ・スラスターが内装されている。また、ザクⅡでは外装された動力パイプを内装化することで、被弾や障害物との接触による損傷の可能性も低くなった。

つまり、機動性そのものを向上させるだけでなく、突発的な事態

に伴う機動性低下も起こり難くしていたのである。

グフでは機動性だけでなく、耐弾性の向上も図られている。

ザクⅡF型で採用された複合装甲を設計段階から盛り込んだほか、コクピット周辺の装甲も重点的に強化された。

このような重装甲と前述のシールドにより、グフはザクⅡJ型よりも高い耐弾性と生存性を獲得したのである。

## グフ用兵装の開発

格闘戦用MSであるグフの兵装は、至近距離から近距離での戦闘を意識したもので、専用兵装のほとんどは内装されている。

右前腕部に内蔵されたヒート・ロッドは、接触させた敵機に高電圧をかけることで電装系を破壊、またはパイロットにダメージを与える格闘兵装である。

打撃武器としての性能も併せ持っており、MSの装甲も破壊できるほか、不規則な軌道を描くために回避が困難という特性もあった。

左前腕部の5連装75mm機関砲は、格闘戦に持ち込むための牽制用で、比較



シールド

ヒート・ソード  
(TYPE-βⅣ)



的軽装甲な目標への攻撃にも用いられた。砲弾は前腕部に内装されている。本兵装はザク・マシンガンと比べて射程や単発での火力に劣るが、砲身数と連射性能による牽制・制圧効果が高く、集弾効果によってスベック以上の火力を発揮できた。

ヒート・サーベル (Type・β IV) は、ヒート・ホーク以上の破壊力を持つ MS 用刀剣である。

これは赤熱式の大型刀身を持つ格闘兵装で、ヒート・ホークでは決定的なダメージを与え難いルナ・チタニウム合金製の装甲すら切断するほどの威力を有していた。

刀身はセラミック系赤熱体を持つものと、高分子化合物によって瞬時に形成されるもの (外見上はビーム・サーベルに見える) の2種類があった。

シールドはマウントを介して前腕部に接続するか、マニピュレーター対応ハンドルを用いるかを選択できた。

前腕部に搭載されるため防御面を自由に変更できるうえ、不要になった際には投棄することもできるなど、ザクⅡの肩シールドより運用柔軟性に秀でていた。



ヒート・ロッドを振るうグフ (右) と、120mm ザク・マシンガンを携行したマ・クベ麾下のグフ部隊 (左)。固定式兵装による格闘戦能力の強化と、携行式兵装による汎用性の補填が考慮されていた。

MS以前の兵器

MSの誕生

MSの実戦運用

局地戦用MSの  
開発次期主力MSの  
開発ニュータイプ  
専用機の開発

MAの開発

なお、汎用性が低いといわれることもあるグフだが、右手部は通常の仕様であるため、ザクⅡ用などの手持ち式兵装を流用することもできた。

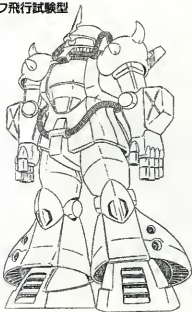
## グフのバリエーション

YMS・07Aプロトタイプ・グフは当初3機が製作された。その内、試作1号機および2号機の腕部は内蔵兵装を持たないタイプで、ヒート・ロッドと5連装75mm機関砲が内装されたのは試作3号機でのことだった。

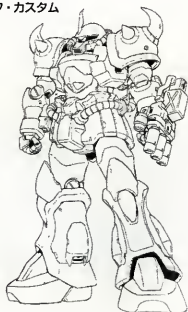
この試作3号機は、YMS・07Bという型式番号を与えられ、ランバ・ラル大尉の乗機となった。試作3号機と同等の仕様で生産されたのがMS・07BグフB型で、大半のグフがこのタイプであった（B型の中には、マ・クベ少佐用に装飾を施した機体もあったといわれる）。

しかし、当初は内蔵兵装の生産が間に合わず、

MS-07H  
グフ飛行試験型



MS-07B-3  
グフ・カスタム



通常のマニピュレーターを搭載したMS・07AグフA型が32機ロールアウトすることになった。

B型の発展改良機として開発されたMS・07B・3グフ・カスタムも、両手部を通常マニピュレーターとしているが、これはA型の影響ではなく、汎用性の低下を避けるために火器を外装化したタイプである。

一方、逆に両腕を連装機関砲としたモデルも開発された。火力と装甲の増強を図ったMS・07C・3グフ重装型や、MS・07Hグフ飛行試験型がそれにあたる。

ただし、後者は火力向上型ではなく、MS単独での飛行能力獲得を目指したタイプで、開発が難航したうえに空中爆発事故を起こして計画自体が中止されたといわれている。

だが、グフ・カスタムをベースとしたと考えられるMS・07H・8グフ・フライトタイプで、初の単独飛行型MSとして完成した。

特殊な機体が多いグフ・シリーズの中でもMS・07C・5グフ試作実験機は、グフとMS・09ドムの特徴を併せ持ったMSであった。

これはグフのライセンス生産を行っていたZIMMAD社が、ドム開発のデータ収集用として試作したと機体とされ、グフとドムを繋ぐ過渡期的MSといわれる。

MS-07H-8  
グフ・フライトタイプ



## MS・09 ドムの開発と構造

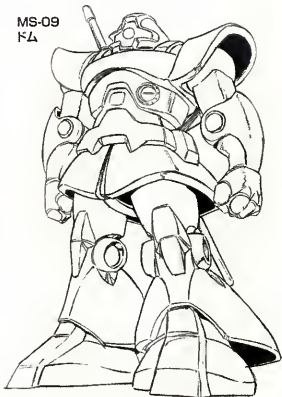
ZIMMAD社が開発した、ホバー走行式の重MSがMS・09 ドムである。

地球上におけるMSの最大の欠点は、二足歩行システムから来る戦術／戦略機動性の低さと行動半径の狭さだった。これは、長距離移動能力の不足ともいえる。

戦闘レベルにおけるMSの二足歩行システムは、装軌車両や装輪車両を上回る機敏さと運動性を発揮した。しかし、関節部への負荷や重力下運用特有のパイロットへの負担もあって、長距離移動を中心とした戦術／戦略機動性には問題があった。

この解決策としてZIMMAD社が提案したものが、ホバー走行能力を持つMSだった。これならば二足歩行より機動性が高くなり、走行時の安定性にも優れると考えられた。

MS-09  
ドム



頭頂高：18.6m  
本体重量：62.6t  
ジェネレーター出力：1,269kW  
スラスター推力：58,200kg  
装甲材質：超硬スチール合金  
兵装：360mm ジャイアント・バズ/  
胸部拡散ビーム砲／ヒート・サーベルほか



ホバー走行能力によって従来のMSを凌駕する走破性を獲得したドムは、陸戦用MSとして高い評価を受けた。

一説にはU・C・0078に開始されたとされるホバー走行式MSの開発は、一年戦争開戦後にはキャリフォルニア・ベースで進められた。

グフ試作実験機でデータを得たともいわれるZIMMAD社は、U・C・0079、06、ホバー走行式MSの基本設計を終了したとされている。

これが、後にドムとして完成するMSであった。

こうして試作されたYMS・09プロトタイプ・ドムを経て、各部を効率化した量産仕様のドムが完成した。

ドム最大の特徴は、全備重量80tを超える本体にホバー走行能力を与える熱核ハイブリッド・エンジン、つまり熱核ロケットと熱核ジェット of 複合型エンジンである。

この熱核ハイブリッド・エンジンは、かつてEMS・04ツダに搭載されていた「木星エンジン」を改良した「木星エンジン」であった（「土星エンジン」は本来熱核ロケット・エンジンであるため、大気圏内用の改造型が搭載されたと思われる）。

ノズルは、背部および腰部のスカート内、ベルボトム型の脛部内に推進用を、足底部にホバー用が配置されていた。ド

MS以前の兵器

MSの誕生

MSの実践運用

局地戦用MSの  
開発次期主力MSの  
開発ニュータイプ  
専用機の開発

MAの開発

ムホバーは、密閉された足底に熱核ジェットで空気を溜め、その圧力で機体を浮揚させるものである。

これによる走行速度は時速381km、連続ホバー時間は5時間に達し、時速65kmというザクⅡJ型の歩行速度（最速の説でも時速162km）を大きく引き離していた。

また、空気抵抗を減らすため動力パイプを徹底して内装化し、シールドも装備しないが、全身に施された重装甲によって極めて高い防御力を発揮した。

兵装は、ザク・バズーカをも上回る360mmジャイアント・バズが採用されたほか、長刀身のヒート・サーベルが標準装備されており、攻撃力の面でもザクⅡやグフを上回るMSとなっていた。

## ドム用兵装の開発

ホバー走行システムを採用したドムは直線的な移動速度に優れ、一撃離脱戦法に適していた。そのため、武装も一撃の破壊力が高いモデルが採用されることとなり、メイン・ウェポンにはジャイアント・バズ（ハニーウォール&ライセオン社のH&L・GB03K/360mm）が選ばれた。



胸部拡散ビーム砲は威力が低く、攻撃用兵装としては期待できなかったため、視覚的な幻惑効果を与える装備として用いられた。



これはザク・バズーカより大型の360mm弾を発射するもので、実体弾式のMS用火器としては当時最大級の破壊力を有していた。

格闘兵装としては、タイプ7と呼ばれるヒート・サーベルが搭載された。これは長大な棒状の刀身を持つモデルで、刺突は当然のこと斬撃でも大きな威力を発揮した。

また、ドムの左胸部には拡散ビーム砲が内装されている。

しかし、MS用ビーム兵器の未成熟や出力不足により火器としてはほとんど機能せず、主に「めくらまし」として用いられた。

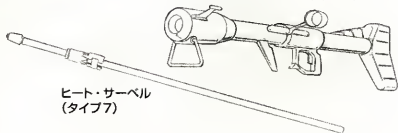
これ以外にもザクⅡ用の兵装を使用可能だったが、一説ではマニピュレーターがサイズが異なったため、装備する際には変換グリップへの換装が必要だったといわれる。

## ドムのバリエーション

ドムは完成度が高く改良の余地が少なかったため、ザクⅡやゲフのような多様なバリエーションは存在しない。しかし、局地戦に特化した派生機が開発されている。

これは試作型のプロトタイプ・ドムも同じことで、砂漠・熱帯用のYMS・09D ドム・ト

H&L-GB03K / 360mm ジャイアント・バズ



ヒート・サーベル  
(タイプ7)

ロピカルテストタイプが試作された。

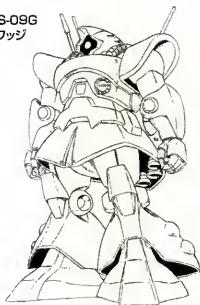
量産仕様のドムの派生機として有名な機体が、MS・09F/TROP ドム・トローパーとMS・09G ドワッジである。

この2機種は共に砂漠戦仕様で、前者は熱核ホバーの吸気口に開閉式カバーなどを設け、後者はホバー稼働時間延長や冷却機能強化が施されていた。

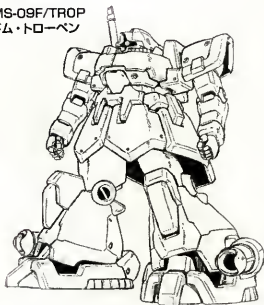
ドワッジの派生機として、ビーム・カノンを装備したMS・09H ドワッジ改が確認されているが、これは一年戦争後にジオン公国軍残党が改修したカスタム機である。

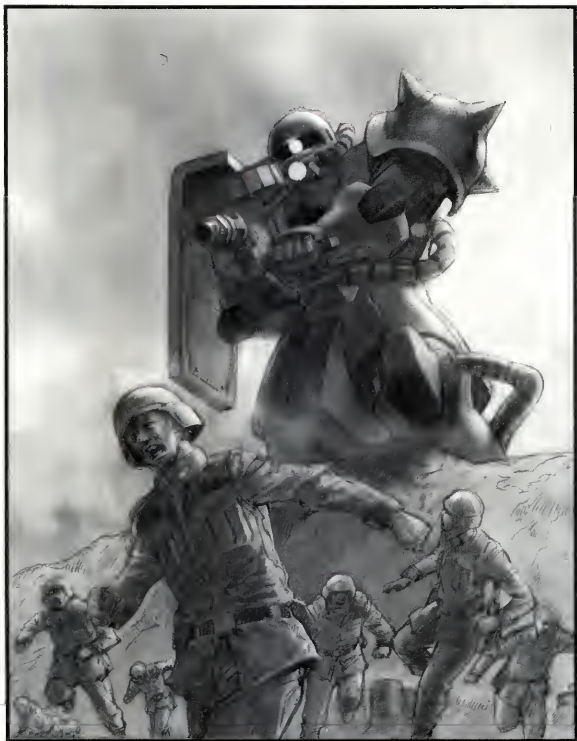
一方、地上用装備を廃して熱核ロケット・エンジンなどを搭載したMS・09R リック・ドムのように、宇宙用に派生したバリエーションもあり、一年戦争後期には宇宙戦力の主力となった。また、その改修機として、第2期生産型のMS・09R・2 リック・ドムⅡ（ツヴァイ）が生産されている。

MS-09G  
ドワッジ



MS-09F/TROP  
ドム・トローパー





## 局地戦用MSの開発Ⅱ——水陸両用MS

局地戦用MSの開発は、格闘用のグフやホバー走行式のドムに代表される陸戦用MSだけでなく、水陸両用MSを生み出した。



MS-06M 水中用ザク

地球表面の七割が水圏で占められている以上、上陸作戦や海洋上の拠点制圧、通商破壊、そして海上補給線分断などは、対地球連邦戦争において不可欠なものであった。

しかし、海洋での軍事行動は地球連邦軍に一日の長があったため、ジオン公国軍が勝利するには相当な奇策を必要とした。

そこでジオン公国軍は、水陸両用MSの開発を推進したのだった。

砂漠や寒冷地帯などの環境データがなく開発が難航した陸戦用MSと異なり、ジオン公国には海洋スペース・コロニーが存在したため、実地に近い環境を確保できた。

そして汎用MSの開発が進展すると、ザクⅡをベースにMS-06M (MSM-01) 水中用ザクを開発した。しかし、この機体は水密性に劣り、ザクⅡを基にした形状ゆえに水中での抵抗が極めて大きく、水中での機動性は低かった。

このため、水中用ザクはデータ収集機として用いられることになり（地球侵攻作戦時に地球に送られ、各種実験だけでなく実戦にも投入されたといわれる）、本機で得られた

データを元に新規設計の水陸両用MSが開発されたのである。

## MSM・03 ゴッグの開発と構造

MSMシリーズと呼ばれる水陸両用MSの開発は当初、ZIMMAD社で行われた。そこで提示された機体が、MSM・02 水中実験機とMSM・03 ゴッグである。

この2機種は流線型のシルエットを採り入れ、ZIMMAD社が得意とするエンジン技術を投入した熱核水流ジェット・エンジンと水冷式の大出力熱核反応炉を搭載していた。

つまり、ザクⅡの水中戦用派生機に過ぎない水中用ザクと異なり、水中環境への適応を優先し、水を推進器や主機に利用した真の意味での水陸両用MSだったのである。

この結果、水中実験機とゴッグはともに水中用ザクを超える性能を獲得したが、それでも前者の性能は低いと判断され、相対的に高性能なゴッグ

MSM-03 ゴッグ



頭頂高：18.3m  
本体重量：82.4t（全備重量：159.4t）  
ジェネレーター出力：1,740kW  
スラスター推力：121,000kg  
装甲材質：チタン・セラミック複合材  
兵装：腹部メガ粒子砲×2/  
腹部魚雷発射管×2／フリージーヤード

が採用されることになった。

MSM・03・1プロトタイプ・ゴッグを経て開発されたゴッグは、ドムを超える重装甲を持つ水陸両用MSで、熱核水流ジェット・エンジンと水冷式の高出力熱核反応炉を持ち、腹部には2門のメガ粒子砲を内装していた。

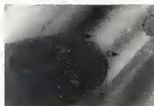
高出力熱核反応炉によって初めてMSでも使用可能となったメガ粒子砲は、ドムの拡散ビーム砲とは異なり、実用的な威力を持つものだった。

このメガ粒子砲がビーム・ライフルのような外装式でないのは、水中での抵抗増大を嫌ったためであるが、それ以外にもゴッグの水の抵抗への配慮は徹底していた。

流線型の機体形状に加え、「フレキシブル・ベロウズ・リム」と呼ばれる多段階関節構造の腕部（腕全体が鞭のように柔軟に曲がる）と大腿部を胴体内に収納することで、水中抵抗を極限まで低下させていた。

更に、アイアン・ネイルが装着されたマニピュレーターが格闘兵装を兼ねるため、携行式格闘兵装も装備していなかったのである。

そうした設計と熱核水流ジェット・エンジンの性能により、ゴッグは70〜75ノット（時速130〜140kmに相当）もの水中最高速度を実現していた。水中用ザクの水中最高速



航行中のゴッグ（上）と、フリージャーダを放出して機雷を無力化する様子（下）。潜行中の機能は充実していた。

度が45ノットであることを考えると、格段の進歩といえる。

水中での高速性を実現した滑らかで重厚なボディは耐弾性にも優れ、限界深度は200m前後に達するといわれる。

また、信号弾や照明弾などを発射する頭頂部のマルチプルランチャーからは、フリージャーードと呼ばれる水中用防衛兵器を展開可能であった。これは高分子化合物のゲル状シールドで、ソナーによる探知を無効化するほか、機雷の起爆を阻止することもできた。なお一年戦争末期には、ゴッグの全面改装型であるMSM-03C ハイゴッグが生産されている。

## ゴッグ用兵装の開発

ゴッグの兵装は、水中での抵抗を減少させるため、すべて内装式とされた。

メイン・ウェポンである腹部メガ粒子砲2門は、前期型ゴッグではキア社のキアM-23というモデルであった。

ゴッグ用のものは収束機構を持たないため、メガ粒子砲としては性能が低いとされている。そのスペックは射程1km、威力はザク・マシンガンの2倍程度かMS用バズーカと同



ゴッグはメガ粒子砲の搭載に成功した最初期のMSであり、性能が低いとはいえ実用に足る威力を示している。

等といわれるが、当時としては充分実用的な数字だった。またビームの拡散も内装型で射界が狭いことを考えれば、有用だといえる。

メガ粒子砲と並列装備されている兵装が、2基の魚雷発射管である。水中における主兵装で、水上艦や潜水艦に対して有効だった。

格闘攻撃には、マニピュレーターのアイアン・ネイルが用いられる。

その威力はゴッグ自身のパワーと相まって、ルナ・チタニウム合金製の装甲に穴をうがつほどであった。装甲も強固で、手部がシールド代わりに使われることもあった。

## MSM・07ズゴックの開発と構造

ゴッグの競合機で開発が遅延していたために実戦への投入が遅れた水陸両用MSが、MIP社製のMSM・07ズゴックである。

ズゴックは設計の見直しが行われた結果、ロールアウトが遅れたともいわれるが、ゴッグで得られたデータを反映したこともあり、あらゆる面でゴッグを超える性能を獲得していた。



ベルファストの戦闘では、ガンダム・ハンマーをアイアン・ネイルで受け止め、水中戦でガンダムを圧倒した。



ズゴックは機体各部を独立したブロックで構成する「バルクヘッド」と呼ばれる機体構造を採用している。

これにより整備性だけでなく、ダメージ・コントロール能力も向上しており、損傷時の浸水を最小限に抑えることができた。

胴体と一体化した頭部も、ズゴックの特徴的な構造といえる。これにより水中抵抗が減少し、周辺部の装甲強度も大幅に向上した。また、これに伴い頭部自体の可動域がゼロになってしまったため、モノアイの走査レールは全周囲に拡大されている。このような構造は、これらのメリットを狙ったものではなく、頭部に6連装ミサイル砲を搭載したことによる副次効果といえるものだった。

この6連装ミサイル砲や腕部メガ粒子砲に見られるように、ズゴックの武装はゴッグ同様に徹底した内装化が図られている。

中でもマニピュレーター兼用のアイアン・ネイルは、クローと五本指マニピュレーターの折衷型だったゴッグのそれと異なり、格闘戦を強く意識した3連クローとなっており、

MSM-07  
ズゴッグ



頭頂高：18.4m  
本体重量：65.1t  
ジェネレーター出力：2,480kW  
スラスター推力：83,000kg  
装甲材質：チタン・セラミック複合材  
兵装：頭部6連装ミサイル/  
腕部メガ粒子砲×2 / アイアン・ネイル

マニピュレーターとしての機能を最小限度としたものであった。

フレキブル・ベロウズ・リムもゴックと同様の構造だが、ズゴックでは胴体と四肢先端部を連結する上腕と大腿部にのみ採用されている。

熱核反応炉／ジェネレーターは水冷と空冷のハイブリット式に、推進器も熱核水流ジェット・エンジンと熱核ジェット・エンジン

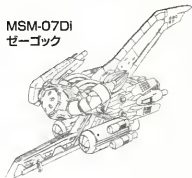
の複合型となっているが、これは陸戦をも強く意識した設計によるものである。この結果、ズゴックはザクⅡJ型と同等か、それ以上といわれるほどの陸戦能力を獲得した。

また、高出力化と軽量化により、水中での最高速度は103ノットに達しており、その総合性能は水陸両用MS最強といっても過言ではなかった。

ズゴックの派生機として、陸戦能力を更に強化したMSM・07ズゴックS型、操縦性と生産性を改善したMSM・07EズゴックE（エクスペリメント）が開発された。

また、大気圏再突入型攻撃機構モビルダイバーシステムのダイブマニューバー・ユニットMSM・07Diゼーゴックとしても流用されており、バルクヘッド構造による発展性と水陸両用MSならではのパワーを証明した。

MSM-07Di  
ゼーゴック



ズゴックの優れた陸戦能力は、ジャブロー戦におけるシャア・アズナブル機（S型）とガンダムの交戦でも証明されている。

## ズゴック用兵装の開発

最も完成度が高い水陸両用MSといわれるズゴックの兵装は、内装化の徹底に加えて攻撃力や運用性も改善されている。

前腕部のメガ粒子砲は、射程は20km、出力は数倍に達していた。また前腕部に装備しているため、射角が広く即応性にも優れるという副次効果も生んだ。



メガ粒子砲



海面から飛び出し腕部メガ粒子砲を撃つズゴック。この兵装はゴッグに装備されたものよりはるかに完成度が高かった。



アイアン・ネイルは接合技術に優れたパイロットであればMSを一撃で行動不能にするほどの威力を秘めていた。

頭部の6連装ミサイル砲は、240mmミサイルを装填し、6門を同時発射した際の火力は極めて高い。装弾数は各砲5発、計30発に達しているうえ、地上での使用は当然のこと、与圧機能によって水中でも発射可能であった。

格闘兵装兼簡易マニピュレーターとして、前腕部に3つのクローで構成されたアイアン・ネイルを装備する。単体ではヒート・ホークやビーム・サーベルのような威力を持たないが、ズゴックの出力やスピードによって、MSの前面装甲すら貫通可能であった。



頭部6連装ミサイル砲は対空兵装などに用いられたほか、陸上の目標に対して水平発射されるケースもある。

MS以前の兵器

MSの誕生

MSの実践運用

局地戦用MSの  
開発次期主力MSの  
開発ニュータイプ  
専用機の開発

MAの開発

## MSM・04 アッガイの開発と構造

ゴッグとズゴックのコスト高騰を受け（ズゴックは、開発中に高コスト化が判明していた）、簡易生産型の水陸両用MSとして開発された機体がMSM・04 アッガイである。開発はZ E O N I C社が担当した。

アッガイは生産性を高めるため、既存のMSのパーツを流用しているのが特徴だった。外見からは流用されたパーツは分かりにくいのが、胴体部の基本フレームや熱核反応炉／ジェネレーターはザクⅡJ型のを、航行用部材やアイアン・ネイルはゴッグのものが使用されたといわれる。

この結果、アッガイの開発は順調に進み、先行して開発されていたズゴックよりも先にロールアウトした。

アッガイはザクⅡJ型用の熱核反応炉を2基搭載していた。水中航行時には1基で十分であったが、陸戦時に大パワーが必要されたことが2基搭載された理由である。そして、熱核反応炉1基のみで可能である航行は、思わぬ副次効果を生んだ。排熱量が大幅に軽減された結果、熱センサーに感知されにくくなったのである。

水陸両用MSは高出力熱核反応炉を搭載するため、どうしても排熱量が大きく、熱センサーに探知されやすかったが、アッガイの排熱量は水陸両用MSとは考えられないほど小



シャア・アズナブルのズゴックとともにジャブロー基地に潜入するアッガイ。隠密性の高さを生かした運用がなされた。

さかった。

この低排熱量に注目した軍部は、機体全体に電波吸着剤を塗布し、機体色も湿地帯での迷彩効果に優れるダークブラウン系とするなど、ステルス性を高めさせた。こうして高度なステルス性能を獲得したアッガイは、偵察や破壊工作などに用いられたのである。

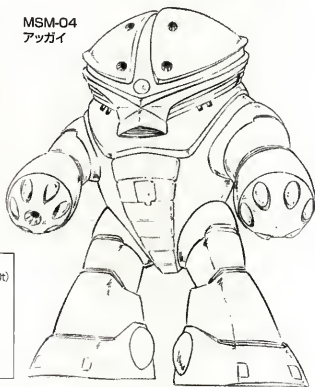
複座式であったため（水陸両用MSの訓練用だったといわれる）、特殊部

隊での運用に適していた点もアッガイの利用価値を高めていた。

水中最大速度は53ノットに過ぎなかったが、速度向上は排熱量増加の原因となるため、機体特性上容認されていたようである。

また、湿地帯を中心とした陸戦能力にも秀でていたことから、ジャブロー攻略を前提とした砲戦用MSの

MSM-04  
アッガイ



全高：19.2m  
 本体重量：91.6t（全備重量：129.0t）  
 ジェネレーター出力：1,870kW  
 スラスター推力：109,600kg  
 装甲材質：超硬スチール合金  
 兵装：頭部バールカン×4/  
 腕部6連装ミサイル・ランチャー/  
 メガ粒子砲/アイアン・ネイル

MSM・04G ジュアッグや、白兵戦用のMSM・04N アッグガイなどの派生機も試作された。

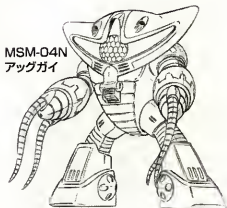
## アッグガイ用兵装の開発

胴体部分はザクⅡJ型からの流用部品が多いためか、アッグガイの兵装は両前腕や頭部などの末端部分に集中している。

各前腕は武装ポッドとしての性格が強く、左右で搭載兵装が異なっている。

右前腕はズゴックのそれに近い構造で、中央部にメガ粒子砲（機関砲ともいわれる）が、その周囲には同心円状にアイアン・ネイルが搭載されている。

アッグガイのアイアン・ネイルが特殊な点は、ゴッグから流用したといわれるクローを6本搭載していること、そのクローが収納式になっていること、そして上腕部内装のフレキシブル・ペロウズ・リムにより腕自体を伸長できることである。フレキシブル・ペロウズ・リムを用いた腕部伸長は、15m以上に達するといわれており、アイアン・ネイルと組み合わせることによって優れた格闘戦能力を発揮した。



MSM-04N  
アッグガイ

## MSM・10 ズックの開発と構造、兵装

MSM・10 ズックはほかの水陸両用MS同様、キャリフォルニア・ベースで開発された機体で、3機が試作された。

ズックは、ホバー走行式自走メガ粒子砲とでもいうべき水陸両用MSだが、その形状はあまりに特異であった。極端に大きい上半身や、ほとんど歩行能力がない脚部に加え、前後の形状がまったくといっていいほど同じなのである。

前後形状の同一性は兵装面でも徹底しており、ズックに搭載されたメガ粒子砲9門（頭

が、これは105mmもの口径で、一斉射撃を行った際の威力は侮れないものがあつた。



ジャブロー基地に潜入したアッガイの中には、両腕部に6連装ミサイル・ランチャーを装備した機体もあった。



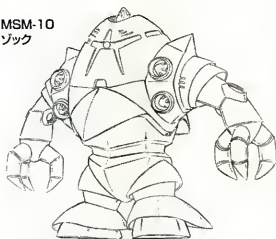
極東戦線で陸戦型ガンダムと交戦するアッガイ。この機体は左腕部がアイアン・ネイルになっている。

左前腕には6連装ミサイル・ランチャーを内装し、アイアン・ネイルは搭載しない。

ただし、両腕をミサイル・ランチャーにした機体や、左腕をアイアン・ネイルにしたタイプも確認されており、腕部自体は自由に交換できたようである。

他にも頭部にバルカン砲4門を搭載する

# MSM-10 ゾック



全高：23.9m  
 本体重量：167.6t  
 ジェネレーター出力：3,849kW  
 スラスター推力：253,000kg  
 装甲材質：チタン・セラミック複合材  
 兵装：フォノンメーザー砲／肩部メガ粒子砲×8

部のものはフォノンメーザー砲ともいわれる)のうち8門は、前後に4門ずつ配置された。

これは火力を追求した結果、大型化したボディの運動性が極めて低く、旋回性能にも問題があったためである。

脚部スラスターによるジャンプ

(ジャンプ力はザクの数倍とされる)と、熱核ジェット・エンジンがもたらすホバー走行能力によって相応の移動能力を持つゾックだが、小回りが効かなかった。それならば方向転換は諦めて、全周囲に攻撃すればいいという発想である。

メガ粒子砲以外にも、腕部にアイアン・ネイルを固定装備するが、このような機体特性では格闘戦は不可能だったと推測される。

それでも、熱核水流ジェット・エンジンの推進力や「クチバシ」と呼ばれる可動式フェアリングシエルの整



MSとしては欠点の多いゾックだったが、複数のメガ粒子砲による大火力は高く評価されている。



MS以前の兵器

MSの誕生

MSの実戦運用

局地戦用MSの開発

次期主力MSの開発

ニュータイプ専用機の開発

MAの開発



流効果によって、63ノットもの水中最高速度を有し、水中での機動性は決して低くなかった。

また、金属探知機などのセンサー類は高性能なうえ、当時のMSとしては最大級の火力を持っており、支援用としては高性能なMSだったといえる。

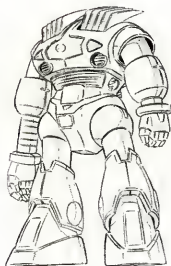
## 特殊な水陸両用MS

ゾックやアッグガイ以外にも、特殊な水陸両用MSは散見される。

そのひとつが、ズゴックの姉妹機として開発されたMSM-08 ゾゴックである。

水陸両用MSでありながらメガ粒子砲やミサイル類を装備しないという時点で、充分に特殊な機体だが、その特殊性は兵装に顕著に現れている。

ゾゴックが頭部や腹部に搭載するワイドカッターは、その形状からブーメラン・ミサイルとも呼ばれるが、実際には化学エネルギー兵器（炸薬で爆発する兵器）ではないとされる。弧を描いて戻ってくる、本物の巨大ブーメランといわれており、実用性が甚だ低いものであろうことは想像に難くない。



MSM-08 ゾゴック

MS以前の兵器

MSの誕生

MSの実践運用

局地戦用MSの  
開発

次期主力MSの  
開発

ニュータイプ  
専用機の開発

MAの開発



これらの特殊な水陸両用MSは生産数が少なく、戦後は好事家のコレクションの対象にもなった。

腕部はアッガイなどで見られる伸縮式となっており、格闘能力の高さを窺わせるものの、肝心の手部はアイアン・ネイルではなく五本指マニピュレーターであった。腕部の伸縮機構はアーム・パンチとも呼ばれ、装甲貫徹能力があるとされる。だが、アイアン・ネイル以上の効果があるか否か疑問視されており、マニピュレーターとしても格闘用としても中途半端な印象は拭えない。

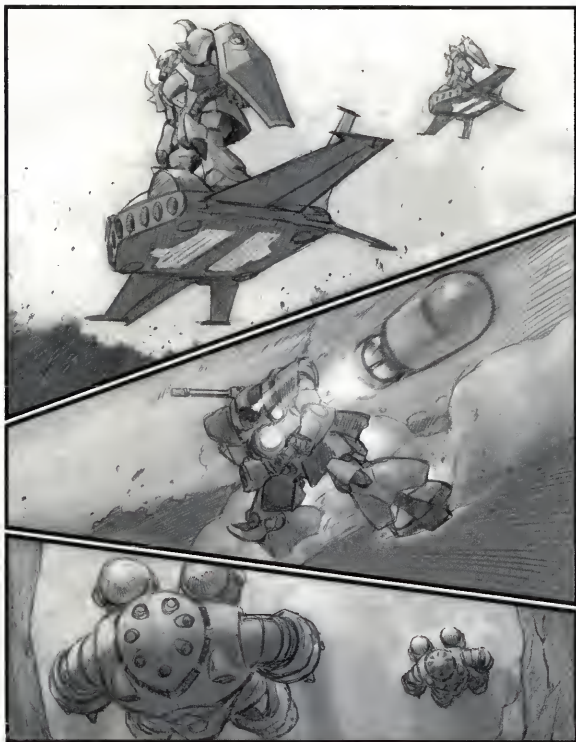
このゾゴック以上に奇想天外なMSが、E.M.S. 05 アッグである。

ジャブロー侵攻用に開発されたアッグは、ジャブローへの侵入路を確保するために開発されたMSだが、その方法が想像を絶する。

腕部の大型ドリルと口吻部のレーザー・トーチで、ジャブローの岩盤を掘り進むつもりだったのである。

アッグ自体の形状も特異で、頭部と完全に一体化した胴体に、一対の大型ドリルを持ち、脚に至っては足首に相当する部分しか存在しない。当然歩行能力はなく、移動はホバークラフトによって行われる。水陸両用ともいわれるが水中航行能力はなく、ホバーによる水上移動を志向していたとされる。

これら兵器は、国力に劣るジオン公国の窮余の策であったが、実際には自慢の科学力を空回りさせただけで、貴重なリソースを浪費してしまったケースと考えられている。



## サブ・フライト・システムの嚆矢となった 要撃爆撃機ド・ダイYS

地球上におけるMSの問題点だった、戦術／戦略機動性の低さや行動半径の狭さは、ドムのホバー走行システムやMS運搬用装輪トレーラーであるサムソンによって一応の解決を見た。

これ以外にも、MSの機動性および行動半径の拡大を目指したシステムが存在した。

それが、要撃爆撃機ド・ダイYSである。

ド・ダイYSは、機体上部にMS積載スペースを設けた航空機であり、MS1機を露天状態で搭載したまま飛行可能だった。初期設計ではMS搭載能力は持たなかったが、大推進力の熱核ジェット・エンジンが注目された結果、MS積載スペースの設置や機体構造の強化が行われ、MS搭乗用航空機Ⅱサブ・フライト・システムとして運用されることになった。

ド・ダイYSは、MSの行動半径と展開速度を大幅にアップさせたほか、限定的ながらMSに空戦能力を付与することに

ド・ダイYSの運用ではグフとの連携が代表的で、ホワイトベース隊との交戦において空中戦が発生したともいわれている。



なった。

MSと航空機を組み合わせるといふ発想は、MSの新たな運用形態であり、その画期性と発展性はホバー走行システム以上であった。

このような特性を持つド・ダイYSには地球連邦軍も注目し、一年戦争後には地球連邦軍でもサブ・フライト・システムが採用されることになる。ド・ダイYSの直系機にあたり、エウーゴやカラバが運用したド・ダイ改がその代表例である。

また、一年戦争以降はサブ・フライト・システムの運用は大気圏外にも及び、ゲターやシャクルズのような宇宙での航続距離延長を目的とした機種も開発された。

さらには、サブ・フライト・システムにメガ・ランチャー（MS用随伴式大出力メガ粒子砲）の機能を付与したメガ・ライダーも誕生している。

MSの欠点を補うために生み出されたシステムだったド・ダイYSを出発点として、サブ・フライト・システムはMS支援兵器としての機能を高めていったのである。



メガ・ライダー



ド・ダイ改



ド・ダイYS



ゲター



ド・ダイII

# 地球侵攻作戦の完遂を期待されながらも、 戦術レベルの活躍に終わった局地戦用MS

## 陸戦用MSの運用と実態

地球侵攻作戦の開始には間に合わなかった局地戦用MSは、キャリフォルニア・ベースを中心に開発が進められ、次第に配備が進んでいった。

最初期の完全新設計の陸戦MSであるグフは、U.C. 0079.03.18開始の第3次降下作戦に投入されたという説もある。しかし、この説が正しいとしても量産仕様機ではなく試作型のプロトタイプ・グフと考えるのが妥当である。

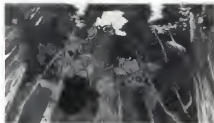
最も有名なグフの運用例が、宇宙攻撃軍司令ドズル・ザビ中將が、実弟ガルマ・ザビ大佐の仇討ちのために



ランバ・ラルは砂の中に潜んでホワイトベース隊のMSを奇襲するなど、グフの特性を活かして戦った。



マ・クベの麾下で運用されたグフの中には、ザクIIのヒート・ホークを装備した機体もあった。



ある程度の機体数が生産されたグフは、地上戦力の一翼を担い、ジャブロー降下作戦にも投入されている。



オデッサ戦で陸戦強襲型ガンタンクと交戦するドム。ヒート・サーベルによる格闘戦を仕掛けたが、撃破された。



黒い三連星のドムは、機動性を生かしたジェット・ストリーム・アタックでガンダムを翻弄した。



運用例が少ないグフ・カスタムだが、極東戦線で獅子奮迅の働きを見せたノリス・バックード機が有名である。

地球に派遣したランバ・ラル隊でのものである。

この際、YMS・07Bグフ先行量産型を任されたのが、ランバ・ラル隊々長ランバ・ラル大尉だった。

ラル大尉のグフは、一年戦争最強の呼び声も高いアムロ・レイのRX・78・2ガンダムと幾度か交戦し、互角の格闘戦を演じた。

これはラル大尉の技量と、対MS格闘戦に特化したグフの性能が最大限に発揮されたケースで、ガンダムに破れたものの、ヒート・ロッドと突出した格闘能力にガンダムに苦戦を強いた。

量産が開始されたグフB型は、北米やアジア方面、マ・クベ少佐（階級は当時）の地球資源探掘師団を中心に運用され、ド・ダイYSとの共同運用による空中戦や、ザクⅡ用兵装を装備しての基地防衛戦に活躍したといわれる。

ほかにも、U・C・0079・11・07に行われたオデッサ作戦や、11・30のジャブロー降下作戦にもグフが投入されている。

MS以前の兵器

MSの誕生

MSの実戦運用

局地戦用MSの開発

次期主力MSの開発

ニュータイプ専用機の開発

MAの開発



ジャブロー降下作戦（上）や極東戦線の鉱山基地攻防戦（下）など、ドムはさまざまな戦場で運用された。



黒い三連星が使用したことで知られるMS-09ドムだが、極東方面での運用も確認されている。ジオン公国軍のラサ秘密工場基地などにも複数機が配備されていた。

しかし、グフは格闘戦に特化した仕様であるため、高い操縦技術を持つパイロットにこそ適していたが、一般的なパイロットには扱い難かった。

また、汎用性が低いこと、単独での行動半径が狭いことも問題であった。

この欠点は、汎用性向上型のグフ・カスタムでも決定的な解決を見ておらず、オデッサ戦後、生産ラインは縮小されている。

その一方で、重力下におけるMSの問題点だった低機動性や行動半径の狭さを克服したドムは、ザクⅡJ型に続く陸戦用主力MSとして採用された。

一撃離脱戦法に適合したドムはグフと異なり、高度な技術を必要とせず、一般パイロットでも操縦が容易であった。



更に、ジャイアント・バズによる大火力、重装甲がもたらす優れた耐弾性、ホバー走行システムによる高い機動性によって、将兵から高い信頼を獲得していた。

オデッサ戦における「黒い三連星」のケースは、最初期かつ最も有名なドムの運用例として知られている。

ガンダムを擁するホワイトベース隊と交戦することになった「黒い三連星」のドムは、高い機動性と火力、そして連携攻撃「ジェット・ストリーム・アタック」を駆使して、ガンダムを撃破寸前まで追い込んだものの、全滅している。

オデッサ戦では「黒い三連星」以外にも2機のドムが配備され、ダブデ級陸戦艇の警護に当たっていたが、RTX-440 陸戦強襲型ガンタンクと交戦の末、撃破された。

こうして見るとオデッサ戦でのドムは、後方の重要地域に配置され、遊撃隊として運用されていたようである。

一般的なドムの配備は、アフリカや北米、西アジアなどを中心に行なわれ、ジャブロー降下作戦にも投入されている。

投入地域でのドムの活躍は目覚ましいものがあつたが、生産開始時期や生産数などの問題から、ドムの能力を活かした部隊は少なく、戦術レベルの勝利にこそ貢献したが、戦局に与えた影響は微々たるものだった。

## 水陸両用MSの運用と実態

ジオン公国軍は水中用ザクによるテストと並行して、キャリフォルニア・ベースで完全新設計の水陸両用MSの開発を進めた。

初の主力水陸両用MSとなったゴッグの実用化は早く、U.C.0079.05末には地中海とメキシコ湾で実戦配備がはじまったといわれている。

そして、7月にはマッド・アングラー隊やシーサーペンタ隊（水中用ザクの試験を実施した部隊）に代表される潜水艦隊に配備されていわれる。

7月は大西洋、インド洋、北極海にジオン公国軍の潜水艦隊が配備された時期といわれ、通商妨害や地球連邦海軍残存艦隊への攻撃が行っていた。

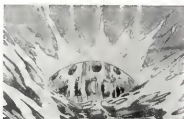
ゴッグ初の本格的実戦投入は、8月11～14日のミッドウェイ海戦という説が一般的だったが、5月末のポートモスレビー基地奪還作戦も有力視されている。いずれの説も、失地回復を目指した地球連邦海軍が攻勢をしかけた事例とされる。

本来なら海洋は地球連邦軍のホームグラウンドだったが、高い水中機動性を駆使して艦艇に直接攻撃を仕掛けるゴッグに、地球連邦海軍艦隊は壊滅的打撃を受けたのである。

この事例で判明したのは、宇宙艦艇がザクⅡの敵ではなかったように、海上艦と潜水艦も水陸両用MSには劣勢を強いられるということだった。



水陸両用MSの運用においては、ベルファスト基地を奇襲したゴッグのように、局所的な戦果を挙げた例が多い。



海面付近で戦闘を行うズゴック。潜水艦隊との連携で広い水圏をカバーし、ジオン公国軍の海洋戦略を支えた。



特殊部隊によって運用され、潜入工作を行うアッガイ。戦闘力よりもステルス性能が生かされる局面が多かった。

またアイアン・ネイルによる格闘攻撃が、船腹や隔壁を容易に貫通することも、艦艇の不利を決定的なものにしていた。

こうして鮮烈なデビューを飾ったゴッグだが、ジオン公国軍はその性能に不満を抱いていた。そして、より高性能なズゴックがロールアウトすると、主力の座を奪われたのである。ただし、ズゴックは操縦にクセがある機体だったため、ゴッグを好むパイロットも少なからず存在した。

火力、機動性、陸戦能力などあらゆる面でゴッグを上回るズゴックは、マッド・アングラー隊や南太平洋のグリーンサイレン隊、26潜水艦隊といった潜水艦隊に配備され、通商破壊や上陸作戦などに投入されたようである。

また一年戦争後期にはズゴックS型の配備が始まり、すべてのズゴックはS型へと切り替えられていった。

改修が続けられた水陸両用MSだが、11月10日の地中海上陸作戦などではジオン公国軍の潜水艦隊も地球連邦軍の反撃を受けており、

MS以前の兵器

MSの誕生

MSの実践運用

局地戦用MSの開発

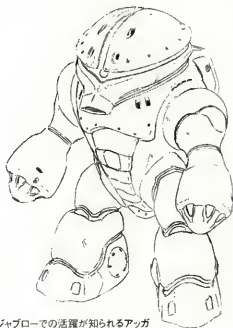
次期主力MSの開発

ニュータイプ専用機の開発

MAの開発

オデッサ作戦を契機に地球連邦軍に傾きはじめてミリタリー・バランスは、水陸両用MSを不利な状況へと追い込んでいった。

また、ゴッグとズゴックの操縦性の相違や、互換性の欠如も表面化しており、複数タイプの水陸両用MSの配備は、生産性や整備性の面で問題となった。



ジャブローでの活躍が知られるアグアイだが、極東方面にも配備されていた。奇襲によって陸戦型ガンダムを中破させるなどの戦果を挙げている。

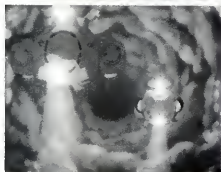


運用領域の広さで優位性を発揮した水陸両用MSだったが、陸上戦闘では地球連邦軍のMSに後れを取るケースも多く見られた。

そして、戦局の推移に伴い水陸両用MSに新たな問題が浮上する。

劣勢となったジオン公国軍が反撃に転じるためには、地球連邦軍の拠点を襲撃する必要があった。しかし、そのような拠点が地上や地下に存在する場合、水陸両用MSは専門外の陸戦を敵MS相手に行わなければならないのである。

水陸両用MSのパイロットの中にも陸



一年戦争後期にはハイゴックやズゴックEといった後継機種が投入されたものの、水陸両用MSの優位性を挽回するには至らなかった。

戦を得意とする者はおり、ズゴックS型のように高度な陸戦能力を持つ水陸両用MSもあったが、総合的に見ればジオン公国軍の劣勢は明らかだった。

この傾向が顕著となったのが、11月21日（19日ともいわれる）に発生したベルファスト基地での戦闘と、同月30日のジャブロー降下作戦である。

特にジャブロー降下作戦には、ズゴック、アッガイ、ゴッグ、ゾックなどの多様な水陸両用MSが投入されている。

だがこれらの戦闘では、地球連邦軍MSとの交戦の結果、いずれも全滅に近い被害を出している（水中戦でガンダムに撃破されたともいわれる）。

これは、ガンダムをはじめとするホワイトベース隊のMS部隊が参加していたことが一

因と考えられるが、MSが配備された敵施設に対して水陸両用MSによる上陸作戦を敢行しても、優位性を発揮できないことの証明でもあった。

こうして「海の王者」として君臨した水陸両用MSは、戦略環境の変化により、絶対的な優位性を喪失したのである。





# 消えた砲戦用機動兵器モビルタンクと 砲撃戦／支援用MSの登場

地球侵攻作戦用の局地戦用MSの開発はU・C・0076・12にスタートした、しかし、それ以前にも陸戦用機動兵器の開発は進められていた。

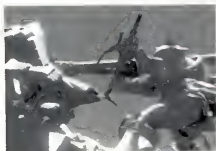
そうした兵器のひとつが、モビルタンクに分類されるYMT・05 ヒルドルフである。

U・C・0072

に開発が開始されたヒルドルフは、ビッグ・

トレー級陸戦艇や地上要塞に代表される戦術目標用への攻撃を前提とした超弩級戦車で、全長35m以上、全備重量220tの巨体に熱核反応炉と30センチ砲を搭載していた。

突出した火力や射程、パワーや機動性を有していたが、ヒルドルフに想定された任務を兼任できるためMSの完成によって状況は一変した。汎用性に劣り、小型反応炉完成以前



ヒルドルフの試作1号機は再評価試験の名目で実戦に投入され、地球連邦軍セモベンテ隊との遭遇戦において撃破された。



YMT-05  
ヒルドルフ



モビル状態

全長：35.3m（全幅：14.7m）  
標準車高：8.6m（最大車高：13.3m）  
全備重量：220.0t  
ミノフスキー型核融合炉出力：3,300kW  
装甲材質：不明  
兵装：30センチ砲／  
スモーク・ディスチャージャー×16／マシンガン



に設計されたヒルドルフは、兵器としての価値を失ったのである。

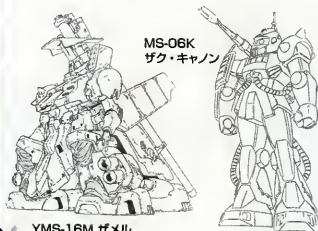
モビルタンクへの風当たりが強くなる中、起死回生の策としてヒルドルフにはMSの腕部が搭載されるなどの改装も行われた。しかし、それでも欠点を解決できず、U・C・0077、運用試験は中断され制式化も見送られたのである（温存されていた試作1号機は、一年戦争で北米大陸に投入されたものの、突発的な戦闘で失われている）。

こうして大口徑火器を固定装備した機動兵器は、一旦姿を消した。

しかし、地球連邦軍のキャノン・タイプMSが確認されると、ジオン公国は汎用性の低下を覚悟してまでも、大口徑火器を固定装備したMSを開発する。

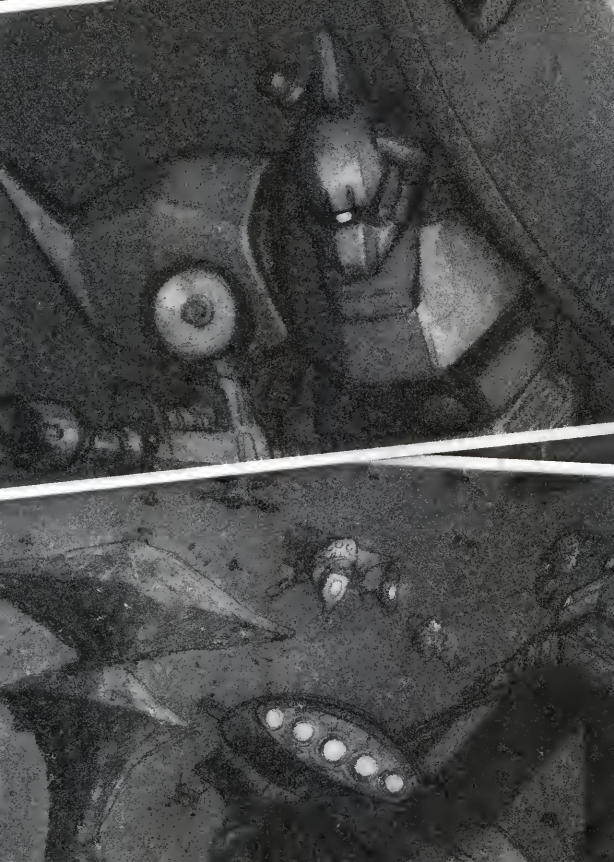
それが、180mmキャノン砲搭載のMS・06K ザク・キャノンで、高い砲戦・支援攻撃能力を持つ機体であった。

また680mmカノン砲を搭載した、YMS・16M ザメルが試作されたほか、ビーム・キャノン装備のMS・14C ゲルググ・キャノンも投入されたといわれる。ほかにも、ドム・トロピカルテストタイプをベースとするMS・09K・1（2）ドム・キャノンが開発されたともいわれており、砲撃戦用機動兵器は支援MSとして蘇ったのである。



MS-06K  
ザク・キャノン

YMS-16M ザメル



MS以前の兵器

MSの誕生

MSの実戦運用

高地戦用MSの  
開発

次期主力MSの  
開発

ニュータイプ  
専用機の開発

MAの開発



## 第五章

# 戦争末期のMS開発計画

～次期主力MSの開発～

## 新型主力MSを巡る混乱と遅過ぎた量産化

### 難航する新型主力MSの開発

突出した汎用性を持つMS・06FザクⅡF型は、発展余剰性にも秀でていたため、当初から長期間運用可能な主力MSと考えられていた。しかし、ザクⅡの限界の訪れと地球連

邦軍のMS投入を考慮すると、やはり後継機となる新型主力MSが必要であった。

そこで、ジオン公国軍は「第2次主力MS開発計画（第2期主力開発計画）」を施行し、ザクⅡを超える新型主力MSの開発に着手した。この計画一環として開発され、本命と目されていたMSが、後に「MS・14ゲルググ」として完成する機体である。

ザクⅡと同様の汎用性と対艦攻撃力を基本コンセプトとする新型主力MSには、ザクⅡを超える性能と携行式メガ粒子砲であるビーム・ライフルの搭載が要求された（ただし、これらの仕様要求が提示された時期は判然としない）。

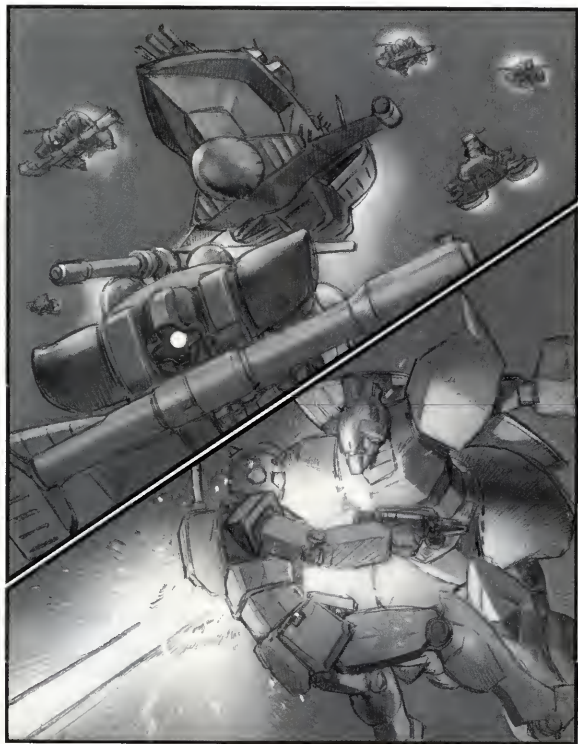
しかし、開発陣がザクⅡの発想から抜け出せなかったこと、メガ粒子砲の小型化に難航したこと、統合整備計画との兼ね合いなどにより、開発は遅延することとなる。



ジオン公国軍の主力MSとして活躍したザクⅡF型だったが、地球連邦軍製MSとの性能差は明らかであった。



後継機種の開発が進んだ一年戦争末期においてもザクⅡF型は主力の一角を担い、一部は偵察任務などにも運用された。



## 暫定的だった宇宙用主力MSの選定

重力下用の主力MSは既定通りドムに移行しつつあったが、宇宙用の主力MSは新型の投入が予定されていたため、第2次主力MS開発計画の遅延は深刻な問題であった。

そこで、ジオン公国軍は新型主力MS開発までの暫定的な処置として、既存のMSの改修機を宇宙における一時的な主力MSとする決定を下した。その最終候補に挙がった機体が、ZEONIC社の「MS・06R・2 高機動型ザクR・2タイプ」と、ZIMMA社の「MS・09R リック・ドム（初期型式番号はMS・R09）」である。

高機動型ザクR・2タイプは、一年戦争開戦から一カ月を経て開発が着手されたMS・06R（・1）高機動型ザクRタイプ的发展型とされている。

ビーム兵器の搭載が試みられた「MS・06R・2P 高機動型ザク・ビーム兵器搭載型」を改修した高機動型ザクR・2タイプは、U・C・0079・10に行なわれた公開テストにおいて、機動性と最大戦速時における攻撃力が高く評価された。また、熱核反応炉の高出力化やプロペラント・タンクの大形化、装甲の強化などが施されており、その性能は「ザクの皮を被ったゲルググ」といわれるほどのレベルに達していた。



黒い三連星はドムを受領する以前に様々なMSを乗り継いだとされ、その中には高機動型ザクがあったといわれている。



リック・ドムはジャブロー戦の前後に実戦投入され、シャア・アズナブルが指揮を執ったザンジバルにも搭載されていた。

こうして、ザクⅡの直系改造機としては最高クラスの性能を獲得した高機動型ザクR・2タイプは、4機が生産された（高機動型ザク・シリーズ全体の生産数は78機）。

対するリック・ドムは、第2次主力MS開発計画の遅れを危惧したドズル中将の提案で、開発されたといわれる。ドムを宇宙用に改装した本機は、地上用装備を排除することで広いペイロードを確保したが、単純性能では高機動型ザクR・2タイプに劣っていた。

しかし高機動型ザクR・2タイプは、費用対効果や生産性が低く、運用に高度なバックアップを必要とするなどの問題点を抱えており、ZIMMAD社はここに活路を見出した。そして、生産設備やパーツ転用の工程といったロードマップを提示し、宇宙にもドムの生産ラインが多く存在していたことも有利に働き、軍部の関心を買うことに成功する。

この結果、コストパフォーマンスに秀でるリック・ドムが制式採用され、高機動型ザクR・2タイプは試作レベルに止まったのである。なお、ゲルググの開発に注力し、高機動型ザクR・2タイプの性能に満足していなかったZEONIC社は、この裁定結果に納得していたといわれている。

リック・ドムの量産が進む中、ゲルググもネックとなっているビーム・ライフルの生産を保留して、MS本体の生産を先行させる。しかし、地球連邦軍は、ジオン公国軍の宇宙要塞ソロモン、そして本国のサイド3にまで侵攻しようとしていた。

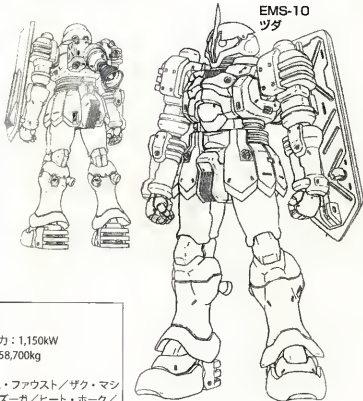
# ZIMMAD社の高機動MSツダ

ジオン公国軍のプロバガンダ

地球侵攻作戦が停滞となり、戦線が膠着して半年が経過すると、ミリタリー・バランスは地球連邦に傾きはじめた。劣勢になりつつあったジオン公国は、以前にも増してプロバガンダに力を入れるようになっていった。

このプロバガンダの中で突如、喧伝されたMSが、ZIMMAD社開発の「EMS・10 ツダ」である。EMS・10 ツダは、かつてMS・05 ザクIとの競争試作に敗れた「EMS・04 ツダ」の改良型とされ、ドム系MSでも採用された新型エンジン「土星エンジン」を搭載していた。

EMS・04 ツダのカタログ・スペックは、ザクIIをも凌駕するも



EMS-10  
ツダ

頭頂高：17.3m  
本体重量：61t  
ジェネレーター出力：1,150kW  
スラスター推力：58,700kg  
装甲材質：不明  
兵装：シュツルム・ファウスト/ザク・マシンガン/ザク・バズーカ/ヒート・ホーク/  
135mm対艦ライフル/専用シールド ほか





EMS-04の欠陥が解消されていなかったEMS-10 ツダは、加速性能に機体強度が追いつかず、空中分解する危険があった。



運用試験の後に残った2機のツダは、試験支援艦ヨーンヘイムの搭載機となった。

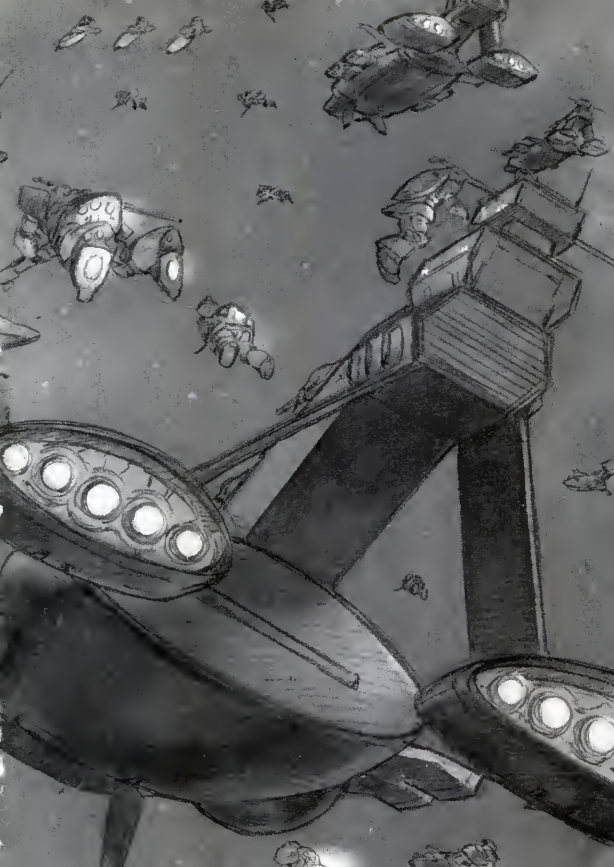
のだったが、ザクIの1.8倍という開発コストや、U.C.0075.01.21の空中分解事故がマイナス要因となり、制式化は見送られていた。

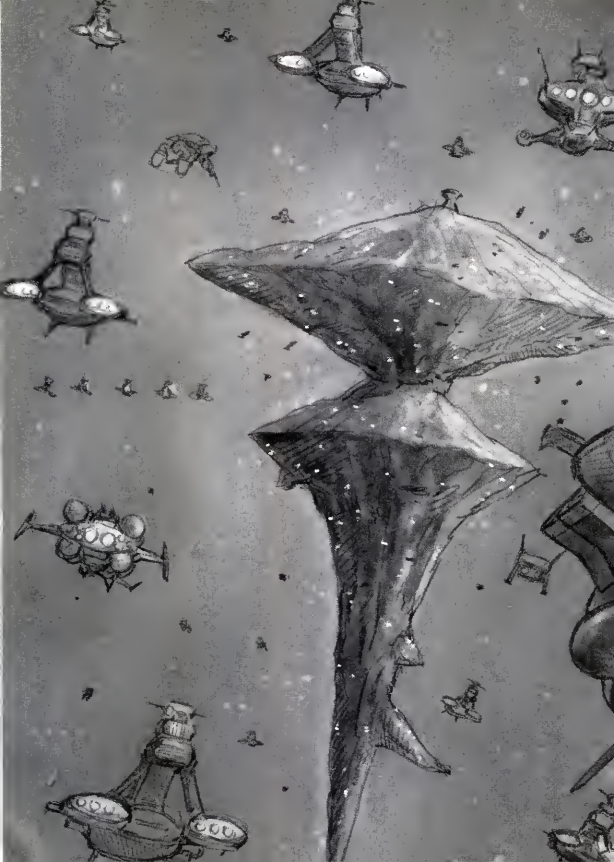
EMS・10 ツダの運用試験の様子は、ZWP A (Zeon War establishment Propaganda Association = ジオン国营放送) を通じて地球圏に報道され、制式化間近とまで伝えられた。

しかし、地球連邦軍のプロパガンダ放送により、EMS・10 ツダとEMS・04 ツダの間には大きな差がないことが暴露されてしまう。実はEMS・10 ツダもまた、その原型機同様に空中分解の可能性が高い危険な兵器であり、ジオン公国の戦意の高揚を狙っただけの存在だったのである。

地球連邦軍のカウンター・プロパガンダによってその正体が知れ渡ったEMS・10 ツダは、正式採用はおろか試験運用すら中断されてしまったのだ。

製造されたEMS・10 ツダの試作機4機の内、2機はEMS・04時代からの欠陥が原因で失われ、残された試作機2機も細々と運用されるに止まったのである。





## 新たな主力MSと携行ビーム兵器の完成

優れた総合性能を有するリック・ドム



MS-06RD-4  
宇宙用高機動試験型ザク

ドズル中将の提案で開発されたといわれるMS・09Rリック・ドムは、型式番号末尾にロケットを意味する「R」が加えられたことから分かるように、熱核ロケット・エンジンを搭載して宇宙仕様としたドムのバリエーション機である。推進器はEMS・10 ヅタやドム同様、「土星エンジン」を搭載した。なお、ドムに採用された「土星エンジン」は熱核ハイブリット・タイプ、リック・ドムやヅダのものは純粋な熱核ロケット・タイプと思われる。また、脚部用推進器は、「MS・06RD・4 宇宙用高機動試験型ザク」でのテストを経て実用化されたものを搭載する。

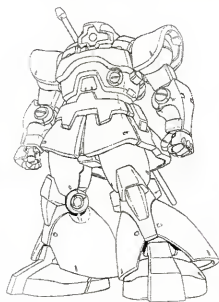
宇宙用への仕様変更に伴い、各部の防塵処理、吸気口およびコンプレッサーなどが取り除かれた結果、リック・ドムは地上用のドムと比べて本体重量で20t近い軽量化に成功しているが、これはリック・ドムのコンセプトと関係があると考えられている。

一週間戦争以降の戦闘でジオン公国軍は多くのベテラン・パイロットを失った。残された

練度の低いパイロットの操縦では推進剤の過消費を招き、これが原因で戦闘不能になるMSが続出した。そこでリック・ドムでは、推進剤の増量が目指された。そして、実際にザクⅡ

運動性はザクⅡF型よりわずかに向上したレベルだが、量産時に大型化されたスカート・アーマーにより腰部推進器への被弾率が低下。これにより、推進器も破壊されにくくなった。また、オリジナルのドム同様、大火力と重装甲を併せ持ち、経験が浅いパイロットでも戦果を挙げやすく、生還率も高かったことも利点といえる。

主兵装のジャイアント・バズは、宇宙用のロケット弾発射タイプ（ハニーウォール&ライセオン社のH&L・GB05R/360mm）に変更。試作ビーム・バズーカ（MIP社のBeam Bazooka EX-T2・2）を装備した機体もあったといわれる。これは全長20m超の大型ビーム砲で、ミノフスキー粒子の縮退にエネルギーCAP以外の技術を用いていた。チャー



MS-09R  
リック・ドム



頭頂高：18.6m  
本体重量：43.8t  
ジェネレーター出力：1,199kW  
スラスター推力：53,000kg  
装甲材質：超硬スチール合金  
兵装：ジャイアント・バズ/  
胸部拡散ビーム砲/ヒート・サーベル

MS以前の兵器

MSの誕生

MSの実戦運用

局地戦用MSの  
開発次期主力MSの  
開発ニュータイプ  
専用機の開発

MAの開発

ジに時間がかかるという欠点もあったが、地球連邦軍のMS用ビーム兵器の数倍の破壊力を有していたという。ヒート・サーベルは、基本的にドムと同じモデルである。

なお、性能向上型の「MS・09RS リック・ドムS型」も生産された。本機はビーム・バズーカの改修型（MIP社のBeam Bazooka Ex・T3・2）が搭載されたといわれる。

また、一年戦争後の小惑星基地アクシズにおいて、サイコミュ操作式遠隔攻撃端末ビットを搭載した「MS・09RN シュネー・ヴァイス」が試作されたともいわれている。

## ジオン公国軍最後の主力MS ゲルググの開発

MS・14 ゲルググは、ジオン公国軍の主力MSとしてはじめてビーム・ライフルを標準装備した機体であると共に、同軍最後の主力MSとなった機体である。

開発は、MS・06 ザクⅡを生み出したZEONIC社が担当した。

第2次主力MS開発計画の一環として開発されていたゲルググは、当初MS・11の型式番号が与えられ、MS・06F ザクⅡF型の後継機として期待されていた。しかし、技術的問題や統合整備計画の推進によって計画が遅延。ゲルググ完成までの暫定的な主力MSを巡るコンペティションが開催された。そこで同社が提示した高機動型ザクR・2タイプは制式採用されなかったものの、ゲルググの開発に思わぬ恩恵を与えることになった。

MS・11からMS・14に型式番号を改められたゲルググの開発は、高機動型ザクR・2タイプにゲルググのパーツを組み込んだ、MS・06R・3ゲルググ先行試作機によって進展を見たのである（なお、MS・11の型式番号はアクト・ザクに与えられた）。

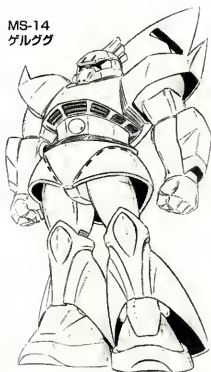
ザクⅢ（ネオ・ジオンのAMX・011ザクⅢとは異なる）とも呼ばれるゲルググ先行試作型は、熱核反応炉／ジェネレーターの高出力化が図られた結果、試作ビーム・ライフルを装備しており、そのテストデータはゲルググの開発にそのまま反映された。

また、MS・14への型式番号の変更に伴い、開発体制も一新されている。

開発の直接指揮には、ジオン公国軍の担当官が充てられ、推進器にはZIM M A D社が、ビーム・ライフルにはM I P社が参加したのである。これによりゲルググの開発は、ジオン公国の総力を結集したものとなり、統合整備計画との兼ね合いによって、生産性も大きく向上した。特に生産性の向上は画期的で、ザクⅡの生産ラインでも生産が可能となった。

ビーム・ライフルを稼働させるための大

MS-14  
ゲルググ



頭頂高：19.2m  
本体重量：42.1t  
ジェネレーター出力：1,440kW  
スラスター推力：61,500kg  
装甲材質：超硬スチール合金  
兵装：ビーム・ナギナタ/  
ビーム・ライフル／専用シールド

出力熱核反応炉は、水陸両用MS用を基としたタイプが開発された。水陸両用MSを得意とするZIMMAD社とMIP社が参加して、初めて実用化したものと考えられ、ここにも新開発体制の恩恵が表れている。

こうして完成したゲルグゲ用熱核反応炉／ジェネレーターは、液冷と空冷を併用した結果、RX・78ガンダムを上回る出力を発揮した。この熱核反応炉自体は、U.C. 0079秋には完成していたが、ビーム・ライフルの基本技術であるエネルギーCAP（ビーム・ライフルの弾倉の役割を果たす、メガ粒子化直前のミノフスキー粒子をプールするデバイス）の実用化が遅れたため、MS本体だけが先行して生産された。

U.C. 0079. 10に「YMS・14ゲルグゲ先行量産型」だけがロールアウトし、順次量産が進められたゲルグゲは、終戦までにシリーズ累計で740機（738機ともいわれる）が生産されることになった。ビーム・ライフルは生産の遅れを取り戻すことができず、生産ラインの実働開始が11月下旬、前線への安定供給は終戦の2週間前だったという。

## 革新的なゲルグゲの構造

開発の主体がZEONIC社であったため、ゲルグゲの構造はザクⅡシリーズと似た部分が見られる。しかし、それ以外にも地球連邦系MSの影響を受けたという説が唱えられるほ



どの革新的なパーツ構成も採り入れられている。

最も特徴的な構造の胴体は、熱核反応炉と背部オプシオンハッチを持つ胸部、コクピットブロックと呼ばれる腹部、メイン・スラスター搭載の腰部に三分割され、機能性や生産性に優れていた。これは地球連邦軍のRXシリーズと似た構造だが、RXシリーズの構造発覚とゲルググ先行量産型の生産開始が同じ月であるため、相互関係はないと考えられる。

胸部は、高出力熱核反応炉の冷却装置を補うための全周囲式のエアインテークを配置し、冷却に配慮した構造となっている。腹部のコクピットブロックは、文字通りコクピットが内蔵された中核モジュールを成す。この構造の採用により、胴体全体の可動域が広がったほか、パイロットの生存率の向上も実現されている。腰部はリック・ドムのそれに近く、スカート・アーマー内にスラスターを搭載。胸部同様、全周囲式のインテークが設置されており、スラスターを熱核ジェットとして使用する際の吸気口となっているようである。

また、背部にはオプシオンハッチが設けられている。これはランドセルの換装で多様な運用形態を実現しようとしたもので、設計の段階から盛り込まれた拡張機能であった。

頭部の内部構造はザクⅡのそれに近いものの、これまでは一般機に装備されなかった高性能センサーやコンピュータフレームが標準装備されたほか、後頭部のフィン状構造物がハイブリッドセンサー兼アンテナになっているなど、高性能化している。

腕部の基本構造はザクⅡのものを踏襲しているが、やはり駆動装置の小型化と高性能化が

図られ、掌部にはビーム・ライフルやビーム・ナギナタを稼動させるためのエネルギー供給装置が配置されるなど、武装形態に適した調整が加えられている。

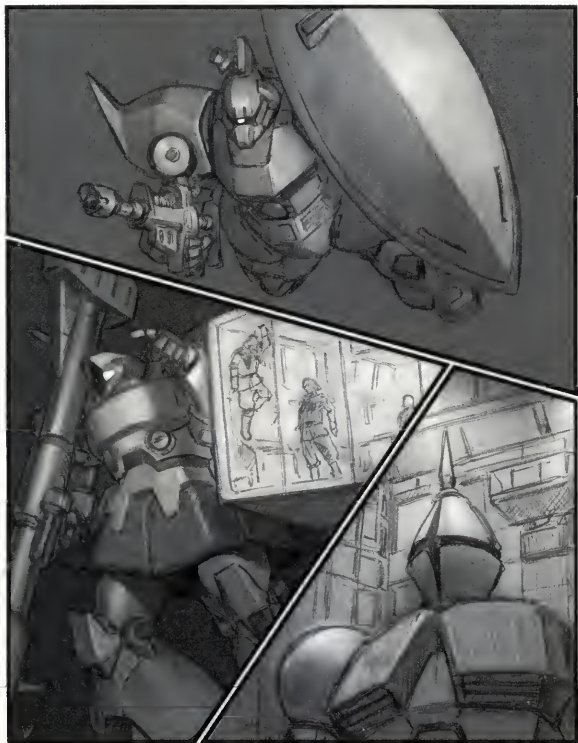
なお、腕部には補助機動装置としての機能も盛り込まれており、肩装甲先端にはサブスラストアが、前腕部にはモジュール化された熱核ジェット・エンジンが搭載された。ただ、前腕部の熱核ジェット・エンジンは、大気圏内やスペース・コロニー内でしか使用できなかったため、補助火器や増加装甲に換装されることも多かった。

脚部は、スラスト機能が重視された。形態や構造はドム系に近く、ベルボトム部内と足底スラストが配置されるなど、ZIM MAD社の関与が窺える構造となっていた。



MS-14 カスペン大佐専用機

カスペン戦闘大隊の隊長を務めたヘルベルト・フォン・カスペン大佐が搭乗したゲルググ。グレー系の塗装が施されており、右肩にはドクロをモチーフとした彼のパーソナル・マークが描かれている。B型のそれと同じバックパックを装着しており、高い機動性を有する。



## 最強のゲルググ用兵装

ゲルググ用兵装はRX-78-2ガンダムに近く、携行式メガ粒子砲のビーム・ライフル、ビーム系格闘兵装のビーム・ナギナタ、外装式増加装甲のシールドを基本装備としている。

ビーム・ライフルはMSが携行可能なサイズに小型化されたメガ粒子砲で、MS用火器としては最高クラスの破壊力を持つ。開発と製造はMIP社だが、ウエボン・システム社やALBERT（アルバート）社も関与していた。また、MIP社製のビーム・マシンガンを装備した例もあった。

格闘兵装のビーム・ナギナタは、開発と製造をALBERT社が担当した発生装置（柄）の両端からビーム刃を発生させる双刃式ビーム・サーベル（片刃だけ発生させることも可能）である。また、発生装置本体に耐ビーム・コーティングが施されているようで、それ自体で敵機のビーム・サーベルを受け止めることも可能であった。ビーム刃は縮退寸前のミノフスキー粒子で、その威力はヒート・サーベルを

ビーム・ライフル



ビーム・ライフルの装備を実現するなど、一年戦争期のジオン公国軍MSの集大成に位置する機体だったといえる。





ビーム・ナギナタ

アフリカのゲリラ勢力「青の部隊」が一年戦争後に運用したゲルググのレプリカは、ジャイアント・パスを装備していた。



シールド

超えた、ジオン公国軍最強のMS用格闘兵装といつてよかった。なお、単刃式ビーム・サーベルの装備機

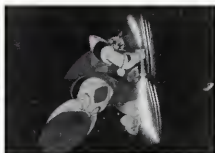
体も確認されている。

シールドは、表面には耐ビーム・コーティング処理がなされ、実体弾はもちろんビーム兵器にも防御力を発揮できる点が最大の特徴となる。同時に、ガンダム用と酷似した部分もいくつか見られる。大型で、覗き窓が設置された点、非使用時は背部にマウントできる点や、マニピュレーター対応ハンドルが設置される点（前腕部への装備も可能）がそれだ。

ゲルググはこれら兵装と優れた基本性能で、ガンダムと互角以上の戦闘能力を獲得した。



ビーム・ナギナタは片側の刀身だけを展開して、通常のビーム・サーベルのように扱うことも可能だった。



ビーム・ナギナタを構えるシャア・アズナブルのゲルググ。柄の両端からビームの刀身を形成する特徴的な格闘戦用兵装である。

## ゲルググのバリエーション

MS以前の兵器

MSの誕生

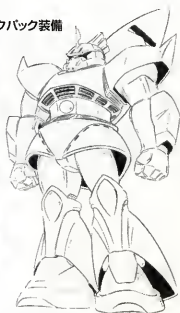
MSの実戦運用

局地戦用MSの開発

次期主力MSの開発

ニュータイプ専用機の開発

MAの開発



YMS-14 シャア専用ゲルググ

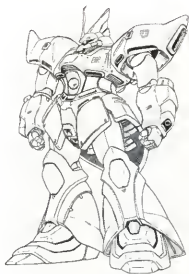
YMS・14ゲルググ先行量産型は、UC.0079.10、量産機に先行して生産されたモデルで、25機が製造されている。MS・14Sという型式番号を与えられることもあるが、基本的には量産仕様機と同じ仕様であり、兵装やオプションも共用できた。

MS-14 ゲルググ/B型用バックパック装備



一般的な仕様が「MS・14AゲルググA型」で、背部のオプションハッチに何も装備していない状態である。オプションハッチに

増速用ブースター・バックを装備したのが「MS・14B/ゲルググ高機動型」、キャノン・バックとセンサーを強化した頭部を装備した機



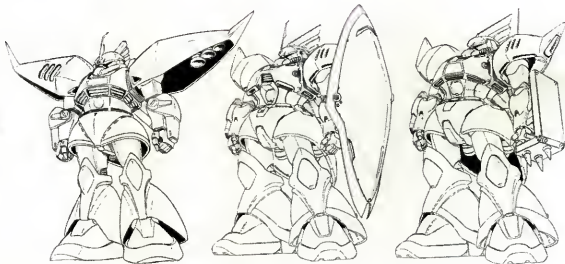
MS-14JG ゲルググJ

体が「MS・14C ゲルググ・キャノン」と呼ばれる。

これらは装備形態が違うだけの派生機である（最初から高機動型やゲルググ・キャノンとして生産された機体も存在した）。また、地上戦対応の「MS・14G ゲルググ陸戦型」も、同様に装備形態による派生機と考えられる。

ゲルググの第2期生産型が、「MS・14JG ゲルググJ（イエーガー）」である。狙撃型といわれる機体で、ビーム・マシンガンを標準装備する。プロペラント・タンクを増設できるうえ、スペックも群を抜いて高く、シリーズ最強といつていいタイプとなっている。

「MS・14F ゲルググM（マリーネ）」は海兵隊仕様と呼ばれる機体で、統合整備計画の影響が強い派生機である。ゲルググJ同様、プロペラント・タンクを増設できるため、作戦行動



MS-14J リゲルグ

MS-14Fs シーマ専用ゲルググM

MS-14F ゲルググM



「青の部隊」のゲルググはパーツの多くを流用品などで補っており、外観は同じでも別のMSだったといっよい。

時間が長いのが特徴であった。なお、指揮官機と呼ばれるMS・14Fsも存在する。

ゲルググの数少ない局地戦用バリエーションが「MS・14D デザート・ゲルググ」で、潜砂スコップやアームド・バスターといった特殊な装備が施されていた。

一年戦争後に改修されたゲルググ・バリエーションとして知られるのが、小惑星基地アクシズで製造された「MS・14J リゲルググ」である。両肩にウィング・バインダーを装備した高機動機で、主に訓練機として使用されたが、U・C・0080年代末期の実戦でも充分に通用する性能を持っていた。

ほかに、シヤア大佐搭乗機をアクシズで改修した性能向上型（名称不明）や、ジオ公国軍残党が推進器やトラップ系兵装を増設した「MS・14A ゲルググ」「シュトゥッツァー」なども存在（「シュトゥッツァー」仕様はリック・ドムやザクⅡにも存在）したといわれている。

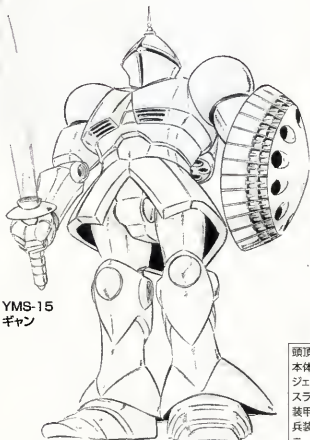


## 純粋な格闘戦用機 YMS・15 ギャン

「YMS・15 ギャン」は、第2次主力MS開発計画においてZ I M M A D 社が開発した試作MSである。対MS格闘戦を意識したMSで、ゲルググの対抗機種であった。

当初はMS・X10として開発され、MS・06R・2 高機動型ザクR・2タイプとMS・09R リック・ドムが参加したコンペティションにも加わったが、完成に至らなかったため早々に候補から外されたといわれる。

その後、ビーム・サーベルによる格闘戦を最重視したコンセプトの通りに完成したギャンは、極めて高度な運動性と駆動性を獲得していた。



YMS-15  
ギャン

頭頂高：不明（全高：19.9m）  
本体重量：52.7t  
ジェネレーター出力：1,360kW  
スラスター推力：56,200kg  
装甲材質：超硬スチール合金  
兵装：ビーム・サーベル／専用シールド／  
ニードル・ミサイル／ハイド・ポンプ

MS以前の兵器

MSの誕生

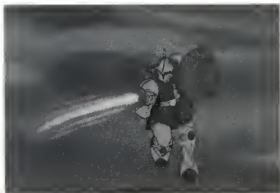
MSの実践運用

局地戦用MSの開発

次期主力MSの開発

ニュータイプ専用機の開発

MAの開発



フェンシングのような特徴的な構え方からも、ギャンのビーム・サーベルが刺突攻撃を重視していた点が見てとれる。



シールドからニードル・ミサイルを発射するギャン。一般的な射撃戦用兵装を持たず、中・遠距離における戦闘力は低かった。

ギャンの構造については不明確な部分が多い。一説では、ジオン公国軍系MSの駆動装置である流体内パルス・システムを発展させた、流体パルスアクセラレーターを股間部の円筒形ユニットに搭載していたとされている（地球連邦軍系MSと同じフィールド・モーターを搭載したとい

う説もあり、複数の仕様のギャンが開発された可能性も否定できない）。

流体パルスアクセラレーターは、熱核反応炉で発生した余剰圧力を蓄積し、必要に応じて開放するもので、瞬間的に大パワーを発揮できるほか、レスポンスとトルクを大幅に向上させる。これにより、ギャンは一年戦争期屈指の駆動性能を獲得していたという。

胸部には流体パルスアクセラレーター用の分岐パワーサプライヤー回路が設置され、また頭部には熱核反応炉と流体パルスアクセラレーターの統合制御装置が増設されるなど、流体パルスアクセラレーターのシステム化が進んでいたといわれている。

ギャンの格闘戦対応機構は、駆動系だけではなかった。

モノアイの走査レールは上下左右に加えて後方にも伸びているため、どのような体勢でも敵機を捕捉することが可能である。関節の可動範囲も拡大され、多彩かつ柔軟な機動が可能となっている。ビーム・サーベルによる刺突攻撃を前提としているため、特に手首部の可動範囲が広い点も特徴といえる。

当然、ギャンの主兵装であるビーム・サーベルも斬撃よりも刺突を優先したタイプだが、発生させるビーム刃が太いため、貫通力だけでなく破壊力も高かった。

刺突攻撃が優先された理由は予備動作が小さく、攻撃速度が速いためと推測される。これは駆動性を追及したギャンに相応しい攻撃方法といえる。

対MS格闘戦を前提としている以上、シールドが装備されているが、これは単なる外装

式増加装甲ではなく、敵機の牽制のための火器も内蔵していた。その内訳は超小型ミサイルのニードル・ミサイルが60発、機雷であるハイドポンプが25基であった。

シールド内蔵火器以外の射撃兵装はまったく装備しておらず、このことからギャンが純粹な格闘戦用MSであったことが理解できる。

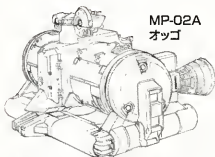


ハイドポンプ



ニードル・ミサイル

# ジオン公国の落日を体言した流用兵器 駆逐モビルポッド オッグ



MP-02A  
オッグ

全長：11.6m（全幅：14.7m／全高：7.8m）  
 本体重量：31.2t（全備重量：57.8t）  
 ジェネレーター出力：976kW  
 スラスター推力：48,400kg  
 装甲材質：不明  
 兵装：ザク・マシンガン／ザク・バズーカ／  
 6連装ロケット・ポッド／  
 シュツルム・ファウスト

一年戦争末期、ジオン公国軍でMA・14ゲルグゲやMS・09リック・ドムといった高性能MSの配備が進む中、簡易機動兵器も開発されている。それがモビルポッドに分類される「MP・02Aオッグ」である。

地球連邦軍のRB・79ボールに相当するオッグは、MSと比較して性能が低いことは明らかだった。だが悪化する戦局の中、MSの絶対数不足に悩

んだジオン公国軍は、低コストで製造できる機動兵器を欲し、「モビルポッド計画」を立案した。こうして量産されたのがオッグである。

技術本部で開発されたオッグの特徴は、徹底した既存部品の流用であった。

MS・06JザクⅡJ型の部品を流用したMS



ボールとの格闘戦を繰り広げるオッグ。両者はコンセプトこそ似通っているが、運用性はオッグのほうが優れていた。



ア・バオア・クー戦ではカスベン戦闘大隊の所属機として、ビッグ・ラングとともにEフィールドの防衛を担った。

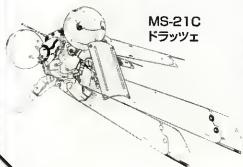
・07 グフやMSM・04 アッガイ、ザクⅡ用モノアイの改裝型を搭載した観測機器OP・02cなどに見られるように、元々ジオン公国軍は部品流用に積極的だった。しかしそれは、新型MS開発時の基礎技術の不足や開発期間短縮、低コスト化などが目的で、オッゴのように決定的に質を落としてまでもパーツ流用に拘ったわけではなかった。

オッゴは、戦線後退によって不要になったザクⅡJ型から熱核反応炉を、ザクⅡシリーズから火器を流用したほか、機体を構成する大半のパーツをほかの兵器から流用した。

U・C・0079・11に試作機が完成し、そのまま量産されたオッゴは、開発期間の大幅短縮や定数確保には成功しており、ジオン公国の技術力と工業力の一端を垣間見せた。

一年戦争末期の戦闘に投入されたオッゴは、与えられた性能相応の戦果を挙げた。だが、MSの先駆者であるはずのジオン公国軍が生み出した戦時急造簡易兵器という形態が、ジオン公国の落日を象徴していたのである。

一年戦争後、デラーズ・フリートも、ザクⅡF2型と宇宙戦闘機ガトルを流用した「MS・21C ドラッツェ」を開発したが、これもオッゴに近い簡易機動兵器といえる。



MS-21C  
ドラッツェ

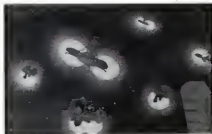
頭頂高：29.8m  
 本体重量：23.9t  
 ジェネレーター出力：569kW  
 スラスター推力：117,500kg  
 装甲材質：超硬スチール合金  
 兵装：40mmバルカン砲／  
 ビーム・サーベル／シールド

## 戦争末期の戦線を支えた高性能新型MSたち

### 同機種編成部隊で活躍したリック・ドム

同一機種編制された部隊が少なかったMS・09ドムとは異なり、MS・09リック・ドムの配備は急速に進んだ。グラナダに代表される宇宙の生産施設が大規模侵攻を受けていなかったこと、キャリフォルニア・ベースでも生産されていたことなどが、普及の理由と考えられる

宇宙攻撃軍のコンスコン機動艦隊やキャメル・パトロール艦隊、突撃機動軍の独立第300戦隊などが、リック・ドムの優先配備を受けていた部隊として知られる。また、宇宙要塞ソロモンおよび宇宙要塞ア・バオア・クーなどの重要拠点には多くのリック・ドムが配備されており、MS・14ゲルググの配備が進まないうち、MS・06FザクⅡF型と共に防衛部隊の主力を務めていた。実際、一年戦争末期には高練度パイロットの多くがリック・ドムに機種転換しており、活躍の機会も多かったようである。



コンスコン機動艦隊は12機のリック・ドムを投入してサイド6宙域でホワイトベース隊を攻撃したが、3分足らずで全滅したとされる。

キャメル・パトロール艦隊のムサイとリック・ドム。同艦隊はホワイトベース隊との交戦で壊滅したといわれている。

コンスコン機動艦隊のように、小艦隊レベルで投入されたリック・ドムは、ホワイトベース隊に代表される強力な部隊と交戦し、撃破されてしまった例も知られている。だが、同機種で編制されたリック・ドム部隊の戦闘能力はザクⅡを超えていた。

リック・ドム部隊が組織的に投入された例として有名なものが、ア・バオア・クー戦である。Nフィールドに侵入した地球連邦軍に対し、ジオン公国軍はリック・ドム部隊とザクⅡ部隊を交互に突撃させ、敵を押し止めている。また、リック・ドムで編制された第34MS部隊は、ア・バオア・クー近傍に待機しており、Sフィールドへの敵軍侵入時には、シャア・アズナブル大佐のMSN・02 ジオングと共に戦域に駆けつけた。

ゲルググほど高性能ではなかったリック・ドムだが、大容量プロペラント・タンクによ

る長い行動時間とザクⅡ以上の戦闘能力、そして多くの生産数によって、戦争末期のジオン公国を支えたことは間違いないかった。



地球連邦軍艦隊の迎撃に向かう第34MS隊のリック・ドム。シャア・アズナブル指揮の下、Sフィールドの防衛に貢献した。



ア・バオア・クー戦においてMS戦力の中核として運用されたリック・ドムは、マゼラン級に打撃を与えるなどの戦果を上げた。



ホワイトベースがア・バオア・クーに取り付いた際には、リック・ドムが要塞内部から攻撃してエンジンの破壊に成功している。





## 投入が遅過ぎた高性能MSゲルググ

U. C. 0079. 10に生産された25機の先行量産型のYMS・14ゲルググは、独立第300戦隊のシャア・アズナブル大佐やエース部隊であるキマイラ隊に配備された。これらは、いずれも突撃機動軍の部隊であり、MS・14FゲルググMを大量配備されたシーマ艦隊の例を見ても、キシリア・ザビ少将の政治力が働いていたことは明らかである。

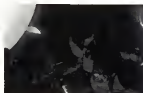
先行量産型のロールアウトを受けて、量産はグラナダ、サイド3、ア・バオア・クーなどのMS工廠で行われた。しかし、終戦までに生産されたのは700機強に過ぎず、ビーム・ライフルの配備が遅延したため、本格投入されたのはア・バオア・クー戦となった。

なお、この内の数機はア・バオア・クー戦以外の戦域へと投入された。12月中旬に、グラナダ基地に所属するMS・14JGゲルググJのサイド6への投入が確認されたほか、12月上旬のオーストラリアにMS・14Gゲルググ陸戦型が配備されたともいわれる。

先行量産型においては、シャア大佐機が数回にわたってRX・78・2ガンダムと交戦したことが知られている。しかし、量産型は、機



量産機の多くにはパイロットとして未熟な学徒兵が搭乗したため、目立った戦果を上げることはできなかった。



「ソロモンの悪夢」の異名を取るアナベル・ガトーは、ア・バオア・クー戦でも専用のゲルググを駆って奮戦した。



ガンダムと戦うシャア・アズナブルの先行量産機。同機は性能の片鱗を示しはしたものの、勝利するには至らなかった。

種転換の時間がなかったためか熟練パイロットが使用した例は少なく、ア・バオア・クー戦では学徒兵が搭乗することが多かった。この結果、ジョニー・ライデン少佐機やアナベル・ガトー大尉機などの例外を除けば、ゲルググは十全な性能を発揮できず、ジオン公国の窮地を救うことはできなかった。

「ゲルググが一カ月早く投入されていれば」という仮定はよく聞くが、ゲルググの投入時期が遅過ぎたことは確かである。ガンダムを超えるという性能をまったくといっていいほど活かせなかった原因のひとつに、ジオン公国軍の采配ミスがあったことは間違いない。

## 歴史の闇に消えたギャン

第2次主力MS開発計画においてMS・14ゲルググの対抗機となった「YMS・15ギャン」だが、汎用性や宇宙戦能力の不足、そして何よりもビーム・ライフルの運用能力がなかったことにより、コンペティションに敗れた。

残されたギャンの試作機には、一年戦争後にアクシズに運び込まれたという説や、ア・バオア・クー脱出戦時に出撃して撃墜されたという説もあるが、中でもドラマチックな説



フナガン機関からの脱出兵を乗せた艦艇の護衛に、ゲルググが使用されていたともいわれている。



デラズ紛争においては、コロニー・ジャックに従事したシーマ艦隊のゲルググMが本来の性能を示した。



最終的にはガンダムにパワー負けし、懐に入り込まれてビーム・サーベルで機体を破壊されたと伝えられる。



ガンダムの撃破に固執したマ・クベは、助太刀に入ろうとしたシャア・アズナブルを遮ったといわれている。



マ・クベがギャンに搭乗したという説においては、近接格闘戦でガンダムと互角に交り合ったとされている。

がアムロ・レイが搭乗するRX・78・2 ガンダムとの交戦の末に撃破されたというものである。

この説ではソロモン戦直後、ホワイトベース隊の撃破を目論んだマ・クベ大佐が、サイド5のテキサス・コロニーにガンダムを誘い込み、一騎打ちを演じたことになっている。

そこでマ・クベ大佐のギャンは、トラップや数少ない搭載火器でガンダムの追い詰め、遂に得意の格闘戦に持ち込むことに成功する。ビーム・サーベルを繰り出すギャンを前に、ガンダムもビーム・サーベルで応戦し、MS対MSの熾烈な格闘戦が繰り広げられた。しかし、ガンダムのビーム・サーベル二刀流に敗れたギャンは、マ・クベ大佐の絶叫と共に爆散したといわれる。

この説が正しいとするなら、MSの操縦に関しては素人同然だったというマ・クベ大佐に、そこまでの戦闘能力を与えたギャンの性能は恐るべきものといえる。

実際、兵装面を除いたギャンの基本性能は、ゲルググを上回っていたと伝えられており、一年戦争最高のポテンシャルを持つMSといっても過言ではない。

## MSの規格統一を目指した統合整備計画

ジオン公国軍のMS開発はZ E O N I C社、Z I M M A D社、M I P社といった企業だけでなく、軍の技術本部も関与する極めて広範なものであった。

このような組織間競争に近い開発体制は、MSの早期実用化に結びついた反面、開発組織間の意思疎通を阻害し、MSの互換性に重大な問題を発生させた。この問題は、コクピットやマニピュレーターの規格だけでなく、部品レベルにまで達しており、生産性や整備性の悪化、機種転換時の慣熟訓練の長期化という弊害を招いた。

そこでジオン公国軍はU・C・0079・02、マ・クベ少佐（当時）の提案によってMSの規格統一を目指す「統合整備計画」を実施した。

この統合整備計画は、操縦方法統一のための共用コクピットの開発や、異機種間で兵装を共用するための統一マニピュレーター、各種部品の徹底した共用化などを目標とした。同時に、各開発チームは、組織の垣根を越えた技術提携を求められるようになっていった。

統合整備計画は、それ以前から進捗していた開発計画を中断、



統合整備計画  
共用マニピュレーター



統合整備計画  
共用コクピット

機種を問わず広く使用され、E M S・10 ヅダやY M S・16 M ザメルといった試作機にも、そのまま、あるいは改修して搭載された。

水陸両用 M S の改修機シリーズである M S M・03 C ハイゴッグや、M S M・07 E ズ

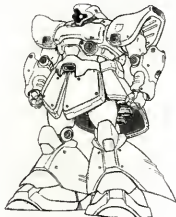


MS-09F / TROP  
ドム・トローベン

頭頂高：18.5m  
本体重量：44.8t  
ジェネレーター出力：1,199kW  
スラスター推力：47,200kg  
装甲材質：超硬スチール合金  
兵装：ラケーテン・バズ／90mmマシンガン／  
ヒート・サーベル／シュツルム・ファウスト

頭頂高：18.6m  
本体重量：45.6t  
ジェネレーター出力：1,219kW  
スラスター推力：110,000kg  
装甲材質：チタン・セラミック複合材  
兵装：ジャイアント・バズ／  
90mmマシンガン／ヒート・サーベル／  
シュツルム・ファウスト

MS-09R-2 リック・ドムII



中止させるといふデメリットもあったが、四カ月後には収束し、M S の開発と生産に反映されていく。これを受け、M S・06 ザクIIやM S・09 ドムといった既存のM S も、統合整備計画に準拠したタイプが生産されるようになった。

それが、後期生産型と呼ばれるM S・06 F・2 ザクII F2型や、M S・09 F / TROP ドム・トローベンで、コクピットやマニピュレーターなどを中心に共用化が図られていた(M S・07 B・3 グフ・カスタムも、統合整備計画準拠型といわれる)。

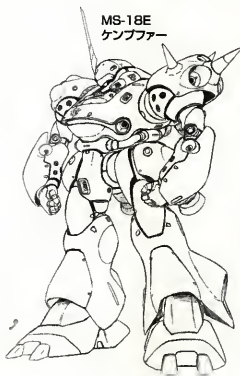
特に統合整備計画準拠のコクピットは

ゴックE（エクスペリメント）も、コクピットこそ新規の水陸両用MS共用タイプだが、統合整備計画の影響下にあるMSである。

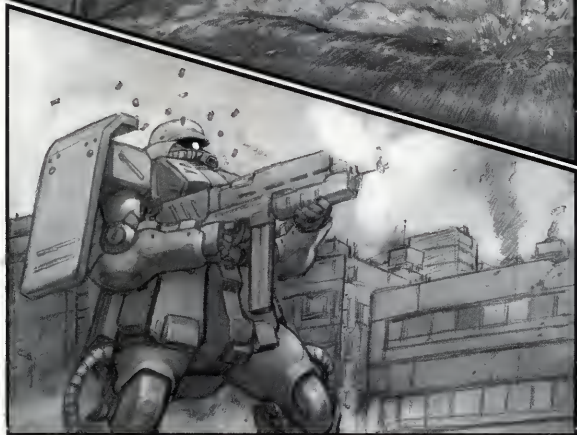
また、第2期生産型と呼ばれる一連のMSシリーズは、統合整備計画の影響が更に強くなっている。MS・06FZ ザクII改、MS・09R・2リック・ドムII（ツヴァイ）、MS・14JG ゲルググJ（イエーガー）がそれらに分類されるMS（MS・14F ゲルググ・マリーネが加えられることもある）だ。

これら第2期生産型MSの特徴は、前述のようなコクピットやマニピュレーターの統一だけでなく、全般的な性能向上が図られていることで、スラスタ・推力に至っては従来機の2倍にも達していた。ただし、推進剤量は変わっていないため、行動時間は短縮されるという問題もあった。

特に最終生産型と呼ばれるザクII改は、新鋭機に迫る性能を獲得しており、そのフレームは強襲MSのMS・18E ケンプファーに流用されたとも考えられている。



頭頂高：17.7m  
本体重量：43.5t  
ジェネレーター出力：1,550kW  
スラスタ・推力：158,000kg  
装甲材質：チタン・セラミック複合材  
兵装：専用ショットガン／ジャイアント・バズ／  
シュツルム・ファウスト／チェーン・マインD ほか









## 第六章

# ニュータイプの戦力化

～ニュータイプ専用機の開発～

MS以前の兵器

MSの誕生

MSの実戦運用

局地戦用MSの開発

次期主力MSの開発

ニュータイプ専用機の開発

MAの開発

## ニュータイプの出現と

## 戦力化の研究

### ニュータイプ思想の誕生

宇宙に生活圏を広げた人類は、感覚野が拡大されて深い洞察力を獲得した結果、物事の総体と本質を誤解なく認識できるようになると考えられた。

これが、ジオン・ズム・ダイクンが出現を予見した、宇宙時代に対応した新たな人類「ニュータイプ」である。

従来的人类は、先入観や固定概念、感情や欲望、誤解や誤謬といったミクロな視点から脱することができず、それが戦争や環境破壊を含めた悪弊の要因と考えられていた。しかし、高度な総合認識能力によるマクロな視野を持つニュータイプは、そうした悪弊から解き放たれる存在と位置付けられたのである。

ただし、ニュータイプの実在や出現時期について言及されず、「人類の革新」や「スペースノイドの未来像」といった言葉が独り歩きしていった。

ジオン・ダイクンの死後、サイド3を主導したギレン・ザビ総帥もニュータイプ思想をプロパガンダに利用したが、具体的な出現は遙か先のことを考えていた。

## 戦場で確認されたニュータイプ

一年戦争が開戦するとジオン公国軍の将兵の中に、ニュータイプとしか思えない空間認識能力や先読み能力を発揮する者が確認されるようになった。

これは、一年戦争緒戦のMS戦を調査する中で確認されたもので、特に顕著だったのがビームを回避したケースだった。亜光速といわれるほどの速度で飛来するビームを避けるには、発射を事前に察知し、ビームが放たれる前に回避行動を取らなければならない。つまり、ビームをかわしたMSのパイロットは、反応速度で避けたのではなく、ビームの発射を予知していたのである（ニュータイプは反応速度に優れるといわれるが、実際には敵の行動を先読みし、事前にリアクションに入っている場合が多い）。

また、最前線にいながらも戦域全体の様子を認識していたと思われる者や、多くの目標への連続攻撃を行なったパイロット、死角からの攻撃に対処した将兵も確認された。

これが現象面でのニュータイプの誕生だった。

この事実を認識したキシリア・ザビ少将は、ニュータイプの実在を確信するようになり、ジオン公国軍ではニュータイプの軍事利用の研究が進められることになったのである。



ルウム戦役の「五機飛び」で先読みの才能を見せたシャア・アズナブルも、ニュータイプではないかと考えられた。

MS以前の兵器

MSの誕生

MSの実践運用

局地戦用MSの  
開発次期主力MSの  
開発ニュータイプ  
専用機の開発

MAの開発

## フラナガン機関の設立と感應波の確認

ニュータイプの軍事利用を決定したジオン公国軍は、U・C・0079・06、中立ス  
ペース・コロニー・サイド6に、ニュータイプ研究所「フラナガン機関」を設立した。

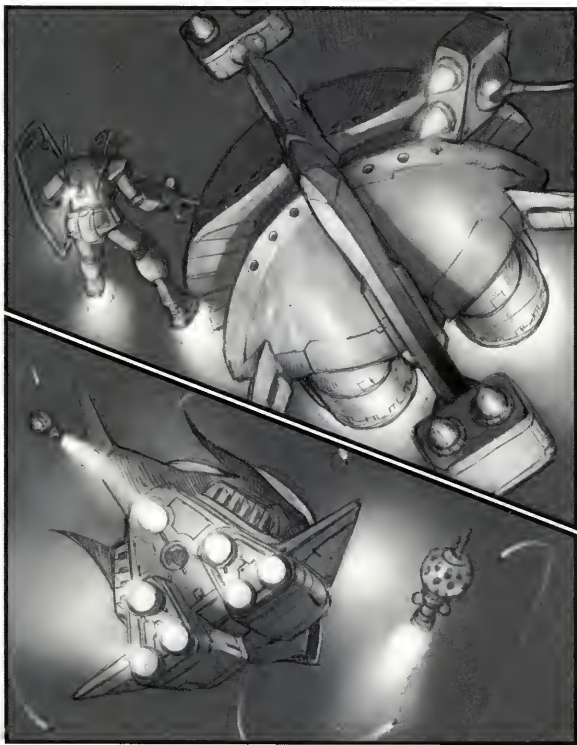
中立地帯への軍事施設の設立は南極条約に抵触する可能性があったため、民間の嘱託研  
究機関として設立された（地球連邦軍も、サイド6のリボー・コロニーに秘密の軍事施設  
を建設するなど、南極条約は事実上有名無実化していた）。また、戦局を左右しかねない  
研究であったため、フラナガン機関の存在は極秘扱いとなっていた。

フラナガン機関では、ニュータイプそのものと、その能力を活かした兵器システムの研  
究が行われている。この研究の中で、ニュータイプは感應波（サイコ・ウェーブ）と呼ば  
れる特殊な精神波を発することが判明した。しかもこの感應波には、発した人間の思考情  
報が含まれているため、これを利用できれば人間の意思を直接操  
縦に反映させ、機動兵器の操縦性と追従性を向上させられると考  
えられたのである。また、子機的な補助兵器の同時コントロール  
も可能とされた。

こうして、ニュータイプの感應波を操縦に取り込んだ、マン・  
マシン・インターフェイス「サイココミュ」の開発が進められた。



ニュータイプとして知られるガンダム  
のパイロット、アムロ・レイは、感  
應波の実存を端的に示した人物  
だったといえる。



## 思想面でのニュータイプと政治的な存在意義

スペースノイドの独立を目指したジオン・ズム・ダイクンは、「ジオニズム」という新思想を提唱した。ジオニズムは、各サイドを独立国家と見做す「コントリズム（サイド国家主義）」と地球を神聖視する「エレズム」に、人の革新と謳われる「ニュータイプ思想」を採り入れたものであった。ここで初めて「ニュータイプ」の存在が示されたが、これはスペースノイドに対する方便とも捉えられる。

自らを宇宙移民政策で発生した「棄民」と位置付け、さらに宇宙生活者としてのアイデンティティの拠り所を持たないスペースノイドに、ジオン・ダイクンが提示した偶像がニュータイプだったのではないだろうか。

ニュータイプは将来的な出現を予定された存在だが、ジオニズムの文脈ではスペースノイドこそがニュータイプを生み出す母体となっている。しかも「物事の総体および本質を誤解なく認識できる人類」というニュータイプの姿は、超越者にほかならない（これが、ジオニズムをして「オカルト」と糾弾されることもある一因ともなっている）。

つまり、スペースノイドこそがニュータイプを生み出す土台であるとともに、見方に



ジオン・ズム・ダイクン



ジオン・ダイクンが提唱したニュータイプの概念が、スペースノイドの政治的指標となっていた。



ギレン・ザビや「シャアの反乱」のシャア・アズナブルは、ジオンの思想を政治的に利用した例であった。



ジャミトフ・ハイマン准将  
(後に大將)



バスコ・オム大佐

の選民意識——「地球至上主義」が生まれる。選ばれたアースノイ

よつてはスペースノイドとニュータイプが類似の存在という図式が成り立つ。この事実  
は、スペースノイドのアイデンティティ確立に大きな意味を持っていたのである。  
しかしその反面、この考えは選民思想に発展しやすいという問題も内包していた。  
事実、ギレン・ザビ総帥は著書『優性人類生存説』の中で、ジオン・ダイクンの遺志を  
継いだザビ家に率いられたジオン公国国民こそが、ニュータイプに進化するスペースノイ  
ドの前衛であり、地球圏全体を管理下に置く資格を持つと主張している。これによって  
ニュータイプはジオン公国先鋭化の一助となってしまった。

その一方で、のちにジオニズムと対をなすアースノイドにとって  
ドの地球圏統治によつてのみ地球の再生  
がなされるという思想は、ニュータイプ  
の概念を真つ向から否定するものであつ  
たともいえる。そして、この思想に基づ  
いて設立されたテイターンズの行動は、  
スペースノイドとアースノイドの思想  
的、政治的対立構造の悪化を招くことにな  
るのである。

## サイコミュの完成と

## ニュータイプ専用機動兵器の誕生

### サイコミュの開発と特性

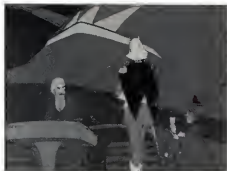
継続的な緊張状態に置かれたニュータイプが発する感應波を、機体制御や火器管制に用いるサイコミュ（サイコ・コミュニケーションの略。サイコミュ・システムともいわれる）は、発想としては音声認識装置に近いものといえる。

音声認識装置は人間が発した声（音波）を受信したのち、それを電気信号に変換して、機器に特定の動作を行なわせる装置である。サイコミュも、人間の思考情報に乗った感應波を受信し、それを電気信号に変換して、機動兵器や攻撃端末を動作させるものである。つまり、サイコミュは「パイロット→サイコミュ→機動兵器本体」という、一連の情報の流れを仲介する機器といえる。

これに加えてサイコミュが特殊だった点は、周囲から得た情報をパイロットにフィードバックすることだった。情報のフィードバックは、ディスプレイへの投影や機械音声としてではなく、パイロットに感覚的に伝わるものであるため、状況把握も格段に早くなっている。

また、サイコミュは感應波を受信、増幅するため、パイロットの認識能力を拡大する機能





フラナガン機間のサイコミュ研究は発展途上の試みであり、エルメスの運用で見られたように実戦の中で検証が図られていった。



グリプス戦役期には、サイコミュ・システムを用いた機動兵器の遠隔操作がティターンズによって試みられている。

もあり、単なるマン・マシン・インターフェイスの域を超えたデバイスとなっているのである。これに加え、サイコミュは単位時間当たりの情報量伝達量が突出して多いという特徴を持つ。つまり、コントロールスティックやペダルを介した操縦よりも管制能力が高いだけでなく、視覚や聴覚に比べて遣り取りできる情報量が多いということである。

感応波はミノフスキー粒子を媒体として伝達されるため、サイコミュ自体もミノフスキー粒子のジャミング効果を受けない点も強みと考えられた。

また感応波の効果のひとつとして、ミノフスキー粒子を利用した無線通信でありながら、その不安定性から短距離での通信しかできなかった「ミノフスキー通信」の安定化を促すことが確認されており、これも感応波の送受信機としてのサイコミュの性能を高めている。

ニュータイプにしか使用できないとはいえ、このような特性を持つサイコミュの有効性は疑うべくもなく、U.C. 0079.10にサイコミュの試作型が完成すると、サイコミュを搭載した機動兵器の開発が急ピッチで進められていった。

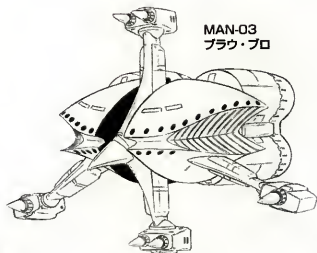
## MAN・03 ブラウ・プロの開発と構造

実用に達した最初期のニュータイプ用機動兵器が、MAN・03 ブラウ・プロである。

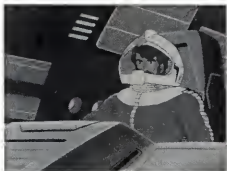
MS・16X、つまり後のMSN・02 ジオングを巡る計画の一環として開発された機体で、開発は月面のグラナダで行われ、全3機が生産されたといわれている。

型式番号の「MA」から分かるように、ブラウ・プロはモビルアーマー(MA)に分類される機動兵器である。ブラウ・プロのフォーマットにMAが採用された原因は、搭乗者の生存性やサイコミュのサイズの問題だが、それ以上に熱核反応炉が大型化したためであった。ほかにも行動時間の延長のための推進剤量増加により、ブラウ・プロの機体サイズは宇宙艦艇クラスとなっている。また、あまりの大型のボディのためにAMBCシステムを搭載できず、多数の姿勢制御バーニアを搭載したことも大型化に拍車をかけている。

MAN-03  
ブラウ・プロ



全高：60.2m (全長：62.4m)  
 本体重量：1735.3t (全備重量：2602.6t)  
 ジェネレーター出力：74,000kW  
 スラスター推力：1,760,000kg  
 装甲材質：不明  
 兵装：有線式メガ粒子砲×4



ニュータイプ用単座コクピットに座るシャリア・ブル。  
下は一般パイロット用コクピットで、別のモジュール  
に配置されている。

### MAN-03 ブラウ・プロのコクピット



は、攻撃端末操作作用のレーザー信号の伝達機能とともいえる。そこでジオン公国軍では、サイココミュを介して制御されるリモコン攻撃機というべき、有線誘導式メガ粒子砲だったのである。

サイココミュの情報伝達量が極めて大きいことは既に述べたが、機体制御自体は従来の操縦系で充分なため、そのみにサイココミュを使うのは過剰性能ともいえる。そこでジオン公国軍では、サイココミュを介して遠隔操作できる攻撃端末の実用化を目指した。通常の操縦方法では機動兵器を操縦しながらほかの機器を操縦することは困難だが、サイココミュ特有の情報伝達量はそれを可能とした。ただし、サイココミュ制御式攻撃端末の技術が発展途上だったため、メガ粒子砲はブラウ・プロ本体とケーブルで接続され、必要に応じて射出、回収される。このケーブルには、



中央モジュール

それほど大型の熱核反応炉が必要とされた理由は、4基搭載されたメガ粒子砲が在来タイプの流用した大型モデルだったためだが、このメガ粒子砲こそがブラウ・プロの特徴的な装備となっていた。

ブラウ・プロのメガ粒子砲4基は、サイココミュを介して制御されるリモコン攻撃機とい

能やメガ粒子砲へのエネルギー供給機能が盛り込まれている。

このような機構のブラウ・プロで初めて「オールレンジ攻撃」が可能となった。

オールレンジ攻撃とは、複数のサイコミュ制御式攻撃端末で敵機を取り囲み、様々な方向から同時攻撃を仕掛ける戦法である。

もちろん複数機のMSがコンビネーション攻撃を行えば、多方向からの同時攻撃が可能となる。しかし、攻撃を成立させるには高度な連携と、何よりも多くのMSとそれを操るパイロットが必要となる。しかし、ブラウ・プロなら1機で4方向からの同時攻撃が可能であるうえ、パイロットもひとりで済む。しかも、サイコミュ制御式の攻撃端末は比較的小さいため、発見されにくく、奇襲攻撃になることが多くなる。当然、思わぬ方向からの同時攻撃は熟練パイロットでも回避が難しく、これらの特性こそが、ブラウ・プロの戦闘能力を極めて高いものにしていたのである。

ただし、パイロットであるニュータイプの確保が難しいこともあって、ブラウ・プロは一般パイロットでの運用も可能とされていた。

非ニュータイプのパイロットで運用される場合は、一般パイロット専用のコクピットに複数の要員が搭乗し、操縦手と砲手に分担される（砲手はふたり以上でもいい）。また、ニュータイプ搭乗時ほど自由なオールレンジ攻撃は無理だが、マニュアル操縦による遠隔攻撃は可能であった。

このように独特の兵装形態を持つブラウ・プロは、機体構造も特徴的だった。

希少なニュータイプが生還率を高めるため、右、中央、左の3モジュールへと分離が可能になっているのである（ブラウ・プロに限らず、ジオン公国軍のニュータイプ専用機は、パイロットの生還率向上のために脱出機構を重視している）。特に、ニュータイプ専用コクピットが配置されている中央モジュールは、左右のモジュールに挟まれているため被弾率も低く、生存性が高くなっている。

黎明期のニュータイプ用機動兵器であるため、極めて大型となってしまったブラウ・プロだが、ニュータイプ用としての基本性能と機器は有しており、後に開発されるニュータイプ専用機動兵器に多大な影響を与えた。

## MAN・08 エルメスの開発と構造

MAN・08 エルメスは、ブラウ・プロなどでは有線制御式だった攻撃端末を、無線制御式へと発展させたニュータイプ専用MAで、生産数は3機といわれる。

無線制御式攻撃端末の操作を行うサイコミュが大型だったこと、非使用時の攻撃端末を収容するスペースを確保するために、機体型式はサイズの制約が少ないMAが採用された（「モビルアーマー・プロジェクト」の中で開発されたともいわれている）。



ビーム砲を発射するエルメスのビット。  
初めて実用化された無線誘導式攻撃  
端末で、以降のサイコミュ兵器開発  
に大きな影響を与えた。



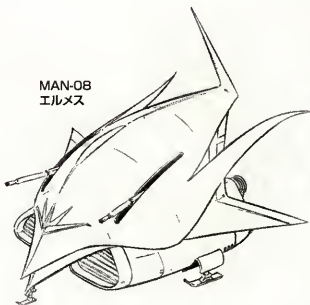
れた。熱核反応炉とビーム砲、ス  
ラスタールと全周囲対応の姿勢制御  
バーニア、そしてモノアイ形式の  
光学センサーを搭載した構造は、  
超小型無人MAともいえるもの  
で、有線制御式以上のコントロー

大型MAとして知られるMA・08 ビグ・ザム  
の全高を大きく超える前後長を持つこともあり、  
ブラウ・プロと同じくAMBACシステムは搭載  
していない。このためエルメスでは、姿勢制御補  
助用の機体安定ジャイロを、機体内部に搭載して  
いたといわれている。

また、ブラウ・プロでもそうだったように、コ  
クビット正面は透過性素材の「窓」となってお  
り、技術系譜上の繋がりを感ぜさせる。

エルメスが装備する無線攻撃端末「ビット」  
は、全長8.4mの攻撃ポッドで、12基が搭載さ

MAN-08  
エルメス



全高：85.4m（全長：47.7m）  
本体重量：163.7t  
ジェネレーター出力：14,200kW  
スラスタール推力：645,200kg  
装甲材質：不明  
兵装：メガ粒子砲×2／ビット×12

ル範囲を持つことは当然のこと、光学センサーで捉えた情報をエルメスのパイロットにフィードバックする能力も持っている。

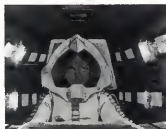
しかしここで、無線での制御はミノフスキー粒子の影響を受けるため、操作不能に陥るのではないかと、という疑問が生じる。

この問題を解決させたものが、ミノフスキー粒子を媒介とする「ミノフスキー通信」であった。

感応波がミノフスキー通信を安定化させることは既に述べたが、エルメスのサイココミュはこの特性を最大限に活用していた。

エルメスに搭載されたサイココミュは、パイロットの感応波を電氣的に増幅、発振するもので、機体の周囲に強力なミノフスキー通信網を形成した。ビットにもミノフスキー通信の送受信機が備えられたため、エルメスからのビットの制御と、ビットからのデータのフィードバックが可能だったのである。

感応波の増幅発振とミノフスキー通信網の形成は、パイロットの認識能力を拡大したが、周辺に



ララァ・スンが搭乗したエルメスのコックビット。奥行きがあり、壁面にはサイココミュ・システムと思われる計器が並んでいる。



MAN-08 エルメスのコックビット



サイココミュ搭載機用ノーマルスーツ



ビットが特にクローズアップされるが、本体にも2門のメガ粒子砲が装備されており、MAとしてある程度の戦闘力は確保している。

強力な感応波を発振する人物が存在した場合、共振現象を引き起こすという問題があった。これにより、エルメスやビットの存在が敵に露見する確率が高くなるだけでなく、ニュータイプの特長から敵味方同士で理解し合うことで戦闘意欲を喪失する可能性もあったのである。

また、12基もののビットの無線操作とそこからのフィードバックといった総合的情報処理には、極めて高度なニュータイプ能力を必要としていたため、適応者を見つけ出すことと自体が難しいのも問題だった。

それでもビットの搭載が画期的だったことは間違いない。また、同時期に完成した他のサイコミュ搭載機が、一般パイロットでの運用も考慮した「半ニュータイプ用」だったのに対して、エルメスは完全な「ニュータイプ専用」だったことも高く評価されている。

サイコミュの性能に反して、エルメス本体は極めてシンプルな構造を採用していた。

エルメス自体は大型の宇宙戦闘機といえるほど簡素な機体であり、固定武装も2門のメガ粒子砲を装備するだけであった。エルメスがあまりに大型の機体となったことや、ビットの運用に特化していたことなどが、その理由として考えられる。



コクピットも極めてシンプルだが、これは操縦や火器管制の大半をサイコミュで行っていたためといわれており、ここにもニュータイプ専用機として特化したエルメスの一面が窺える。

## MSN・02 ジオングの開発

MSN・02 ジオングは、最初期のサイコミュ搭載MSであると共に、ジオン公国軍が事実上最後に投入したMSだった。「ジオン」の名を冠されたことから分かるように、極のMSを目指して開発されたことは間違いない。

ジオングの開発は、無線制御式攻撃端末を装備したニュータイプ用大型MS、MSN・16Xとしてスタートした。その後、基本的な仕様が決定されるとともに、試験機によるデータ収集が

MSN-02  
ジオング



頭頂高：17.3m

本体重量：151.2t（全備重量：231.91t）

ジェネレーター出力：9,400kW

スラスター推力：187,000kg

装甲材質：超硬スチール合金

兵装：頭部メガ粒子砲／

腕部有線式5連装メガ粒子砲×2／腰部メガ粒子砲×2

MS以前の兵器

MSの誕生

MSの実践運用

局地戦用MSの  
開発次期主力MSの  
開発ニュータイプ  
専用機の開発

MAの開発

行われている。

サイコミュとビーム兵器を中心としたデータ収集に用いられた機体が、先行して開発されたMAN・03ブラウ・プロと中型の宇宙戦闘機、そして要求仕様を可能な限り再現したザクⅡF型の改造機、MS・06Zサイコミュ・システム試験用ザクだった。

月面基地グラナダにおいて開発が進められ、ブラウ・プロ完成の10日後にロールアウトしたサイコミュ・システム試験用ザクは、3機が製造されて「ビショップ計画」と呼ばれるテストに用いられた。しかし、その中でいくつかの問題が浮上する。

サイコミュ・システム試験用ザクは機動性を重視したMSだったが、それでも高機動レールでのテスト（特にゼロレンジでの攻撃データ収集）が難しかったのである。

これを解決するため、脚部を大推力熱核ロケット・エンジンに換装したMSN・01サイコミュ・システム高機動試験機（サイコミュ・システム試験用ザクの2号機を改修）も試作されたが、根本的な解決にはならなかった。さらに、機動戦時におけるメガ粒子砲の性能不足や少ないプロペラント量も問題であり、ザクⅡをベースとした開発は限界を迎えていたのである。

それでも「ビショップ計画」はジオングの開発に一定の方向性を与えた。機体をMSN・02として新設計すること、攻撃端末を無線制御式から有線制御式とすること、そして一般のパイロットでも運用可能とすることである。

機体を7つに分割し、無線制御によるオールレンジ攻撃を行う案などは、この段階で立ち消えになったようである。

また、脚部搭載の第1試案（いわゆる「バーフェクト・ジオング」と、脚部の代わりに推進器を内装する第2試案が検討されていたが、サイコミュ・システム高機動試験機のデータもあつて第2試案が優先された。

しかし、より高度なサイコミュを持つエルメスが完成したことにより、ジオングの開発は縮小され、プロジェクト・チームもア・バオア・クーへと移されてしまった。

この後、ジオングは、ア・バオア・クーにおいて3機が建造されたほか、第1試案に対応した脚部も開発されたのである。

## ジオングの構造と兵装

脚部のない第2試案を採用して完成したジオングだが、それでも全高は一般的MSとほぼ同じで、全備重量に至っては3倍以上に達していた。また、第1試案の全高は35mに達しており、MA的な機体であった。

ジオングが大型化した原因は、サイコミュの小型化が進んでいなかったことにある。

また、手持ち兵装がなく内装火器中心なことから、ジオングのMA的特性が理解でき



腕部メガ粒子砲を射出するジオング。誘導範囲が限られる有線式だが、無線誘導式に比べてより実戦的だったといえる。



腰部メガ粒子砲は射界が狭いという欠点はあるものの、ア・バオア・クーの外壁を削るほどの威力を有していた。



腕部有線式メガ粒子砲

る（第1試案用に大型の実体刃式サーベルが用意されていたともいわれる）。

計13門もの内装メガ粒子砲——すべてキア社のM・33Eをベースとしたもの——の内、10門は指部に搭載されて

いる。つまり、すべての指がメガ粒子砲となっているのである。しかも前腕部が攻撃端末となるため、オールレンジ攻撃時にも優れた火力を発揮できる。前腕と上腕を接続するケーブルは全長数kmにも及び、端末誘導範囲が広がっている点も特徴といえる。また、指部の可動域を利用することで、それぞれ別個のターゲットを攻撃することも可能となっており、多目標対処能力にも秀でている。

コクピットが配置された頭部は、脱出用の小型宇宙艇ともなっている。また、口吻部のメガ粒子砲や側部に伸びたサイコミュー送受信用のホーンアンテナ、そして自走能力からもわかるように、無線制御式攻撃端末としての機能も有していた。

コクピットを持った頭部がサイコミュー制御の攻撃端末となった理由のひとつに、胴体にもコクピットが存在することが挙げられる。つまり、ジオングは頭部と胴体にコクピット

を持つ複座機なのである。これはブラウ・プロと同様のギミックで、ニュータイプでないパイロットが搭乗する際に操縦手と砲手に分担するためであった。ニュータイプが搭乗する際には、どちらのコクピットからでもコントロールできるが、頭部を脱出機構と捉えるなら、メイン・コクピットは頭部と考えるのが妥当である。

胴体にはコクピットとサイコミュ本体のほか、メガ粒子砲と大推力推進器群を稼働させるための大出力熱核反応炉が搭載された。

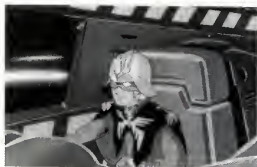
ドムやゲルググに似たスカート内には、2基のメイン・スラスターと5基のサブ・スラスターが配置されている。胸部と背部のサブ・スラスター4基と組み合わせることで爆発的な推進力を発揮する。

ア・バオア・クー

戦時の「80%の完成度」の理由に脚部の未装備が挙げられるが、第2試案としては完成形で空間戦能力に問題はなかった。



胴体側コクピットは胸部中央にハッチが位置している。シャッパ・アズナブル大佐は出撃の際にこちらのハッチから機体に乗込んでいる。



頭部コクピットでジオングを操縦するシャッパ・アズナブル大佐。壁面に配置された回路など、構造はエルメスのコクピットに近い。

## フラナガン機関

ジオン公国軍において、ニュータイプの軍事転用と戦力化を担った組織が、ユダヤ系サイド6市民のフラナガン博士が主宰を務めた、フラナガン機関であった。

一年戦争中のU・C・0079・06、サイド6のバルダ・コロニー（リサ・コロニーともいわれる）において、ジオン公国軍嘱託の民間研究機関として設立されたフラナガン機関は、キシリア・ザビ少将の直轄組織として、軍事利用を含むニュータイプの総合的研究を進めた。当然、ジオン公国軍の関与は伏せられ、研究は極秘で行われた。

それ以前から人間の潜在能力を研究していたフラナガン博士は、ジオン公国軍の援助を受けるとニュータイプの研究を拡大し、感応波の発見やサイコミュの実用化、ニュータイプの選別や調整などに貢献した。特にサイコミュの基礎理論の確立と実用化は、フラナガン博士が手掛けたものだった。

このほかにもあまり知られていないが、強化人間の研究も行っている。強化人間の研究は、一年戦争後に設立された地球連邦軍系ニュータイプ研究所（ムラサメ研究所やオーガスタ研究所）で行われたものが有名だが、フラナガン機関でも同様の処置が採られており、外科手術によるニュータイプ能力の強化も試されていた。

またクルスト・モーゼス博士によって、ニュータイプの戦闘能力をコンピューターで再



フラナガン機関で行われた強化人間研究の一例。投薬や外科手術によるニュータイプ能力の開発が試みられたといわれている。



身寄りのない戦災孤児が研究対象になったとされ、失敗と判断された被験体は抹消処分を受けて半ば放棄された状態だったという。



戦後に独自のニュータイプ研究が進められたネオ・ジオンでは、クローニングを利用した強化人間の開発が行われていた。

現した「EXAMシステム」が開発されたともいわれている。

こうして、終戦までの約半年でニュータイプ関連技術の基礎を完成させたフラナガン機関だったが、終戦に伴い地球連邦軍によって解体されている。しかし、その技術やデータは小惑星基地アクシズに持ち出され、アクシズ（ネオ・ジオン）のニュータイプ用機動兵器開発や強化人間創出に用いられた。これ以外にも、ジオン共和国に潜伏したメンバーによって研究が続けられたともいわれている。

また、地球連邦軍に資料が接収されたこともあって、ニュータイプ技術は拡散していくことになったのである。



フラナガン博士

## 一騎当千のスペックを持ちながらも 対MS格闘戦に悩まされたニュータイプ専用機

### ガンダムとの一騎打ちに敗れたブラウ・ブロ

3機が試作されたというブラウ・ブロは、MS・16X（後のジオング）開発用のデータ収集に用いられた。

U.C. 0079. 12中旬、非ニュータイプの技術士官のシムス・アル・バハロフ中尉とコワル少尉によつてテストされた1機は、アムロ・レイのガンダムと戦闘状態に入った。シムス中尉のブラウ・ブロは、機関の不調からサイド6近くのデブリに隠れていた。このため、本来なら哨戒中のガンダムをやり過ぎるはずだったが、コワル少尉の発砲が原因で発見され、攻撃を受けたといわれる。この際、手動によるオールレンジ攻撃が試みられたが、命中はしなかった。元々戦闘要員ではないシムス中尉らはガンダムの攻撃を受けると、左部モジュールを切り離して戦域を離脱したのだった。

ブラウ・ブロによる2度目の戦闘では、木星資源船団に所属



シムス・  
バハロフ中尉

シャリア・ブル大尉





オールレンジ攻撃をかいくぐったガンダムに接近戦に持ち込まれた結果、ビーム・サーベルを受けて撃破された。



ガンダムに対してオールレンジ攻撃を仕掛けたが、ニュータイプ能力に覚醒したアムロにその悪くを回避される。

していたニュータイプ、シャリア・ブル大尉が搭乗した（シムス中尉も同乗している）。この機体が、先の遭遇戦で損傷した機体か、別の機体かは不明である。

ソロモン戦直後の12月下旬、シャリア大尉用に調整されたブラウ・ブロは、再びアムロ・レイのガンダムと交戦し、オールレンジ攻撃を駆使してこれを追い詰めたが、近距離戦闘に持ち込まれ撃破された。なおこの戦闘で、シャリア大尉とシムス中尉は戦死した。これらのケースでのブラウ・ブロの敗因は、MSと一騎打ちを演じてしまったことや、性能を十全に活かせない非ニュータイプのパイロットが搭乗したことを考えられる。

戦争において高い能力を持つ個人同士を戦わせるといふ発想は、敗北の際の損失があまりに大きい、突出した戦闘力を持つニュータイプの出現は、これを強いることとなった。

ブラウ・ブロの敗因は、近接戦闘を苦手とするMAの傾向や、個人的な力量の差だけでなく、ニュータイプ同士の一騎討ちが発生する、宇宙世紀の戦争形態にもあるともいえる。

これ以外にも、突撃起動軍第12部隊グラナダ特戦隊がグラナダ宙域防衛時にブラウ・ブロを使用したといわれているが、この際のパイロットは非ニュータイプであり、ブラウ・ブロも失われたとされる。

## 無線制御式攻撃端末ビットの威力を証明したエルメス

試作された3機のエルメスの内、1号機は暴走したビットの攻撃を受けて失われたが、2号機は高度なニュータイプ能力を持つララァ・スン少尉に任され、実戦に投入された。

ソロモン戦直後のU・C・0079・12・25、突撃機動軍独立第300戦隊所属のララァ少尉機は、コンペイトウ（ソロモン）に数基のビットによる攻撃を実施している。この攻撃は遠距離から行われたが、ビットは地球連邦軍艦艇とMSを撃破し、サイコミュと無線制御式攻撃端末の威力を実証した。ただし、遠距離からのビット制御はララァ少尉に著しい負担を与えたため、以降はビットの到達距離を短くする戦術が採られている。

エルメスによる攻撃は2回（3回ともいわれる）行われたが、ビットの存在を知らない地球連邦軍は状況を把握できず、「ソロモンの亡霊」と呼んで恐れることになった。

なお、コンペイトウへのエルメス接近の際、何人かの地球



エルメスはガンダムとの交戦においてもビットを展開してオールレンジ攻撃を行ったが、動きを読まれてすべて撃破されている。



エルメスのビットによって撃沈されるサラミス。コンペイトウの地球連邦軍にとって、この攻撃はまさに寝耳に水の事態であった。



ガンダムのビーム・サーベルの直撃をコックピットに受けてラ  
ァ・スンが戦死、エルメスも撃破された。



アムロ・レイとラァ・スンの共振は、一年戦争における代  
表的なニュータイプ能力の現出例と見做される。



ラァ・スン少尉

連邦軍将兵が「ラ・ラ」という正体不明の音を聞いているが、これはエルメスのサイコミュで増幅された、ラァ少尉の感応波の影響と思われる。

12月30日には、シャア・アズナブル大佐のゲルググ先行量産型と共に出撃し、アムロ・レイのガンダムおよびセイラ・マスのコア・ブースター（Gファイターともいわれる）と交戦している。

シャア大佐との連携や、ビットによる遠距離攻撃ができなかったため、近距離戦を強いられたエルメスは、ビットでガンダムを包囲したが次々と迎撃されてしまった。さらに、シャア大佐機を庇いガンダムのビーム・サーベルに貫かれて、撃墜されたのである。

この戦闘中、あるいはエルメス撃墜の瞬間、アムロとラァ少尉の間に共振現象が発生して

いるが、これも周囲の感応波を送受信するサイココミュの特性と、ふたりの高度なニュータイプ能力によるものと考えられる。

なおエルメスによるラファ少尉の撃墜スコアは、艦艇7隻、MS6機だった。

残されたエルメス3号機は、クスコ・アル少尉によって運用されたという説もあるが、真偽のほどは定かではない。

エルメスは、自由度や到達距離などの面で有線式を超えるオールレンジ攻撃の性能を示した一方、巨大な機体に困る近接格闘能力の欠如が弱点として露呈した。つまり、攻撃兵器としては優れているが、ニュータイプが操るMSとの近距離戦闘には適していなかったのである。

このような対MS戦闘能力の不足が、一年戦争後のアクシズにおいて、無線式攻撃端末装備MSのAMX・004キュベレイが開発される一因となった。

## MA的運用に特化していたジオング

サイココミュ・システム高機動試験機はコンペイトウ（旧ソロモン）への攻撃に、サイコミュ・システム試験用ザクがア・バオア・クー戦に投入された。ア・バオア・クー内で3機生産されたジオングは、その1号機がシャア・アズナブル大佐によって運用された。

シヤア大佐にジオングを勧めたのはキシリア・ザビ少将で、アムロ・レイのガンダムに対する処置であった。この際ジオングを見たシヤア大佐が、担当技師に「脚は付いていないのか？」と訊ねたのは有名なエピソードである。

だが、シヤア大佐のジオングは脚部の代わりにスラスタを搭載した、第2試案に則ったタイプであり、技師がいう通り「現状でジオングの性能は100%」だった（完成度が80%という話は、上腕部装甲の未装備などを指しているといわれる）。

なお、ア・バオア・クー戦でジオングに搭乗したシヤア大佐は、

シヤアは自身のニュータイプの素質に懐疑的だったものの、最初の接敵で腕部メガ粒子砲を用いてマゼランを撃沈するなど、能力の片鱗を示していった。

開発技師からジオングの説明を受けるシヤア・アズナブル。サイコミュが自分に使えるか懐疑的なシヤアに対し、技師は保証などできないと答えたという。



ジオングのメガ粒子砲の直撃を受けて撃沈されるマゼラン。戦艦クラスの艦艇を一撃で沈めるほどの火力は、技師の言葉を裏付けるものであったといえる。

シヤアが搭乗したジオングは第34MS隊の先陣を切ってSフィールドの防衛にあたり、敵の先斉射を迂回して地球連邦軍艦隊に肉薄した。

サイコミュの影響によりニュータイプ能力が拡大していた。

ア・バオア・クーのSフィールドに投入されたジオングは、腕部メガ粒子砲を中心とした火器を駆使し艦艇4隻、MS18機もの撃墜スコアを達成したといわれる。

こうした前哨戦の後、ガンダムと対峙したジオングは、オー

ルレンジ攻撃を行ったがそれを回避され、懷に潜り込まれてしまった。通常のMSであれば格闘兵装を用いた格闘戦への移行や、四肢を用いた攻撃などで間合いを取るが、ジオングにはそのどちらも不可能だった。MSでありながらMA的な運用に特化したジオングには、格闘兵装もキックをするための脚部もなく、対MSの白兵格闘戦には対応していなかったのである。それでも多数のメガ粒子砲や頭部脱出システムなどの機構、そしてシャア大佐の技量によって、ガンダムと相打ちを果たすのだった。

こうしてシャア大佐の1号機は失われ、残りの2機と開発されていた脚部も、ア・バオ



ガンダムに懷に飛び込まれてオールレンジ攻撃を封じられたジオングは、徐々に劣勢に追い込まれていった。



両腕部を失ったうえに腰部メガ粒子砲も回避されたジオングは、胴体部にビーム・ライフルの直撃を受ける。



ア・バオア・クー要塞内部に逃げ込み、不意打ちでガンダムを行動不能に陥れて相打ちとなった。

ア・バオア・クー要塞内部に逃げ込み、不意打ちでガンダムを行動不能に陥れて相打ちとなった。

ア・クー内で焼失したといわれている。だが、U・C・0080年代前半にジオン公国軍残党が脚付きの「パーフェクト・ジオング」を運用したという報告もなされている。しかも、そのパイロットはシャア大佐本人だったともいわれており、今後の調査が待たれるところだ。

サイコミュの装備と有線制御式メガ粒子砲、絶大なパワーと推進力により、突出した性能を獲得していたジオングが、ガンダム相手に苦戦した理由は、先に散ったブラウ・ブロやエルメスと同じく、格闘戦能力をもたなかったことであつた。

これは、占有スペースが大きいサイコミュと火力の増強により、機体

MS以前の兵器

MSの誕生

MSの実戦運用

局地戦用MSの  
開発次期主力MSの  
開発ニュータイプ  
専用機の開発

MAの開発

を大型化（MA化）させざるを得なかったジオン公国軍のニュータイプ専用機の欠点であった。もちろん駆逐兵器としての絶大な威力を誇り、宇宙艦艇や一般的パイロットが搭乘したMSが相手であれば、無敵といつていいほどの性能を持つのは間違いない。

しかし、ニュータイプにニュータイプで対抗するという発想で投入したにも拘らず、自軍のニュータイプに与えたのが戦闘兵器ではなく攻撃／駆逐兵器であったことは、ジオン公国軍の采配ミス以外の何物でもない。

こうしてジオングも、一年戦争当時の技術的な問題や投入形態を見誤ったために、十全な力を発揮することはなかった。これに加え、ニュータイプの決定的不足と、ジオングを含めたニュータイプ専用機の配備数が少ないことも、問題に拍車をかけている。

これらの反省を踏まえて、アクシズ（ネオ・ジオン）では18m級MSへのサイコミュ搭載や、強化処置およびクローンによるニュータイプの確保が模索された。

特にアクシズは複数の強化人間を戦場に投入したことが知られており、その多くが高い戦果を挙げたといわれる。しかし、強化措置によって情緒面での不安定さや記憶の混乱、性格の変貌などの症状が見られた者も存在したことから、その技術が未完成であったことが窺い知れる。また、ニュータイプ専用機も小型化が進み、クローンによって生み出された強化人間（ニュータイプ）との組み合わせによって、第1次ネオ・ジオン戦争後期にはニュータイプ部隊すら編成されていた。





## 新たなサイコミュ搭載式機動兵器の誕生

一年戦争が終結すると、ジオン公国軍が独占していたニュータイプ関連技術は、様々な組織へと拡散した。

アクシズに代表されるジオン公国軍残党が、高度なニュータイプ関連技術を持ち続けていたことは確かである。しかし、地球連邦軍もフラナガン機関解体時に関連テクノロジーを入手しており、強化人間や一般用サイコミュのように、地球連邦軍製のニュータイプ関連技術も生み出された。

地球連邦軍はニュータイプ関連技術を秘匿したが、その概念を知ったアナハイム・エレクトロニクス社などの民間企業も、パイオ・センサーに代表される簡易サイコミュを開発している。このように、サイコミュを中心とした関連技術は時代を追うごとに多様化していったのである。

これらの技術拡散によって、U.C. 0080年代後半になるとニュータイプ用機動兵器が新たな姿を見せるようになった。サイコミュの小型化を成功させたアクシズは、通常サイズのM



パイオ・センサーを搭載したMSZ-010 ZZガンダムは、第1次ネオ・ジオン戦争の最終局面でその性能を発揮した。



AMX-004 キュレレイ



MRX-009 サイコ・ガンダム

Sにエルメスと同等の機能を盛り込んだAMX・004 キュベレイを完成させた。

ムラサメ研究所やオーガスタ研究所を設立し、強化人間と専用

マシンの開発を進めた地球連邦軍も、40m級の強化人間用可変MA、MRX・009 サイコ・ガンダムを試作しており、ニュータイプ用機動兵器の戦闘能力は著しく向上していった。

こうして拡散していたニュータイプ関連技術だが、各組織での発展を経て、グリプス戦役を発端とする戦乱の中で再び融合していく。

そして、サイコ・ガンダム系技術を採り入れたAMX・004・2(3) キュベレイ Mk・IIやNZ・000 クィン・マンサ、AMX・014 ドーベン・ウルフといった、新たなサイコミュ搭載MSを生み出すこととなったのである。

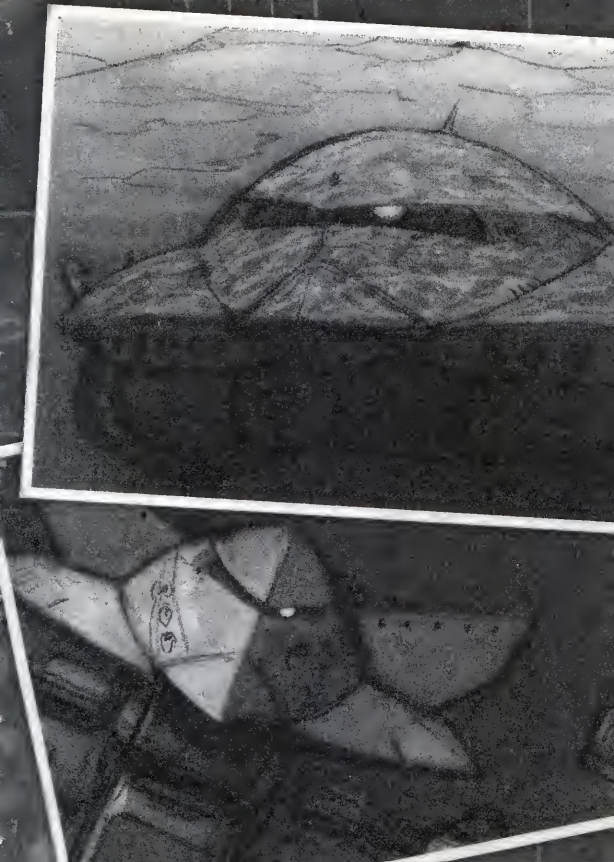
AMX-014 ドーベン・ウルフ



NZ-000 クィン・マンサ



ネオ・ジオンはAMX-004G 量産型キュベレイでサイコミュ搭載機の量産を実現し、技術力の高さを示した。



MS以前の兵器

MSの誕生

MSの実戦運用

局地戦用MSの  
開発

次期主力MSの  
開発

ニュータイプ  
専用機の開発

MAの開発



## 第七章

# もうひとつの機動兵器

～MAの開発～

## モビルアーマーの開発

### 競争試作に敗れたMIP・X1

MSを生み出す契機となった、U・C・0071のミノフスキー粒子対応兵器の開発と試作競争には、複数のジオン公国系企業が参加した。

そうした企業のひとつに人間が搭乗する特殊環境向けロボットを専門とする、MIP社があった。MIP社が得意とした「ロボット」は宇宙重機の類だったといわれ、その技術を投入して開発されたミノフスキー粒子散布環境下対応兵器の試作機が「MIP・X1」であった。

MIP・X1は、宇宙戦闘機の発展形といっている機器だったが、外惑星資源開発用ボットの外観も持っていたといわれることから、有視界戦闘をまったく無視したものではなかったと推測される。また、スペース・コロニー内での移動用にホバー・クラフトも搭載していたといわれる。

試作競争に参加したMIP・X1は、ZEONIC社のZI・XA3に敗れるが、それはMIP・X1が失敗作だった訳ではなく、ZI・XA3が革新的過ぎた故である。人型ロボットのZI・XA3は、運用性や汎用性、機動性などあらゆる面でMIP・X1を上

回る総合評価を獲得した。この結果、Z I・X A 3には「モビルスーツ」の呼称とMS・01の型式番号が与えられ、ミノフスキー粒子対応兵器の雛形となる。このように、M I P・X 1の敗因は、汎用性や重力下対応能力などが欠けていた点にあったのだ。

## M I P・X 1の発展可能性とM Aの登場

試作競争に敗れたM I P・X 1だったが、宇宙での機動性（移動速度や加速力）は高い評価を得ていた。ここに可能性を見出したジオン公国軍は、M I P・X 1をベースとした新型機動兵器の開発を指示したのである。

M I P・X 1の改良に際してジオン公国軍は、A M B A Cシステムの追加による姿勢制御能力と攻撃力の強化を求めた。ただし、M Sのような四肢ユニット型のA M B A Cシステムでは、M Sとの差別化が図れないため、一対の簡易マニピュレーターを搭載することとし、攻撃力の強化は宇宙艦艇の主砲に採用されていたが当時のM Sでは搭載できなかった、メガ粒子砲によって達成されることになっていた。

しかし、当時の技術力ではメガ粒子砲の小型化は難しく、大出力熱核反応炉を搭載する必要もあり、M S以上的大型化は避けられなかった。もともと、大型化は装甲強化を容易とするため、軍もそれを了承したようである。

こうして誕生した機動兵器のカテゴリーが、モビルアーマーであった。

モビルアーマー(MA)とは、Mobile A.R.M.O.U.R.(=All Range Maneuverability Offence Utility Reinforcement)の略で、全領域汎用支援火器を意味している。

しかし、ジオン公国軍が本当にMAを必要としていたかという点には疑問が残る。なぜなら、当初のザク・シリーズは、核バズーカの装備を前提としたため、MAに求められた攻撃力という項目をこの時点でクリアしていたのである。

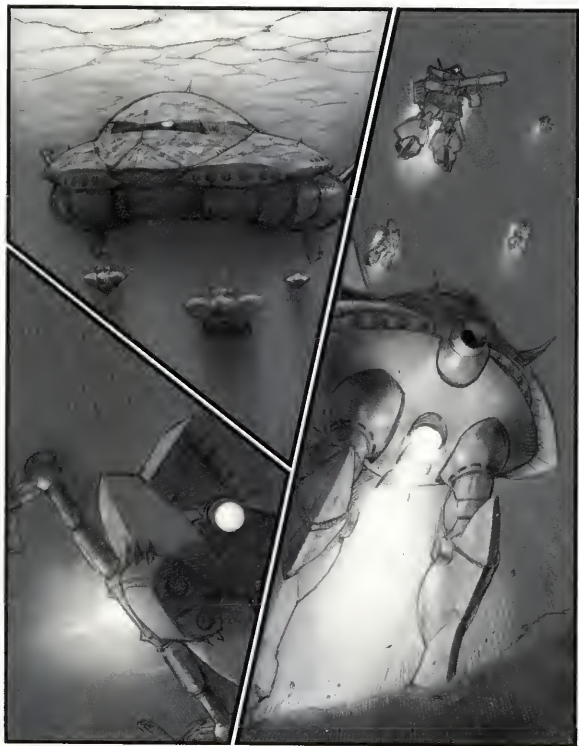
## 南極条約締結とMAの必要性の向上

しかし、一年戦争初期、NBC兵器の使用を禁じた南極条約が締結されたことで、MAの必要性は一気に高まることとなった。

水陸両用MSを除けば、MSへのメガ粒子砲搭載の目途が立っていなかった当時、宇宙艦艇級のメガ粒子砲を装備するMAは、最強の機動兵器と考えられた。

火力こそが戦場を制するという発想に立てば、MAほど適切な兵器はなかった。こうして、局地戦用MSや新型主力MSの開発と共に、MAの研究開発も裾野を拡げていった。しかし、その結果、MAの開発は無秩序に近い状態に陥っていた。さらにそれに気付き、対処に乗り出す者がいなかったことも、その状況に拍車をかけることとなった。





# モビルダイバーシステム

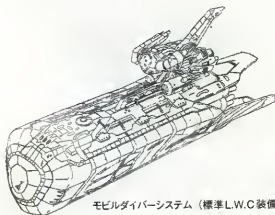
MAには分類されないが、MAに近い構造や機能を持つ機動兵器も存在する。そのひとつが、ジオン公国軍のモビルダイバーシステムである。

モビルダイバーシステムは「大気圏再突入式攻撃機構」と呼べるもので、宇宙から大気圏内へ降下、滑空しながら目標への攻撃を行う空戦兵器だった。

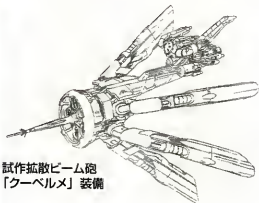
システムの管制と機動力を司る中央モジュール「ダイブマヌーバー・ユニット」と、その数倍の規模を持つ大気圏再突入式ウェポンコンテナ「L.W.C. (Logistic Weapon Container / H.L.V.の一種)」から構成されている点が、構造上の特徴とされる。つまり、機動兵器本体より兵装システムの方が圧倒的に大きいのである。

一年戦争末期、MSM・07ズゴックをベースとしたダイブマヌーバー・ユニットの「MSM・07D i ゼーゴック」と、L.W.C.の改修によって完成した「モビルダイバーシステム」は、評価試験の

大気圏突入中のモビルダイバーシステム。これは再突入能力を有するL.W.C.に管制能力を付与した急造兵器で、当時のジオン公国軍の窮状を物語っている。

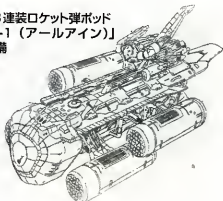


モビルダイバーシステム (標準L.W.C.装備)



試作拡散ビーム砲  
「クーベルメ」装備

28連装ロケット弾ポッド  
「R-1（アールアイン）」  
装備



名目で「モビルタイプ作戦（軌道邀撃作戦）」に投入された。これは、ジャブローから打ち上げられる地球連邦軍宇宙艦隊の迎撃を目的とした作戦だった。オデッサ戦での勝利を契機に攻勢を強めていた、地球連邦軍への対抗処置であつた。

宇宙への地球連邦軍展開を水際で阻止するという作戦内容、そして何よりも、地球からの撤退で不要になった大気圏内用装備や試作機器で急造されたモビルタイプシステムそのものが、ジオン公国軍の劣勢を物語っていた。

タイプマヌーバー・ユニットのベースにズコックが選ばれたのも、水陸両用MSならではの大大パワーや耐圧分割構造による改修が容易であるだけではなく、戦線の後退で使い道がなくなり、使い捨てにできる点が最大の理由だったのである。

モビルタイプ作戦においてモビルタイプシステムは、大型ミサイルや多連装ロケット弾を用いた敵艦隊への邀撃を行うものの失敗。その後、試作拡散ビーム砲「クーベルメ」で上昇中の宇宙艦艇5隻を撃沈するという戦果を挙げたが、パイロットの未帰還となり、技術士官の上申により作戦は中止された。

## フォーマット不在で行われた MAの開発

### 混乱するMAの定義と開発系譜

MAはメガ粒子砲を搭載した宇宙用重戦闘機に、AMBACシステムを追加した機動兵器として開発が進められたが、このフォーマットを逸脱した機体が登場しはじめた。この結果、MAにはMSのような統一したフォーマットは存在しなくなってしまった。

MS・01から順次派生していったMSと異なり、MAには統一的な開発系譜が存在しないことも、フォーマットが設定されなかった理由とされる。しかし、この裏には特定の領域に特化して開発が進められたMAならではの背景があった。これは「全領域汎用支援火器」というMAのコンセプトを否定しかねないものだった。

それに加え、大気圏内外両用のMAが試作されたことも「MAとは何か?」という問いに、明確な答えを出せない原因となっていた。この問いにあえて答えるのであれば、MAとは「ミノフスキー理論応用兵器体系を用いた大火力機動兵器の総称」といえるだろう。



オッゴの前線支援を主眼に置いたビッグ・ラングは他のMAと機能が大きく異なっているが、広義的にはMAに分類されている。

確かに当初は、大火力、高機動性のAMBACシステム付き重機動兵器が、MAとして開発されており、これを狭義のMAといっても間違いではない。しかしMAの開発が進展すると、AMBACシステムを持たないものや、機動性が低いものなど、狭義のMAにも含まれない機体が生み出されている。

しかも、頭頂高18〜20mの機体がほとんどのMSと異なり、MAにはサイズ上の規定がなく、「大型」という傾向が確認できるのみである。MSでは搭載不可能な大型デバイスや多数の火器内装などの装備が大型化の理由であり、MAのほとんどが宇宙用となった遠因ともなっている。

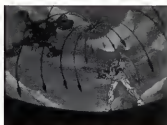
## MIIP・X1以外の系列機と、最初期型MAの試作

MIIP・X1の発展系以外の出自を持つMA的な機動兵器が存在したことも、MA開発を混乱させた一因であった。そのひとつが、MAへの過渡期的兵器として知られる「MAX・03 アッザム」である。

月面用戦闘車両G87 ルナタンクから派生したアッザムは、大気圏内用の浮遊砲台といえる兵器で、8基の2連装メガ粒子砲がもた



ザクレロは不完全ながらも実用レベルのメガ粒子砲の搭載に成功しており、MAのベースラインともいべきスタイルを提示していた。

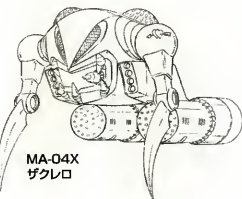


アッザムは実戦に投入され、ガンダムと交戦したともいわれている。その際には、アッザム・リーダーが運用されたとされる。

らす重火力と、低速ながらミノフスキー・クラフトによる飛行能力を有していた。決して高性能とはいえないミノフスキー・クラフトからも分かるように、実験的な機動兵器であり、拘束式電熱兵装のアッザム・リーダーにもその傾向が現れている。

そんな中、MIP・X1を始祖とするMAの開発も進み、最初期の宇宙用MAである「MA・04X ザクレロ」が試作された。ザクレロは、MIP・X1の改修機に求めら

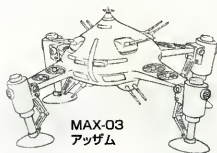
れた「AMBACシステム付き重装宇宙戦闘機」と



MA-04X  
ザクレロ

全高：不明  
本体重量：不明  
ジェネレーター出力：不明  
スラスター推力：不明  
装甲材質：不明  
兵装：ヒート・ナタ×2／拡散ビーム砲／  
8連装ミサイル・ランチャー

いう形態を実現した機動兵器で、武装として拡散ビーム砲とミサイル8基を持ち、AMBAC肢には格闘攻撃用のヒート・ナタが装備されていた。特に拡散ビーム砲は、射程こそ短いものの、広範囲にビームを照射するため命中率が高く、有視界戦闘用の火器として優れていた。重火力と高推力スラスターを活かした一撃離脱戦法を意図したザクレロであったが、



MAX-03  
アッザム

全高：24.0m  
本体重量：300t  
ジェネレーター出力：不明（約620,000kW）  
スラスター推力：不明  
装甲材質：不明  
兵装：2連装メガ粒子砲×8／アッザム・リーダー

射程と機動性に問題があると判断され、実戦テスト直前に破棄が決定した。

MSと比べて簡素な構造や、サイズ上の制限の少なさから簡単に思えたMAの開発だが、幾多の困難が横たわっていたのである。

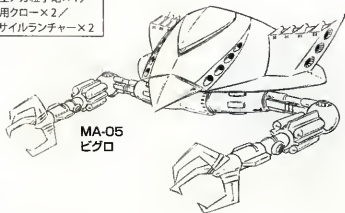
## MA・05 ビグロの開発と構造

ザクレロと同時期に開発されていたMIP・X1系の宇宙用MAが、「MA・05 ビグロ」である。キシリア・ザビ少将の主導による「第1期MA開発計画」に基づく機動兵器とされ、MIP社が開発を担当、グラナダで実働試験が行われたといわれる。

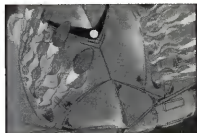
ビグロの構造はザクレロに近く、重武装・重装甲の大型ボディに一对のマニピュレーターを搭載し、メインカメラはモノアイを採用している。

武装は、機首部のジェネレーター直結・集束式メガ粒子砲、胴体部のミサイル8基、格闘攻撃用のクローで、戦闘形態もザクレロと同じく一撃離脱戦法だった。が、機動性と姿勢制御能力は決定的に異なっていた。

全高：45.5m  
本体重量：125.5t  
ジェネレーター出力：17800kW  
スラスタ推力：136100kg  
装甲材質：超硬スチール合金  
兵装：大型メガ粒子砲×1/  
近接戦闘用クロー×2/  
4連装ミサイルランチャー×2



MA-05  
ビグロ



Bigoの運用においては、ミサイルで弾幕を張りつつ、加速性能を活かした一撃離脱を行うという戦法が多用された。



機首部メガ粒子砲は、艦艇に装備されたものに匹敵するほどの威力と射程を誇った。

く評価されてMAとしては異例の12機（14機とも）が一年戦争末期に生産された。

## Bigoのバリエーション、および後発の系列機

一年戦争期のMAとしては最高レベルの完成度を誇ったBigoは、バリエーション機や設計を受け継いだ系列機を生み出している。その中でも直接的な発展機として知られる機体が、後期型のBigoである。

後期型はジェネレーター出力やスラスター推力が向上したほか、ガトリング砲2門（前部補助用と直上方向への対空防御用）が



MA-05Ad  
Bigo・ラング

2発のメイン・スラスターによる加速力は10G以上といわれ、巨大なAMBAC肢と多数の高機動バーニアの補助によって、1.3秒での180度姿勢変更を可能としており、その機動力はMSの比ではなかった。高機動ゆえにGが強烈で、パイロットを選ぶ機体となっていたが、総合性能が高





Adユニット内で補給を受けるオッゴ。ユニットの左右には兵装コンテナが並び、換装は作業アームで行われる。



装甲を展開したビッグ・ラングのAdユニット。内部はモビルポッドの簡易整備工場になっており、各種機材を備える。

追加されるなど、総合性能強化仕様であった。主火器のメガ粒子砲も大幅に強化され、射程や威力、連続照射時間などほぼすべての点で、初期生産型を上回っていた。この後期型のビッグロは、一年戦争末期にモビル・フロントヘッド（機動前線橋頭堡）のコンセプトで開発された「M

A・05 Ad ビッグ・ラング」に流用されている。開発は、ジオン公国軍の技術本部が担当し、生産ラインにあったビッグロ6号機が用いられた。

ビッグ・ラングは、ビッグロにAdユニット（Ad = Ammunition Depot / 可搬補給廠）を接続した超巨大MAであり、最前線における味方機への補給や修理を目的としていた。そのサイズはムサイ級軽巡洋艦に匹敵し、確認されている限り、一年戦争最大の機動兵器であった。ア・バオア・クー戦でEフィールドに配置されたビッグ・ラングは、モビルポッド・オッゴへの補給や支援を行い、防衛戦力の中核を務めた後、離脱艦隊の支援中に撃破されている。

このほかにもビッグロの直接発展機として、攻撃力と防御力を強化

全高：138.0m（全長：203.0m／全幅：139.1m）

乾重量：12,000t（標準装備重量：17,900t）

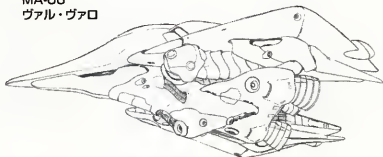
ジェネレーター出力：18,100kW（ビッグロ・ユニット熱核エンジン）

最大ブースト推力：4,600t（アーマー＋ホリゾン両ブースター使用）

装甲材質：不明

兵装：大出力メガ粒子砲／ミサイルランチャー×8／ガトリング砲×2／ビーム攪乱弾発射筒×4／3連装大型対（宇宙）艦ミサイル×2

MA-06  
ヴァル・ヴァロ



全長：68.0m  
 本体重量：254.1t（全備重量：379.8t）  
 ジェネレーター出力：26,030kW  
 スラスター推力：720,000kg  
 装甲材質：ガンダリウム合金  
 兵装：大型メガ粒子砲／ミサイル・ポッド×2／  
 対空ビーム・ガン×2 / 110mmバズカン砲×4／  
 プラズマ・リーダー×3

した「MA・05Mビグロ・マイヤー」が開発されたとの説もある。また、この機体は、ZEONIC社製といわれるなど不明瞭な点も多い。

一年戦争後期には、ビグロの基本設計を色濃く受け継いだ「MA・06

ヴァル・ヴァロ」も試作されている。ヴァル・ヴァロは、ビグロとほぼ同じ機体構造を採用するとともに、基本スペックを大幅に向上させているが、その仕様は拠点制圧用であった。拠点制圧任務に対応する

ため、対空ビーム・ガンや110mmバズカン砲といった補助火器が増設されたほか、アツザム・リーダーと同系列の地域制圧兵器プラズマ・リーダーを装備した。一年戦争には投入されなかったようだが、デラーズ紛争時に月面都市フォン・ブラウンでその姿が確認されている。ほかにもビグロをベースに開発された機動兵器として、水中専用MAの「MA・07グラ

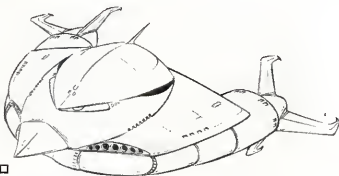


機首下部に開閉式カバーを備えるメガ粒子砲が装備されている点など、各所にビグロからの設計の継承が見受けられる。



ヴァル・ヴァロは近接戦闘用として、大型のクロー・アーム2基を備えている。これは後述のグラブのそれに似た構造だった。

全長：40.2m  
 本体重量：324.1t（全備重量：793.7t）  
 ジェネレーター出力：11,000kW  
 スラスター推力：不明  
 装甲材質：不明  
 兵装：ブーメラン・ミサイル×2/  
 7連装ミサイル・ランチャー×2/  
 腕部クロー



MAM-07 グラブロ

「プロ」が知られる。キャリフォルニア・ベースの艦艇用ドライドックに生産施設が設けられたグラブロは、ビグロをベースに一カ月半で開発が終了したとされる。なお、総生産機数は3機といわれる。水中用という仕様上、メガ粒子砲は搭載されなかったが、多数のミサイルを装備し、海中や海上は当然のこと空中の目標すら攻撃可能であった。また、熱核水流ジェットにより高い機動性を誇った。なお、格闘攻撃用のクローは、水の抵抗を軽減するため、航行時には後方に向けられる。ヴァル・ヴァロのクローアームも同様の収納ギミックを持つが、これはグラブロの影響と考えられる。メキシコ湾での試験を終えたグラブロは大西洋を中心に配備され、終戦までに1機が失われ、残りの2機も終戦時に地球連邦軍に接収されたといわれる。



ビーム・ライフルを腕部で防ぎながらガンダムを追い詰めるグラブロ。水中では他を圧倒する性能を発揮した。



ブーメラン・ミサイルと呼ばれる垂直発射式ミサイルを装備しており、水中からの対空、対艦攻撃を得意としていた。

## MA・08 ビグ・ザムの開発と構造

「MA・08 ビグ・ザム」は、ジャブロー攻略用の大型MAとして試作された機体である。

戦略攻撃用のビグ・ザムは、MAの中でも高級機とさ

れ、1機当たりのコストはムサイ級2隻分に相当するといわ

れている。胴体に一

対のAMBAC肢

を搭載するスタイ

ルは、ビグロと似

ているが、重量に

対するスラスタ

推力が低く、AM

BAC肢は脚部に

相当する構造であ

るなど、ほかのM

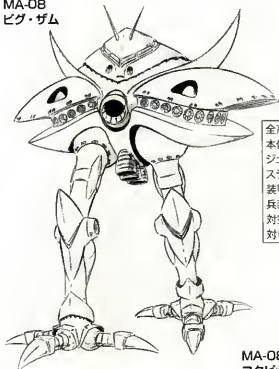


複数のメガ粒子砲による火力はMAの中でも突出して高く、特に大型メガ粒子砲は凄まじい威力を有していた。

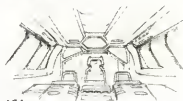


ビグ・ザムの1フィールド・ジェネレーターは、戦艦艦艇の集中砲火を完全に防ぐほどの防御力を発揮した。

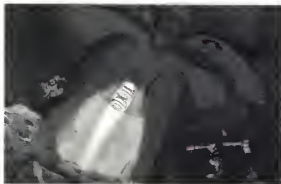
MA-08  
ビグ・ザム



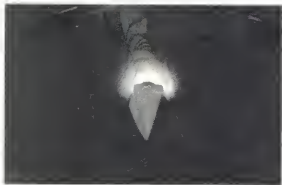
全高：59.6m  
 本体重量：1,021.2t  
 ジェネレーター出力：140,000kW  
 スラスタ推力：580,000kg  
 装甲材質：不明  
 兵装：大型メガ粒子砲／メガ粒子砲×26／  
 対空ミサイル×6／  
 対ビーム用電磁波膜（1フィールド・ジェネレーター）



MA-08 ビグ・ザム  
コクピット



胴体下部（股関節部分）に3基の推進用スラスター・ノズルを備えるが、機動性は皆無で鈍重な機体だった。



脚部の爪状突起は対空ミサイルになっており、死角となる機体下方からの敵機に備える設計がなされている。

Aとは明らかに異なる性能傾向を持っていた。これはジャブロー攻略用として開発されたこと、つまり重力下での運用を想定したためと考えられるが、宇宙戦にも対応しており、MAとしては珍しい大気圏内外両用機となっていた。

ビグ・ザムのもうひとつの特徴が、攻撃力と防御力を極限まで追求した点である。

ビグ・ザムは、胴体中央に出力13.9 MWの大型メガ粒子砲を搭載、さらに胴体を取り巻くように26門のメガ粒子砲（出力は各2.1 MW）が設置されていた。これに加えて、格闘攻撃用を兼ねる脚部に6発の対空ミサイルが装備されるなど、MAの中でも突出した火力を誇り、単独で艦隊規模の敵を相手にすることも可能であった。

防御力の中核を占めるものが、宇宙戦艦のメガ粒子砲すら防ぐ、Iフィールド・ジェネレーターである。地球連邦軍のMSはビーム兵器を主兵装としているため、その効果は劇的で、また実体弾を想定

した装甲防御力も高度なものだった。

これらの多数のメガ粒子砲、そしてIフィールド・ジェネレーターを稼働させるため、ビグ・ザムは4基の超大型熱核反応炉を搭載しており、そのジェネレーター出力は合計14万kW、つまりガンダムの百倍以上にも達していたのである。しかし、放熱問題との兼ね合いもあって、フル稼働時の戦闘行動時間は20分程度しかなかった。しかし、これはあくまで試作機のビグ・ザムの話だとされる。

量産仕様機の行動時間は10時間以上で、ミノフスキー・クラフトによる飛行能力も持つといわれ、12機の量産仕様機を投入したジャブロー強襲も計画されていたといわれる。

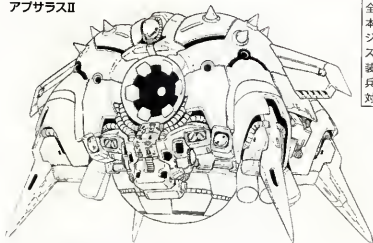
## アプサラス・シリーズの開発と構造

「アプサラス」（型式番号は不明）は、ビグ・ザムとは異なる開発系列に属するジャブロー攻略用MAである。

ギニアス・サハリン技術少将の指揮の下、アジア地区のラサで開発されていたアプサラスは、大出力メガ粒子砲とミノフスキー・クラフトを装備しており、アッザムや量産仕様機のビグ・ザムに近い発想のMAといえた。

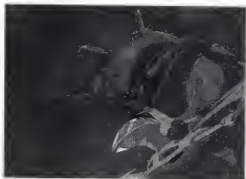
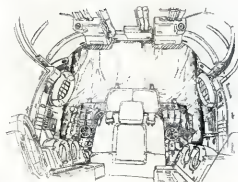
アプサラスは、大陸間弾道弾のような軌道と速度でジャブロー上空に移動し、地下の基

## アブサラスII



全高：不明  
 本体重量：不明  
 ジェネレーター出力：不明  
 スラスター推力：不明  
 装甲材質：不明  
 兵装：大型メガ粒子砲／  
 対人兵器

## アブサラスII コクピット



重力下での飛行テストを行うアブサラスI。しかし、開発段階ではミノフスキー・クラフトが不安定で、不時着事故を起こしたこともあった。

地中核を大出力メガ粒子砲で破壊するというコンセプトで設計されていた。そのため、アブサラスのメガ粒子砲はMA用としても極めて強力で、核攻撃にも耐えるジャブローの岩盤を貫通可能と試算されていた。搭載されるミノフスキー・クラフトも突出した飛行性能を有し、弾道軌道を取ることで地球上の裏側からでも短時間でジャブローに到達可能であった。しかも、その突入速度はマッハ11以上で、シミュレーションの結果、軌道上の地球連邦軍宇宙艦隊とジャブローの防空網を併用して

MS以前の兵器

MSの誕生

MSの実践運用

開発 局地戦用MSの

開発 次期主力MSの

ニュータイプ  
専用機の開発

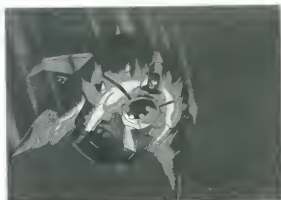
MAの開発

も、阻止不可能と判定された

こうした仕様から、アプサラスはメガ粒子砲とミノフスキー・クラフトが最重視され、飛行に不要なAMBAACシステムは搭載されず、センサー系やランディングギアはザクⅡから流用するなど、主要ユニット以外は徹底した簡略化が図られていた。この

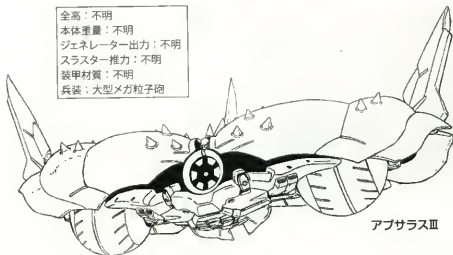


その巨体を飛行させるミノフスキー・クラフトは、機体周囲の地表を吹き飛ばすほどの出力を有していた。



地球連邦軍のシミュレーションでは、軌道上の艦隊を突破してジャブローを強襲するアプサラスⅡの運用が試算された。

全高：不明  
本体重量：不明  
ジェネレーター出力：不明  
スラスター推力：不明  
装甲材質：不明  
兵装：大型メガ粒子砲



アプサラスⅢ





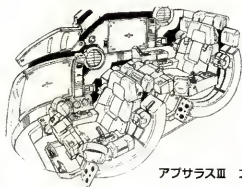
メガ粒子砲を発射する際には、2基のミノフスキー・クラフトを下方に降ろして機体を安定させる。



アプサラスの開発はラサのジオン公国軍鉱山基地で進められ、計画の推進がすべてに優先された。

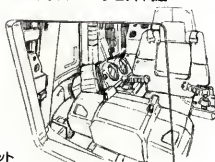
結果、アプサラス（メガ粒子砲閉鎖型はアプサラスⅠ、改修された開放型はアプサラスⅡとも呼ばれる）での本格的な試験開始から二ヵ月未満という短期間で、完成形であるアプサラスⅢがロールアウトしている。

アプサラスⅢは、2基のミノフスキー・クラフトとリック・ドム3機分のジェネレーターを搭載、さらに集束と拡散に変更可能な大型メガ粒子砲による多目標同時攻撃能力を持ち、一年戦争の機動兵器の常識を超える火力と機動性を有していた。



アプサラスⅢ コックピット

アプサラスⅢ コックピット周辺



# アクシズの高性能大型MAノイエ・ジール

開発コストの高騰や運用形態が限定されるフォーマツトなど、様々な問題を指摘されたMAは機動兵器の主流にはならなかった。この傾向は一年戦争後も変わらなかったが、MS以上のパイロードによる高性能は魅力的であり、一年戦争後もMAの開発は続けられた。

MAを生み出したジオン公国の後継組織、アクシズで

も一年戦争直後から新型MAの開発が実施され、ジオン公国軍時代から開発されていた「AMA・00GRゼロ・ジ・アール」をはじめとする大型

MAがロールアウトすることになった。

そうした中、U.C.

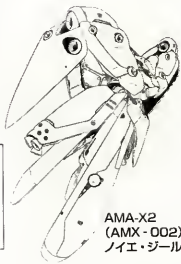
0080年代前期にアクシズが試作したMAが「AMA・X2 (AMX・002) ノイエ・ジール」であった。



肩部ユニットの偏向メガ粒子砲をはじめ、機体各部に無数の兵装を備えるノイエ・ジールは、非常に高い火力を有していた。



デラース紛争の終盤にはコロニーの追撃にあたった地球連邦軍艦隊を単機で殲滅し、その圧倒的な戦闘力を誇示した。



AMA-X2  
(AMX-002)  
ノイエ・ジール

全高：不明（全長76.6m）  
本体重量：198.2t  
ジェネレーター出力：75,800kW  
スラスター推力：1,938,000kg  
装甲材質：チタン合金セラミック複合材  
兵装：メガカノン砲／偏向メガ粒子砲／  
有線クロー・アーム／フィールド・ジェネレーター



ビーム・サーベルを装備することで、従来のMAの弱点だった近接戦闘能力がカバーされていた。



クロウ・アーム  
展開図

ノイエ・ジールはビグ・ザムに匹敵する機体サイズを誇る宇宙用MAで、多数のメガ粒子砲やミサイルによる絶大な火力、メガ粒子砲を無効化するIフィールド・ジェネレーターを中心とした防衛力、大容量プロペラントタンクと高推力スラスト群がもたらす大推力を有する超高性能機となっていた。これに加えて、それまでのMAに不足していた対MS格闘能力を強化するため、有線クロウ・アーム（サイコミュー制御かは不明）と4本のサブ・アームに、ビーム・サーベル兼用メガ粒子砲を搭載していた。

これらの装備により、ノイエ・ジールは単独でも艦隊規模の敵をも撃破可能な戦闘能力を獲得した。しかし、有線制御式を含む多数の兵装と機体の同時操作は、パイロットへの負担が大きいため試作されただけに止まり、「星の屑」作戦時にデラズ・フリートに提供された1機のみが知られる。また、ノイエ・ジールは「NZ・333 a・アジール」などのネオ・ジオン系MAに大きな影響を与えたと考えられている。



サブ・アーム  
展開図



Iフィールド・ジェネレーターはガンダム試作3号機のメガ・ビーム砲を無効化するほどの性能を有する。

# MA特有の絶大な攻撃力と白兵格闘戦で見せた脆さ

## 戦術兵器としてのMAと対MS戦闘

ビグロに代表されるMIP・XI系列のMAの多くは、MS同様に戦術レベルでの攻撃や戦闘を前提とした機体であり、戦果を挙げることでも多かった。全領域汎用、支援、火器であるMAも、キャノン・タイプMSのような支援用機動兵器ではなく、その主な任務は攻撃や戦闘であった。

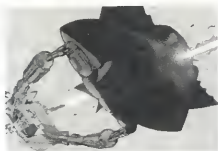
ここである「攻撃」とは相手に一方的にダメージを与えることで、「戦闘」は相手と打ち合うことを指す。

この法則に則るなら、一撃離脱戦法を得意とするビグロは「攻撃」兵器としての側面が強いということになる。

しかし、自らに有利な位置を確保するために、機動力を駆使した占位合戦も繰り広げる（その過程で打ち合いが起ることもある）こともあるため、そ



ガンダムと交戦したトクワンのビグロは、一撃離脱戦法を徹底して戦闘を有利に運ぼうとした。



トクワン機はクローに接触したガンダムにとどめを刺そうとしたが、逆にビーム・ライフルで撃破された。

の意味では「戦闘」兵器の要素も持っている。

これに対してMSは、兵装やオプションによってバランスが大きく変化するため、戦闘兵器、攻撃兵器の両方にもなり得るが、基本的には戦闘兵器としての傾向が強いのは確かである。

このためMAは、自らの攻撃兵器としての特性を活かすために一撃離脱に拘り、MSは戦闘兵器としての性能を発揮できる格闘戦を志向する。特にビーム・サーベルなどを用いる格闘戦になれば、MSの優位は極めて大きくなる。MAもクローなどの格闘兵装を装備するが、これは格闘「攻撃」用の機構であり、MSのような相手と切り結ぶ格闘戦には向いていないのである。

また、格闘戦にならなくとも至近距離での戦闘は、兵装の自由度が高く、小回りが利くMSに有利だといえる。これを理解していたMAパイロットは、MSとの近接戦闘を可能な限り避けようとした。

ビッグロのパイロットとして知られるトクワン少尉やグ



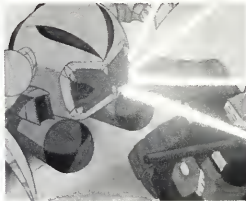
グラブロは脚部を破壊したことでガンダムを逃がし、格闘戦に持ち込まれた末にビーム・サーベルの一撃を受けて撃破されている。



フラナガン・ブーンのグラブロは、ガンダムを水中戦に引き込んで圧倒し、クローで捕縛することに成功して撃破寸前まで追い込んだ。



ガンダムと交戦したとされるアッザムも、他のMAが撃破された例と同じく、接近戦に持ち込まれて機体を損傷し、撤退を余儀なくされたという。



ザクレロはデミトリーが搭乗して無断出撃したが、ハヤト・コバヤシのガンタンクに接近戦を許すなど、格闘性能の低さを露呈したといわれている。

レニス・エスコット中尉らは、この点に留意しており、一撃離脱を中心とした戦術を取っていた。実際、トクワ少尉は一撃離脱戦法を用い、ガンダムを撃破寸前まで追い込んだが、クローに捕らえたガンダムをそのまま攻撃しようとしたため、反撃を受けて撃墜された。グレニス中尉も、同様の状況でMSに敗れたといわれている。

フラナガン・ブーンが駆ったグラブロも、対艦・対空攻撃用としては極めて強力であったが、水中専用兵器故に、それまで対MS戦闘を経験しておらず、ガンダムとの格闘戦に撃破されている。

また、性能傾向が著しく異なるMSとの共同運用が難しかったこと、規格外のサイズと形状ゆえに運用母艦が限定されるといった問題もMAには指摘されている。

しかし、MS用ビーム兵器が普及し始めた一年戦争末期にあっても、高火力と大進力に支えられたMAが、強力な兵器であることに変わりはないのである。

MS以前の兵器

MSの誕生

MSの実践運用

局地戦用MSの開発

次期主力MSの開発

ニュータイプ専用機の開発

MAの開発

## 戦略攻撃用MAの活躍と弱点

ビグ・ザムやアプサラス・シリーズに代表される戦略攻撃用MAは、絶対数こそ少ないが、その活躍は伝説的なものとなっている。

絶対的な攻撃力と防御力を持つビグ・ザムは、ソロモン戦終盤、ドズル・ザビ中将によつて実戦に投入され、地球連邦軍第2連合艦隊旗艦「タイタン」を含む艦艇を9隻、MSを21機、戦闘機を1機、撃破した。Iフィールドで艦砲射撃をはね返しながらか、敵艦隊中枢に突撃し、無数のビーム砲で艦隊を殲滅した。これは、MAの威力を見せ付けた戦いとして有名である。



アプサラスのジャブロー攻撃をシミュレートした映像。メガ粒子砲が地表面を貫通して基地を破壊すると想定された。



ソロモン戦のビグ・ザムは、地球連邦軍艦隊の只中に突入し、メガ粒子砲の一斉発射で大打撃を与えている。



メガ粒子砲を発射するアプサラスⅢ。この一撃で鉱山基地周辺に展開する地球連邦軍MS部隊が壊滅状態に陥った。

ラサ基地を巡る戦闘の最終局面で投入されたアプサラスⅢも、基地を包囲する地球連邦軍極東方面軍に攻撃を繰り返し、旗艦のビグ・トレイ級陸戦艇やガンダム・タイプを含む多数のMSを撃破している。しかし、それと同



肉薄したガンダムに対してビグ・ザムの火力は機能せず、格闘戦に持ち込まれた結果、撃破されている。一年戦争初期のMSと艦艇の力関係に近い



スレッガー・ロウのコア・ブースター（Gファイターともいわれる）の特攻を受けるビグ・ザム。これで生じた隙につけ込まれ、ガンダムの接近を許した。

時に弱点も露呈している。

特に問題とされたのは、通常のMA以上にMSの格闘攻撃に弱いということである。実際、ビグ・ザムもアプサラスⅢもMSの格闘攻撃で撃破されている。しかし、戦略兵器であるこれらのMAに、対MS格闘能力を求めるのは無理があるため、MSを接近させないか、どのような防衛網を形成するかという運用面での問題として考えるべきである。

その一方で、バックアップ体制を含めた運用システムの構築、国家戦略における戦略攻撃用MAの位置付けの明確化、さらに例えば戦略攻撃用MAの必要性といった、軍事的な問題もある。



アプサラスⅢは最終的にガンダムEz8の攻撃をコクピットに受けて撃破されている。接近したMSに対しての脆さを露呈した結果だったといえる。



アプサラスⅢはメガ粒子砲の第2射を行う前にジム・スナイパーに接近され、ミノフスキー・クラフトを破壊されて一時的に行動不能に陥った。





# MSの白兵戦能力を盛り込んだ 新世代機動兵器の雛形、可変MA

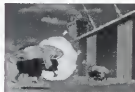
一年戦争後のMA開発は、ノイエ・ジールのような直接発展型だけでなく、RX-78GP03ガンダム試作3



Asshimerが変形に要する時間は0.5秒で、瞬時にふたつの形態を切り替えることによる柔軟な戦法は大きな優位性となった。



Asshimerはビーム・サーベルなどの格闘戦用兵装を持たなかったが、頑強な構造でMSとの接近戦もこなす性能を持っていた。



性能とコストのバランスに優れたAsshimerは可変MAの成功例であり、量産されて地球連邦軍ダカール基地などに配備された。

号機のように、MSとの融合を目指した方向も模索された。

MAとMSの融合は、MAの欠点であった対MS格闘能力や汎用性の不足と、MSに指摘された戦闘行動半径の狭さを、一挙に解決する手段と考えられたのである。

この一環として、地球連邦軍のニュータイプ研究所を中心に開発された兵器が、MSへの変形機構を有するMA、つまり可変MA (Transformable Mobile A.R.M.O.U.R. = T.M.A.とも呼ばれる) であった。また、サブ・フライト・システムの性能への不満も、可変MAが開発された要因のひとつといえる。

こうして可変MAの開発は進められ、U.C. 0085、高度な空戦能力を持つ「NRX-044 アッシマー」を生み出している。その後、グリプス戦役期には超高機動機の

「AMA・01X ジャムル・フィン」が可変MAに分類されているが、これは巨大MAからの設計変更によって、結果的に可変機構を与えられたものである。

可変MAは、旧来の兵器分類の垣根を取り払ったが、よりコンパクトな可変MSの実用化、そして大型かつ複雑な構造ゆえの高コスト化などが問題となり、次第のその姿を消していった。



変形してガンダムMk-IIを振り払うギャブラン。可変MAの場合、MSの接近を許しても、変形によって危機を脱することができた。



ORX-005 ギャブラン  
(上:MS形態 下:MA形態)

「ORX・005 ギャブラン」、MS形態の全高が40mにも達するサイコミュ搭載機、「MRX・009 サイコ・ガンダム」といった強化人間用機動兵器が実用化された。

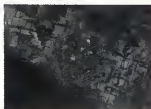
初期の可変式機動兵器のベースにMAが選ばれた理由として、MA

特有のペイロードが高性能化に有効と判断されたこと、通常サイズのMSを変形させるだけの技術的な下地がなかったことなどが挙げられる。

ネオ・ジオン（アクシズ）でも、



AMA-01X  
ジャムル・フィン  
(上:MS形態 下:MA形態)



サイコ・ガンダムの後継機として開発されたMRX-010 サイコ・ガンダムMk-IIは、のちにネオ・ジオンに運用された。

# ガンダムの本

## 機動戦士ガンダム画報

スタジオハードMX編

ファースト・ガンダムから第08MS小隊まで、1979-1999年の20年間に、映像化された全てのシリーズを完全網羅。シリーズ20周年の歴史を総括する究極のビジュアル年代記。

定価:2,520円(税込)

## 機動戦士ガンダム画報 2

ブレイクナビ編

1999年の「Vガンダム」から2008年「機動戦士ガンダム00」までを総括するだけでなく、外伝や玩具の世界、ガンブラのオールカタログまでを掲載した究極至宝のバイブル。

定価:2,730円(税込)

## パーフェクト・アーカイブ 機動戦士ガンダム 連邦SIDE

普遍的な魅力を放つファースト・ガンダムを、「連邦」視点で検証。新規収録の古谷徹氏や富野監督のインタビューから、今だからこそのガンダムの魅力を再発見できる1冊。

定価:1,680円(税込)

## パーフェクト・アーカイブ 機動戦士ガンダム ジオンSIDE

30年に亘り語り続けられてきたガンダム・サガ。その歴史の礎を築いた、ファースト・ガンダムの魅力を、「ジオン視点」で紐解く。ファーストの魅力を再発見できる1冊。

定価:1,680円(税込)

パーフェクト・アーカイブ  
機動戦士Zガンダム  
劇場版

「星を継ぐ者」「恋人たち」「星の鼓動は愛」、劇場版として蘇ったZガンダム3部作のキャラクター、メカ、ストーリー、その「新訳」のすべてをこの1冊に！

定価：1,680円（税込）

パーフェクト・アーカイブ  
新機動戦記ガンダムW

キャラ、MS、ストーリーの新視点の紹介、さらに声優&スタッフインタビューを新規収録。平成ガンダムの中でも一際光を放つ「ガンダムW」の魅力の全てを再検証。

定価：1,680円（税込）

パーフェクト・アーカイブ  
機動戦士ガンダム  
SEED

ガンダムの歴史に新たな1ページを刻んだ「SEED」シリーズ第一弾。争い止まぬ世界に抗い続けた少年たち——キラ、アスランが紡いだ物語の、真の集大成が、ここにあり！

定価：1,680円（税込）

パーフェクト・アーカイブ  
機動戦士ガンダム  
SEED DESTINY

未来のない平和か、平和のない未来か……。突きつけられた究極の問いに、シンが、アスランが、キラが選んだ答えとは!? SEEDシリーズが生んだ衝撃の続編がここに集約。

定価：1,680円（税込）

# 機動戦士ガンダム モビルスーツ開発秘録

平成21年7月2日初版第1刷発行

## ■編著

MEGALOMANIA：高村泰稔／杉山和繁／坂口徳仁

## ■デザイン

石橋成哲

## ■カラーイラスト

天神英貴：表紙・ピンナップ

大本海國：ピンナップ

## ■モノクロイラスト

木下ともたけ

## ■協力

株式会社サンライズ

発行人 高橋一平

発行所 株式会社竹書房

〒102-0072 東京都千代田区飯田橋2-7-3

電話 03-3264-1576（代表）

03-3234-6244（編集）

振替 00170-2-179210

竹書房ホームページ <http://www.takeshobo.co.jp>

印刷・製本 図書印刷株式会社

- 定価はカバーに表示してあります。
- 乱丁・落丁の場合はお取替えいたします。
- 本書は品質保持のため、予告なく変更や訂正を加える場合があります。
- 無断転載は禁止されています。

ISBN978-4-8124-3869-5 C0176

Printed in Japan

© 創通・サンライズ

竹書房文庫

機動戦士ガンダムの本

## 機動戦士ガンダム ガンダム最強伝説

MEGALOMANIA 編著

「MS・06F ザクⅡ」「MS・14 ゲルググ」「MSN・02 ジオング」――

ジオン公国軍が開発した脅威の人型機動兵器「モビルスーツ」

なぜ、モビルスーツが必要とされたのか？

そして、いかにして生まれ、どう戦ったのか？

一年戦争を戦ったジオン公国軍のモビルスーツの系譜を

リアルな視点で綴る究極の兵器読本がついに完成!!

装丁原画:天神英貴  
装丁:石橋成哲

MOBILE SUIT GUNDAM

機動戦士ガンダム UC.0079079  
**モビルスーツ開発秘録**

THE SECRET OF MOBILE SUIT DEVELOPMENT

機動戦士ガンダム 第7巻

角川書店



Taketsuka

X1-2

機動戦士ガンダム

MS モビルスーツ

開発秘録

MEGALOMANIA 編著 竹書房文庫

# 機動戦士ガンダム モビルスーツ開発秘録

U.C.0075-0079

MEGALOMANIA 編著





9784812438695

ISBN978-4-8124-3869-5

C0176 ¥667E

定価 本体667円+税



1920176006677

## THE SECRET OF MOBILE SUIT DEVELOPMENT

宇宙世紀0079.01.03——ジオン公国軍は地球連邦に対して、宣戦を布告。後にいう「一年戦争」が勃発する。その緒戦において、ジオン公国軍は画期的な新兵器「モビルスーツ」を投入する。全高18m大の人型機動兵器モビルスーツは、圧倒的な戦闘力を地球連邦軍に見せつけ、ジオン公国軍に勝利をもたらした。一瞬にして戦局を変え、戦争の歴史そのものを変えた、ジオンのモビルスーツ。——それはいかにして生み出され、そしてどう戦ったのか？

本書は、モビルスーツを「兵器」としての視点で徹底検証。誕生の時代背景から、開発と運用の歴史に至るまでを、本書描き下しイラストとともに完全収録する。究極のモビルスーツ読本がここに誕生!!

X1-2

機動戦士ガンダム

MS モビルスーツ

開発秘録



MEGALOMANIA 編著 竹書房文庫